小浜町文化財調査報告書第１集

朝　日　山　遺　跡

1981

長崎県小浜町教育委員会

小浜町文化財調査報告書第１集

朝　日　山　遺　跡

―― 長崎県南高来郡小浜町所在 ――

１９８１

長崎県小浜町教育委員会

あ　い　さ　つ

長崎県の南部に位置する小浜町は，秀峰雲仙を朝夕に仰ぎ，西方には美しい橘湾を望む景勝の地でありますとともに，豊富な湯量をほこる泉郷として古来，多くの人々の往来を見，豊富な海の幸に恵まれて，人の心の豊かなところであります。

昭和54年末から，同55年春まで，町内朝日山にあります朝日山遺跡に関する発掘調査を実施いたしましたところ，遠く二千年以上も昔の，縄文時代遺跡であることが判明し，日本でも農耕生活が始まろうかという，重大な時期と内容が確認されたのであります。

調査担当者の話によりますと，朝日山の古代人は，雲仙山麓の荒々しい自然のなかにあって，営々とした生活を営むつつましい人々であると同時に，生活具の材料を求めて，遠く西彼杵半島にまで往来した進取の気性の持ち主でもあった由であります。

今回の調査は，公営団地の用地造成にさきだって実施したものでありますが，遺跡内容の数々をおもうとき，現代に生きる私たちがやゝもすれば見失いがちなことを，もの言わぬ遺跡・遺物に教えられる気がしてくるのであります。私たちは，将来に遠く目を向けると同時に，すぎこし方，過去の歴史に教えを受けて常にふりかえってみる必要があると思うのであります。その意味で，土地開発が必要な一方，文化財を大切にしてゆかねばなりません。

今回，朝日山遺跡の調査報告書が刊行されるにあたり，関係者の努力に敬意をはらうとともに，この報告書が「現代人が歴史に何を学ぶか」ということについて，みんなで考えてゆく一助になれば地元として大変嬉しいことであります。

昭和56年３月

小浜町長　桑　戸　昌　丸

発刊にあたって

このたび，当町にあります朝日山遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。同遺跡は，縄文時代晩期の遺跡として，その重要性が指摘されていたところでありました。調査の動機になりましたのは，町営朝日山団地の用地造成計画でありますが，最重要な地点については現地がそのまま保存され，残余の部分について，記録上での保存をはかることになり，緊急発掘調査を実施したのであります。

調査は，昭和54年の暮の現地踏査，翌55年１月の試掘調査，同年２月と４・５月の本調査を合わせて，計60余日に及んだのでありますが，その間，県と町の関係者が最善の方途をもとめて，再三の協議を行ったことは申すまでもありません。

調査は，厳冬の最中にも行われ，わが国の稲作の起源問題にかかる重大な時期の遺跡であることが判明し，縄文時代の終末を示す土器や，生活の態様を示す石器群が出土し，炉の跡も検出されたのであります。

本書が，学会においては勿論のこと，ひろく朝日山遺跡の重要性を理解していただく資料になることは疑いないところでありますが，遺跡の最重要部分は現地がそのまま保存されており，今後の顕彰の方向について衆知を集めてまいりたいと思います。

最後に，調査の立案から実施，さらに本書の原稿執筆にいたるまで，かずかずの御配慮をいただいた県文化課の方々に深甚の謝意を表して発刊のごあいさつといたします。

昭和56年３月

小浜町教育委員会

教育長　津　田　庄　治

例　　言

1．本書は小浜町営住宅建設に伴う，長崎県南高来郡小浜町所在の朝日山遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．本書の内容は小浜町が事業主体となり，町単独事業として実施したものである。

3．調査は小浜町教育委員会のもとに，長崎県文化課が協力して調査の記録保存を行ったものである。

4．遺跡の対象面積1,150㎡のうち700㎡については協議の結果，公園化することで保存措置がなされた。

5．調査の写真撮影は，試掘およびC地点の調査を藤田が，B地点の撮影は高野が行った。報告書中の遺物の撮影は安楽が行った。

6．本書は分担執筆し，各項の執筆者は文末に記した。

7．図版作成は執筆者がそれぞれ行ったが，石器実測にあたっては竹内弘・村川逸朗の協力を得た。

8．本遺跡調査における出土遺物および図面類は，長崎県文化課が保管の任にあたっている。

9．本書の編集は，藤田・安楽によるものである。

調査関係者

小浜町教育委員会

杉　友雄（教育長）

田中正孝（教育次長）

金沢　隆（社会教育係長）

岩永判二

長崎県文化課

第１次試掘およびＣ地点の調査

正林　護（文化課指導主事）・藤田和裕（文化財保護主事）・永松実（当時県文化財調査員・現長崎市文化課）・村川逸朗(県文化財調査員）

Ｂ地点の調査

正林　護（文化課指導主事）・高野晋司（文化財保護主事）・安楽　勉（文化財保護主事）

調査協力者

岩永正雄・田中禎之助・辻本砂秀・金沢建二・早瀬軍次郎・田中金治・豊田堅・田中新作・田中駒吉・金沢カズ・松崎スエヨ・田中キシ子・豊田トシ子・辻本シマエ・平野イサ子・金沢美代子・馬場シズ子・金沢寿・宮崎容子・石崎セツヨ・田中ツルエ・増山タエ

調査内業者

江川利子・細田純代・上田みゆき

上記のほかにも町田桂三氏宅には，遺物や機材の保管など色々とお世話になった。また調査から報告書作成に至るまで，多くの方々の御支援をいただき，心より謝意を表します。

本　文　目　次

1．調査に至るまで……1
2．遺跡の立地と環境……3
3．調　　査
　試掘調査の概要……8
　C地点の調査概要……10
　B地点の調査概要……12
4．遺　　構……14
　1号炉址……14
　1号集石遺構……15
　2号集石遺構……16
5．遺　　物
　土　　器……17
　粗製土器……17
　刻目突帯文土器……25
　組織痕土器……27
　精製土器……33
　下川氏採集の遺物とその他の遺物……36
　石　　器……40
6．ま　と　め……61

挿　図　目　次

第１図　朝日山遺跡位置図……3
第２図　朝日山遺跡周辺の地形と遺跡分布図……4
第３図　朝日山遺跡周辺地形図……7
第４図　試掘区域図……8
第５図　試掘壙　土層図……9
第６図　調査区域図……10
第７図　Ｃ地点　土層図……11
第８図　Ｂ地点　土層図……13
第９図　第１号炉址実測図……14
第10図　第１号集石遺構実測図……15
第11図　第２号集石遺構実測図……16
第12図　粗製土器実測図(1)……19
第13図　粗製土器実測図(2)……20
第14図　粗製土器実測図(3)……21
第15図　粗製土器実測図(4)……23
第16図　粗製土器実測図(5)……24
第17図　刻目突帯文土器実測図(6)……26
第18図　組織痕土器実測図(1)……28
第19図　組織痕土器実測図(2)……29
第20図　組織痕土器出土遺跡分布図……30
第21図　粗製土器底部実測図(1)……32
第22図　粗製土器底部実測図(2)……33
第23図　精製土器(浅鉢類)実測図(1)……35
第24図　精製土器(壺類)実測図(2)……37
第25図　下川氏採集の土器およびその他の土器実測図……39
第26図　石斧実測図(1)……43
第27図　石斧実測図(2)……44
第28図　石斧実測図(3)……46
第29図　石斧実測図(4)……47
第30図　各種石器実測図……49
第31図　各種石器実測図……50

第32図　各種石器実測図……52
第33図　扁平磨製石斧実測図……54
第34図　石核実測図……54
第35図　石鏃実測図……56
第36図　各種石器実測図……58
第37図　剥片石器実測図……59

図　版　目　次

図版１　朝日山遺跡と周辺の空中写真……67
図版２　朝日山遺跡遠景……68
図版３　試掘調査風景……69
図版４　試掘壙　土層……70
図版５　試掘調査時の遺構・遺物出土状況……71
図版６　Ｃ地点　調査風景……72
図版７　Ｃ地点　土層(1)……73
図版８　Ｃ地点　土層(2)……74
図版９　Ｂ地点　調査風景……75
図版10　Ｂ地点　土層(1)……76
図版11　Ｂ地点　土層(2)……77
図版12　Ｂ地点　遺物出土状況(1)……78
図版13　Ｂ地点　遺物出土状況(2)……79
図版14　Ｂ地点出土の炉址……80
図版15　Ｂ地点出土の２号集石……81
図版16　粗製土器(1)……82
図版17　粗製土器(2)……83
図版18　粗製土器(3)……84
図版19　粗製土器(4)……85
図版20　粗製土器(5)……86
図版21　刻目突帯文土器(6)……87
図版22　組織痕土器(1)……88
図版23　組織痕土器(2)……89
図版24　粗製土器底部(1)……90
図版25　粗製土器底部(2)……91
図版26　精製土器（壺類）(1)……92
図版27　精製土器（浅鉢類）(2)……93
図版28　下川氏採集およびその他の土器……94
図版29　石　斧(1)……95
図版30　石　斧(2)……96
図版31　石　斧(3)……97

図版32　各種石器(1)……98
図版33　各種石器(2)……99
図版34　各種石器(3)・剥片石器(1)……100
図版35　剥片石器(2)……101
図版36　モデリングによる組織痕土器の陰陽像(1)……102
図版37　モデリングによる組織痕土器の陰陽像(2)……103
図版38　高校生の現地見学会とB地点の調査終了後の全景……104

表　目　次

第1表　周辺の遺跡地名表……3
第2表　組織痕土器出土遺跡地名表……30
第3表　出土石器の比率……40
第4表　石斧計測表①……45
第5表　石斧計測表②……48
第6表　各種石器計測表③……51
第7表　各種石器計測表④……53
第8表　石器計測表⑤……55
第9表　剥片石器計測表⑥……55
第10表　剥片石器計測表⑦……57
第11表　剥片石器計測表⑧……60

1．調査にいたるまで

昭和54年12月１日，長崎県文化課調査員町田利幸より報告があり，小浜町朝日山において町営住宅の建設予定があり，一部工事に着手されている，との連絡が県文化課になされた。現地に近接して，全国遺跡地図長崎（昭和51年文化庁刊）に30―71小浜遺跡として収録されている遺物散布地があり，現地の小学校に表面採集遺物が保管されているなど，縄文晩期遺跡として周知されていた。また，当該工事予定地域も，現地一帯の地形状況よりして，遺跡包蔵状態が展開していることが十分に予察された。

一方，島原市と南高来郡16町からなる島原半島にはすぐれた縄文遺跡が多く，特に多くの問題点をもつ晩期後半の遺跡が注目されていた。礫石原（くれいしばる）遺跡（前掲地図31―11・12島原市），原山支石墓群（30―81・82・83北有馬町　国指定史跡），山ノ寺遺跡（31―49深江町）等がそれであり，これら重要遺跡群との関連ある遺跡の包蔵状態が予察された。

一方，当該工事は付帯道路新設工事を含めて約9,500㎡の範囲が予定され，76戸分４棟のアパート群と付帯設備が昭和56年度完工予定で計画が進められていた。

かかる状況下に，関係方面と遺跡包蔵予察地の取扱いについて早急に協議調整の必要が生じ，昭和54年12月，草木伐採のうえ，現地踏査を実施した。

1．現地踏査

昭和54年12月13・14の両日，長崎県文化課指導主事正林　護・同課調査員永松実が一部試掘と試錐を含めて，現地踏査を実施した。

現地は，柑橘等の畑と山林であるが，公有化（54年度）後，耕作はなされておらず草木繁茂のため，表面観察と採集が困難であり，一部試掘により土層と包蔵状態の存否確認を実施した。試掘可能の地点は一部の畑地を選んで実施したため，不完全なものであったが，縄文晩期遺跡を包含している点は明瞭に把握できた。

2．県文化課と小浜町の協議１

昭和54年12月17日，遺跡の取扱いについて県文化課と小浜町との間に協議が持たれ，①当該工事区域9,500㎡のうち，遺跡包蔵予察範囲約3,500㎡について，早急に遺跡包蔵範囲を確認する調査の必要があること。②そのための調査の経費・期間等を早急に試算する必要があること。③その結果にもとづいて，遺跡の保存ないし，緊急発掘調査（記録保存）の調査方途を検討すること。以上３点の協議合意が見られた。

3．範囲等確認調査

前述の協議と合意にもとづき，小浜町が事業主体となり，昭和55年１月７日～同月25日（16日間），文化課文化財保護主事藤田和裕・同課調査員永松実・同村川逸朗が試掘調査を実施した。

試掘壙は41箇所，計164㎡について実施したが，遺跡範囲は，約1,000㎡と150㎡の2地点計1,150㎡におよんでいることが判明した。但し，1,000㎡部分は工事設計との関係から，A地点(700㎡）とB地点（300㎡）にわけ，150㎡部分をC地点と呼びわけることにした。

この結果とともに，遺跡の包蔵地の取扱いについて，再度協議調整の必要があることを小浜町宛文書回答した。

4．県文化課と小浜町の協議2

遺跡包蔵範囲等確認調査の結果，縄文時代晩期遺跡の包蔵状態が明確になり，炉跡等を含む有力な遺跡内容をもつものであることが判明したため，試掘調査期間中の昭和55年1月22日，再度，遺跡の取扱いについて，県文化課と小浜町の間で協議がもたれた。その結果，①A地点(700㎡）については，公園化するなど，地形の現状等を損わない方向での活用をはかり，当該工事全体について設計計画を再検討する。②Bの部分（300㎡）については，昭和55年5月までに発掘調査を終るよう検討する。③Cの部分（150㎡）については，昭和55年3月まで，可及的速かに緊急調査実施の方向で検討する。④調査費については事業者（町）負担の方向で検討する。

という骨子の協議結果が得られた。

5．C地点の緊急発掘調査

第2回目の協議の線にそって，小浜町教育委員会が調査主体になり，昭和55年2月13日～同月28日の間，県文化課文化財保護主事藤田和裕・同課調査員永松　実・同村川逸朗によって緊急発掘調査が実施された。

6．B地点の緊急発掘調査

昭和55年4月8日～5月17日の間，C地点の場合と同様，小浜町教育委員会が調査主体となり，県文化課指導主事正林　護・同文化財保護主事安楽　勉・同高野晋司によって実施された。

以上が，朝日山遺跡緊急発掘調査にいたった経過の概要であり，調査全期間は現地踏査以来67日間，発掘面積は約650㎡，出土遺物総数約2,000点(縄文晩期)，検出遺構は炉址・集石遺構2基という内容であった。この間6ケ月におよぶ時間の経過があったことになるが，遺跡と工事とのかかわりが偶然の機に生じたものであり，開発工事計画についての事前協議がなかった点についての憾みは残るものの，事態の発端から緊急調査の実施に至るまでスムーズに進捗し得たことは評価されよう。

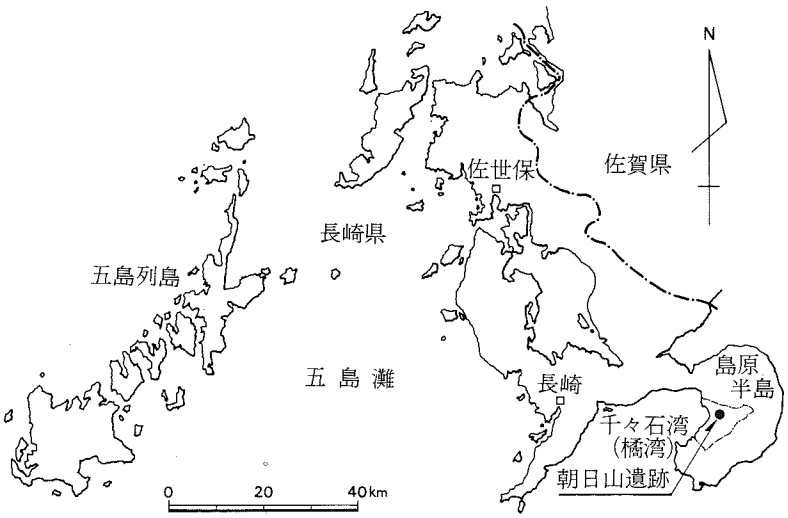
そこには，開発事業当事者と文化財担当部局との積極的な取組みがあり，特に，年度後半という悪条件にもかかわらず，調査費の負担をも含めて，事に処せられた小浜町長の英断には特記して敬意を表したい。それに加えて，遺跡の全包蔵範囲約1,150㎡のうち，A地点700㎡についての現地保存が実現し得たことは錦上花を添えるのたとえに価しよう。　　（正林）

2．遺跡の立地と環境

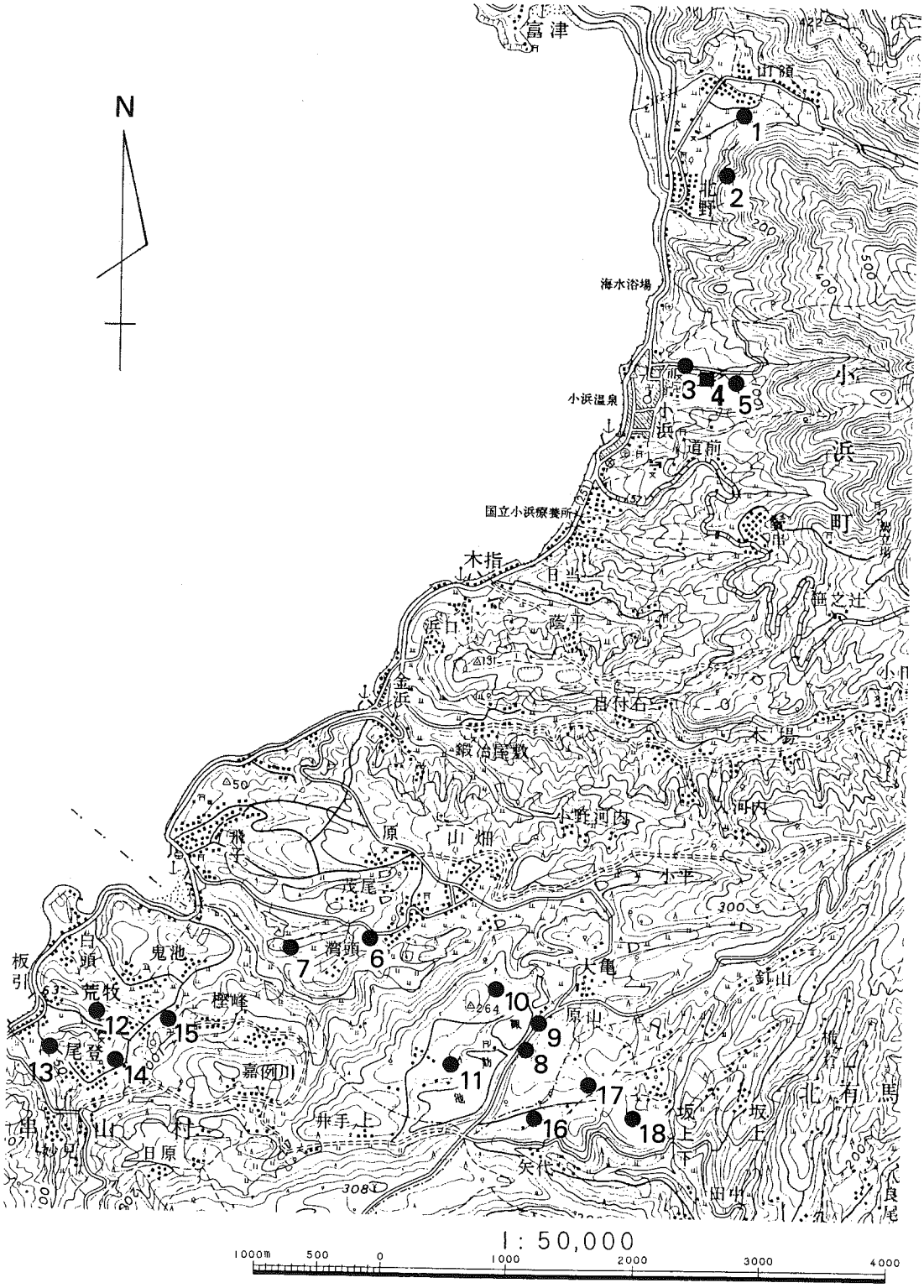
朝日山遺跡のある小浜町は，島原半島の西側に位置し（第１図），行政的には長崎県南高来（たかき）郡に属する。東には雲仙の山々がそびえ，西は千々石（ちぢわ）湾（橘湾）に面した東西約13km，南北約11kmほどの広さの，出湯の町として知られている。

島原半島は，雲仙火山群と南部の第三紀層をおおう溶岩台地群とによって形成され，（註１）その北西部の狭隘な愛野地峡で陸続きとなっている半島である。この半島は北・東側を有明海，南を天草灘，西を千々石湾によって囲まれ，東西約25km，南北約33kmほどの大きさである。半島のほぼ中央部に雲仙岳と総称される，標高1359.7mの普賢岳を主峰として，妙見岳，国見岳，野岳などの火山群がそびえ，その周辺にも絹笠山，眉山，九千部岳などの山岳がめぐっている。半島の北側から東側にかけては，雲仙岳が緩い傾斜で放射状に広がり，その先端は有明海に達して比較的単調な砂質海岸を構成している。この緩い傾斜の台地には，若い狭谷が刻まれ，これらによって形成された小扇状地は水田として利用され，海岸沖積地，干拓地の水田とともに半島内での多水田地帯となっている。これに較べ，半島の西側の景観はかなり異なり，絹笠山・九千部岳によってできたといわれる溶岩が海岸まで迫り，急な崖になって千々石湾に落ち込み，岩石の多い海岸線を形作っている。複雑な地形の中を，千々石・古賀・脇ノ谷・木指・金浜・川内・椎ノ木などの小河川が西流し，小扇状地を形成するものもあるが，いずれも広い平坦地を有するものは少ない。

周辺地域の遺跡について概観すると，小浜町の北部には遺跡が少ないが，第２図の北側に柏塚古墳・富津遺跡がある。（註２）１の山領遺跡は近年になって知られたもので，弥生式土器片・石包



第１図　朝日山遺跡位置図



第2図　朝日山遺跡周辺の地形と遺跡分布図

丁などが発見されており，雲仙の裾野を開析した河川によって形成された小平地を生活の基盤にしていたことが窺える。(註3) 3・4・5は，いずれも西に向いて伸びる丘陵の尾根上に位置し，時期的にも同じ縄文晩期のもので，一連の遺跡と考えられる。3の小浜小校庭遺跡では，昭和19年に旧小浜小学校の校舎建設の際に滑石製の石剣が出土したといわれている。(註4) 5は，小浜黒谷遺跡としたが，全国遺跡地図には小浜遺跡として収録されている。昭和36年に，日本考古学協会の西北九州総合調査特別委員会により，別府大学賀川光夫教授の担当で発掘調査がなされた所を指すが，地元ではこの一帯を黒谷(くろんたに)と呼んでいることもあって，ここでは小浜黒谷遺跡とした。(註5)

これより南側の4㎞ほどの間には遺跡は知られていないが，複雑な地形のせいもあり，立地条件が良くなかったものと考えられる。

6の湾頭遺跡は縄文晩期の散布地で，7の鬼塚古墳は円墳，8～11は諏訪池周辺の一連の遺跡で，先土器・縄文・弥生・古墳時代までの遺物散布地となっている。(註6) 12～15は南串山町内の遺跡で，12の門山遺跡には石棺が出土しており，13の遠目塚遺跡は大正末期に墳墓1基が発見されたといわれていたが，詳細は明確でなかった。しかし，昭和51年に出土した石棺の調査では，小形の内行花文鏡・鉄鏃・玉類が出土し，この付近一帯が古墳時代の群集墓地であることが判明した。14は西念坊古墳であるが，実体は判明していないといわれている。15の荒牧遺跡

第1表　周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代	備考
1	山領遺跡	小浜町山領	縄文・弥生	
2	塚畑古墳	〃　北野塚畑	古墳	全国遺跡地図(長崎県)
3	小浜小校庭遺跡	〃　北本町	縄文	
4	**朝日山遺跡**	〃　〃　朝日山	〃	**本書に報告分**
5	小浜黒谷遺跡	〃　〃　〃	〃	昭和35年，発掘調査
6	湾頭遺跡	〃　山畑湾頭	〃	全国遺跡地図(長崎県)
7	鬼塚古墳	〃　北串山鬼塚	古墳	〃　〃
8	諏訪池遺跡A	〃　大亀諏訪池	縄文・古墳	〃　〃
9	〃　B	〃　〃	先土器・縄文	〃　〃
10	〃　C	〃　〃	弥生・古墳	〃　〃
11	大畑遺跡	〃　大畑諏訪池	縄文・古墳	〃　〃
12	門山遺跡	南串山町	古墳	〃　〃
13	遠目塚遺跡	〃　尾登名乙	〃	長崎県文化財調査報告書 第35集　1978
14	西念坊古墳	〃　〃　大坪	〃	〃
15	荒牧遺跡	〃　荒牧名	〃	〃
16	原山第1支石墓群	北有馬町屋代原山	縄文	全国遺跡地図(長崎県)
17	〃　第2支石墓群	〃　〃　〃	〃	
18	〃　第3支石墓群	〃　〃　楠峰	〃	

は散布地(註7)。16～18は北有馬町の原山支石墓群である。この支石墓群は，昭和51年に保存管理計画が策定され，昭和54・55年度に環境整備事業が実施されている(註8)。この原山支石墓群は，すぐ西側の諏訪池周辺の遺跡と同じく，標高200～250mほどのなだらかな台地上に位置している。

朝日山遺跡は，島原半島の西側で，千々石湾が最も東側に入り込んで弓状となった小浜海岸を見おろす場所にある。標高40～45mで，西に約1/10の勾配で傾斜した斜面に立地している。遺跡からは，北方には千々石断層崖が明瞭に見え，西は千々石湾を越えて長崎半島(野母半島)が望まれる。

遺跡の現状は畑で，桧の植林がなされたり，果樹が植えられた所もあり，一部は荒地となっている。火山活動によって生じた巨大な岩石が散在しており，人力で移動可能な岩は畑の境などに移されていたり，まとめて寄せられたりしている。　(藤田)

註1　石井泰義　「島原半島における火山海岸の景域区分」日本地誌ゼミナール　Ⅷ　1975

2　全国遺跡地図　42　長崎県　1976

3　下川達彌　「長崎県小浜町の先史文化概観」町制50周年記念誌　町制おばま　1974

4　註3に同じ

5　鏡山　猛　「原生期の織布」九州考古学論攷　1972

6　註2に同じ

7　「遠目塚古墳の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県教育委員会　1978

8　「国指定史跡原山支石墓群　環境整備事業報告書」北有馬町教育委員会　1981

第3図　朝日山遺跡周辺地形図

3．調　　査

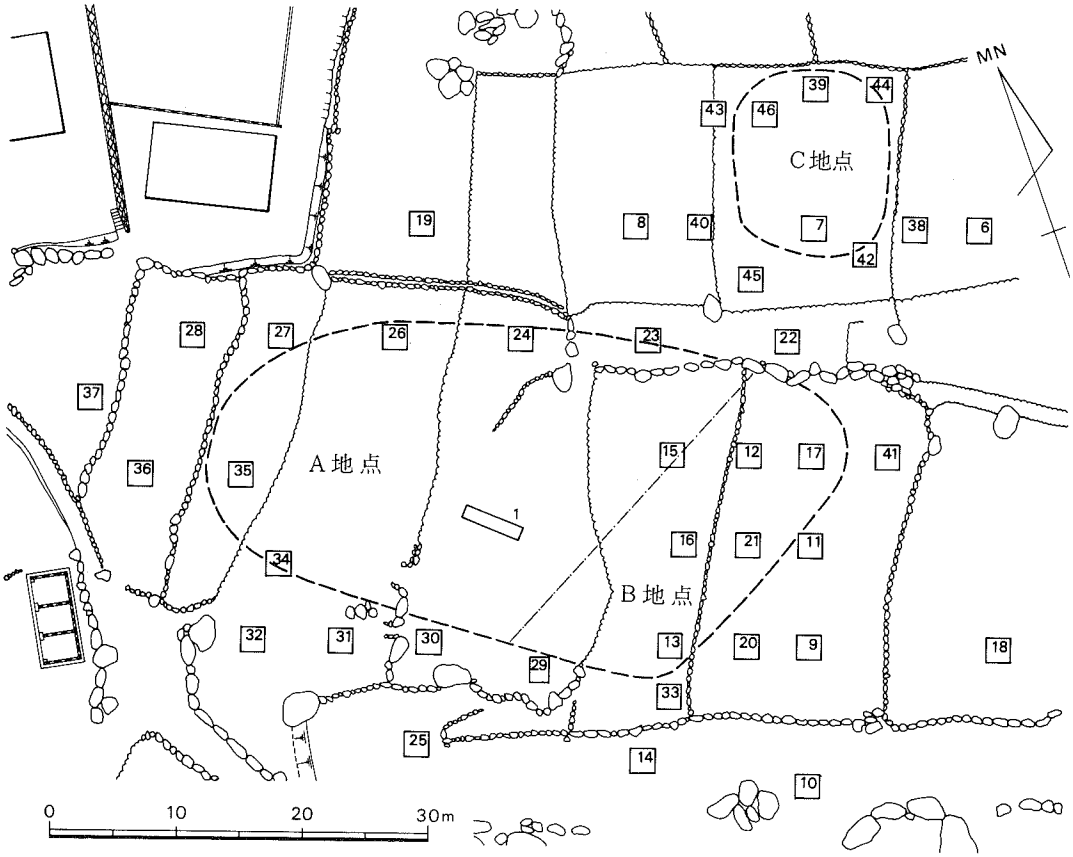
試掘調査の概要

第１回目の試掘調査は，昭和54年12月13・14日に行い，造成計画用地の南東部，標高49m ほどの畑に２箇所，中央部南側に1 箇所，同北側に１箇所，西側の標高42m ほどの所に１箇所，計５箇所の試掘を実施した。この結果，西側の第１試掘壙以外に遺物包含層は検出されず，遺構らしいものも確認できなかった。第１試掘壙からは縄文時代晩期の黒色磨研土器・刻目を持つ突帯文土器などのほか，蛇紋岩製の磨製石斧が出土し，この近辺を中心とする縄文晩期の良好な遺跡の存在が知られた。

第１回目の調査の結果をふまえ，遺跡の範囲をさらに詳しく確認するための試掘調査を，年が明けた昭和55年１月７日から同12日，同16日から25日まで計16日間実施した。

調査は，造成計画用地南西部の第１試掘壙周辺部を中心とし，斜面の等高線にほぼ直交する東西，平行する南北に近い基準線を設け，この線を使用した任意の位置に試掘壙を設定した。

この調査で検出した遺構には，第13試掘壙からの炉址と思われる焼土を取り囲む石組遺構が



第４図　試掘区域図

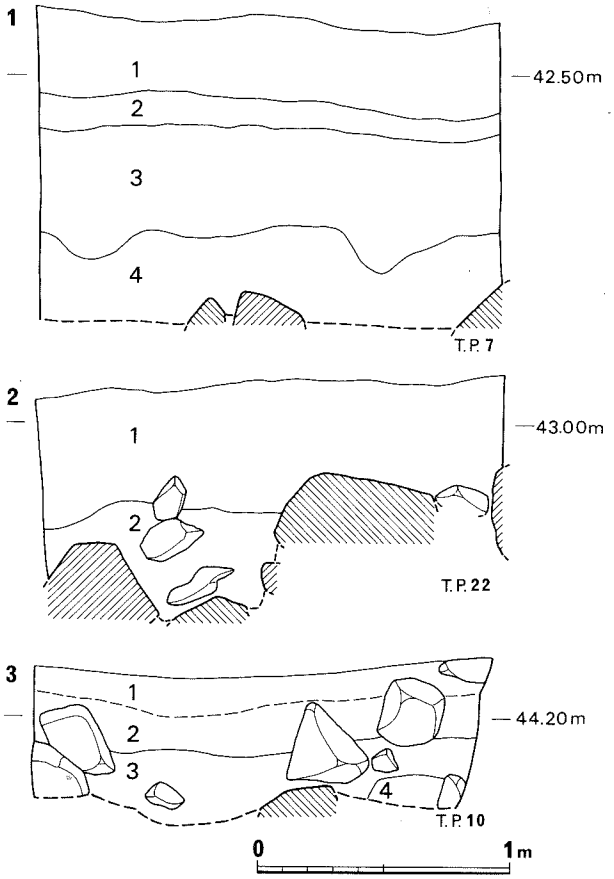
ある(図版５)。東側壁中に一部残っていたが，本調査を待つこととして埋め戻した。第７試掘壙・第16試掘壙からは組織痕土器を含む土器が出土し，遺物包含層のあることが判明した。第25試掘壙からは頁岩製の磨製石斧が出土したが，これは表土層からの出土である。第26試掘壙から黒色磨研の浅鉢の口縁部，第28試掘壙からは蛇紋岩製の磨製石斧が出土したが，いずれも攪乱を受けた層からの出土で，遺構の残存する可能性は少ないものと思われた。

さらに，造成工事進行との関係上，組織痕土器などの包含層を検出した第７試掘壙付近の状況を見るため，試掘壙を集中させてその広がりを調べた。結果は，第38，42，45，40，43の試掘壙からは包含層は認められず，第39試掘壙ではその北側に礫が多く，遺物もほとんど出土しなかった。

これらのことから，遺構，遺物の包含層の認められる部分，かなりの攪乱を受けた部分，遺物包含層の認められない部分が，かなり明瞭に判明した。それぞれを示す土層は第５図の如くである。１は，第７試掘壙に認められた土層で，第３層の黄褐色火山灰質土が主たる遺物包含層となっており，２層もかなり遺物は出土する。２層は３層の上面が攪乱されたものと考えられる。４層は指頭大の小礫を含む黒褐色土で，硬い層になっている。遺物は認められない。

２は第22試掘壙で，大小の礫が混在している。１層が厚いが，３層をかなり攪乱したものと思われる。２層は黄褐色土で，上方は火山灰質であるが下方ではやや粘性が感じられる。３は第10試掘壙で，ここにも大小の礫が混入している。１，２とも表土層であるが，１層が暗褐色，２層が褐色土層となっている。３，４層は地山で，３層は淡褐色，４層は灰褐色で小礫を含み，セメント状に固くしまっている。

以上の調査によって，遺跡は２箇所に存在することが確認された。すなわち，そのひとつは，最初の調査で判明した第１試掘壙を中心とし，第41，33試掘壙を結ぶ線の北西側で，第33，34，27，22の各試掘壙に囲まれた部分と，他のひとつは，第38，45試掘壙を線ぶ線の北側で，第45，



第５図　試掘壙　土層図

43，44，38の各試掘壙に囲まれた部分である。前者は，第４図に一点鎖線で示したように分け，西側をA地点，東側をＢ地点とした。Ａ地点は遺跡の中心と考えられる所であり，ここは将来とも緑地として保存されることになった区域である。Ｂ地点は工事の設計変更が不可能で，工事に際しては本調査が必要な区域である。他の，北側のひとつをＣ地点とした。　（藤田）

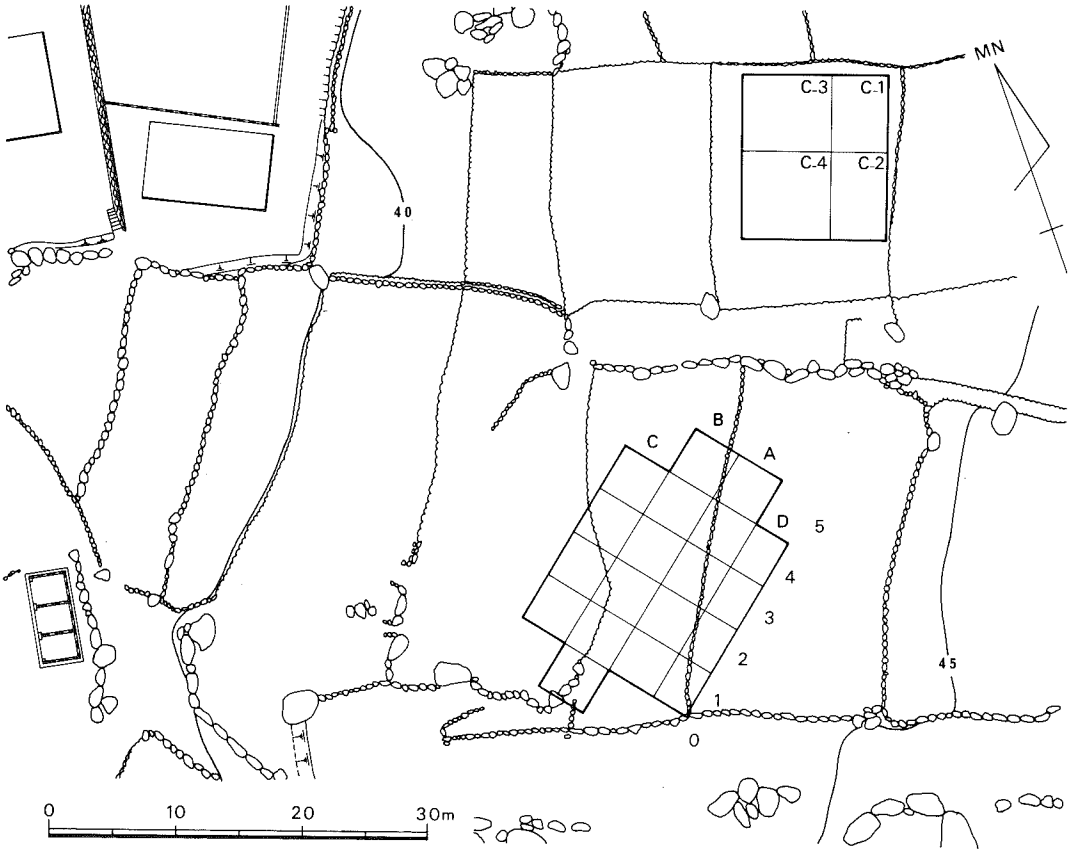
Ｃ地点の調査概要

Ｃ地点は，Ａ地点，Ｂ地点のすぐ北側の，一段低くなった場所にあり，幅約20m弱で北側はまた一段高く，西に向いて流れる一種の凹地となっている。Ｃ地点内のやや東寄りを標高43mの等高線が通っている。段々畑状の畑地であるが，現状は荒地となっていた。

調査は，昭和55年２月13日から同28日までの16日間，調査対象面積は13m×11.5mの範囲で実施した。まず，試掘調査時の基準線を使って東西11.5m，南北13mの範囲をＣ－１からＣ－4までの４区画に分け，Ｃ－１，Ｃ－２から調査にかかり，Ｃ－３，Ｃ－４の順に実施した。

土層（第７図，図版７・８）

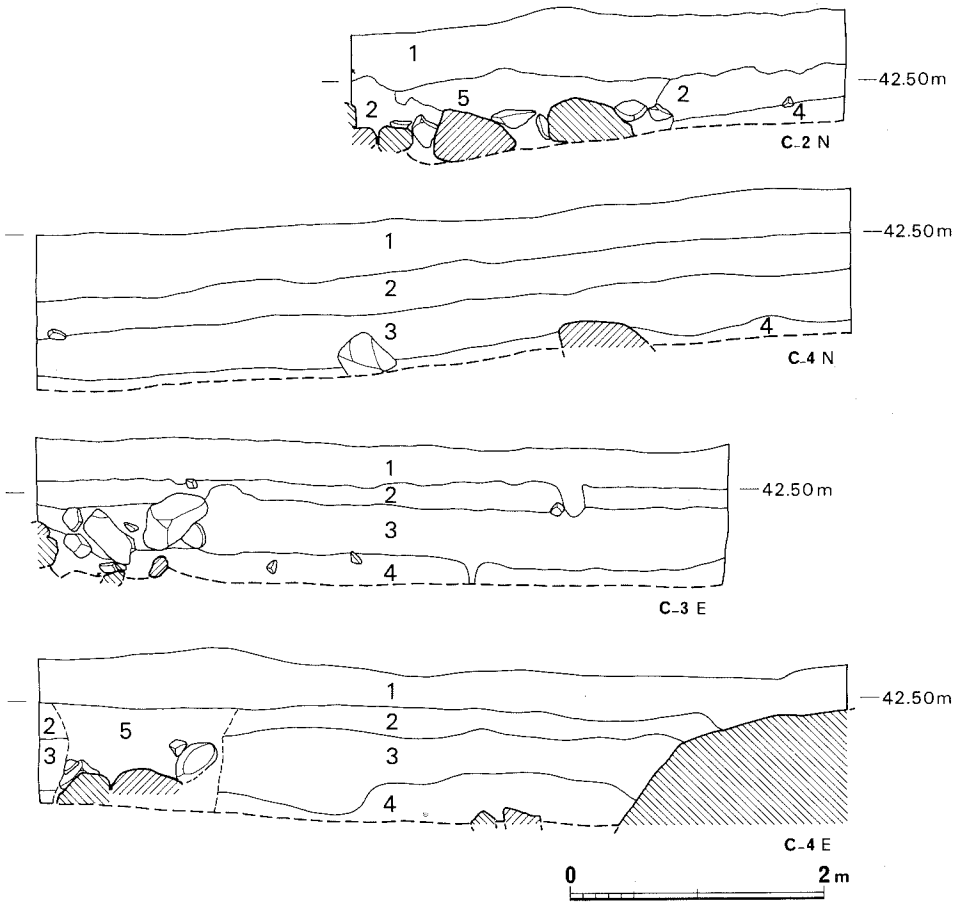
東西方向の11.5mでは，東側が0.45m高く，約1/25の傾斜で西側に傾き，南北方向13mでは，



第６図　調査区域図

南側が0.3ｍほど低くなって約1/40の傾斜となっている。

1層は表土で，厚い所で55cm，薄い所でも25cmある。荒地となっているため，表面近くは木・竹・草の根が密生している。黒褐色土で有機質を含み，指頭大の小礫を含んだ火山灰質土である。2層は暗黄褐色を呈し，1層より有機質が減少する。指頭大の小礫を含む火山灰質の土壌である。次の3層と表土層の混じったものと思われる。3層は黄褐色の砂質層で，これも小礫を含んでいる。この層が遺物包含層となっており，厚い所で70cm近い。この層は調査区の東側では消滅しており，西側でもやや減少する傾向が窺える。北側は礫が多くなり，包含層も減少し，南側は巨大な岩石に当ったので不明であるが，遺物の出土は少なかった。この層から礫が多くなり，人頭大のものから，かなり大きな岩石までが散在する。4層は無遺物層で，黒褐色の砂質土壌で，小さな礫を含んでおり固くしまっている。5層は攪乱層で，大小の岩石がつまっているが，これらの岩石の間が空洞になっている所もあり，攪乱を受けたのはさほど古い時期でないことを示している。近辺の畑の所有者によると，かつて，ここには涸川のようなく



第7図　C地点　土層図

ぼみがあって，いつのころか埋められたということである。この部分が5層の攪乱層になることは，ほぼ間違いないものと思われる。

遺物出土状況

遺物は，C－1区，C－2区からは少なく，C－3区，C－4区から多く出土した。遺物が出土するのは2層と3層からであるが，数的には2層からが多い。2層は，3層の上部が1層と混じったものと思われ，3層が本来の遺物包含層であり，その上面に遺物が多く集っていたものと考えられる。出土の際には，特定の区域に遺物が集中するような傾向は認められず，西側にゆるやかに傾斜する土層に沿うようにして，分散した状態で出土した。

出土した遺物には，多種の縄文晩期の土器，石器類があるが，詳細は，試掘調査の際出土の遺物・B地点出土の遺物とともに後述する。（藤田）

B地点の調査概要

B地点は，試掘調査において遺物が集中して認められ，炉址の出土した第13試掘壙を含む，工事区域の範囲内を調査対象とした。

期間は昭和55年4月8日から5月17日まで延べ33日間に及んだ。この間工事は着々と進行しており，試掘時の様相とはかなり違った地形を呈し，B地点にも多量の土礫が積み上げられ，それらを徹去した後にグリッドの設定を行った。従って工事区との関係もあり，試掘時のグリッド方向を無視する形で北東から南西にかけてを長軸として設定した。最初東西方向の傾斜に沿って4m×4mの面積でA・B・C列に，長軸を南から0→5とし，A－1・B－2……の記号で呼んだ。後にD列を3m×4mの面積で追加，発掘総面積は348㎡に達した。なお各列の5グリッドは工事により削平，攪乱されていた。

土層（第8図）

地形的には東西の面が山から海へ向って傾斜しており，南北にやや平坦である。しかし畑地として利用された関係で，境界には礫が積み上げられており，この部分については若干の攪乱を受けている。今回の調査では全グリッドの層位を記録の対象としたが，ここではB列東壁と各2グリッド北壁を標準的な土層として説明したい。

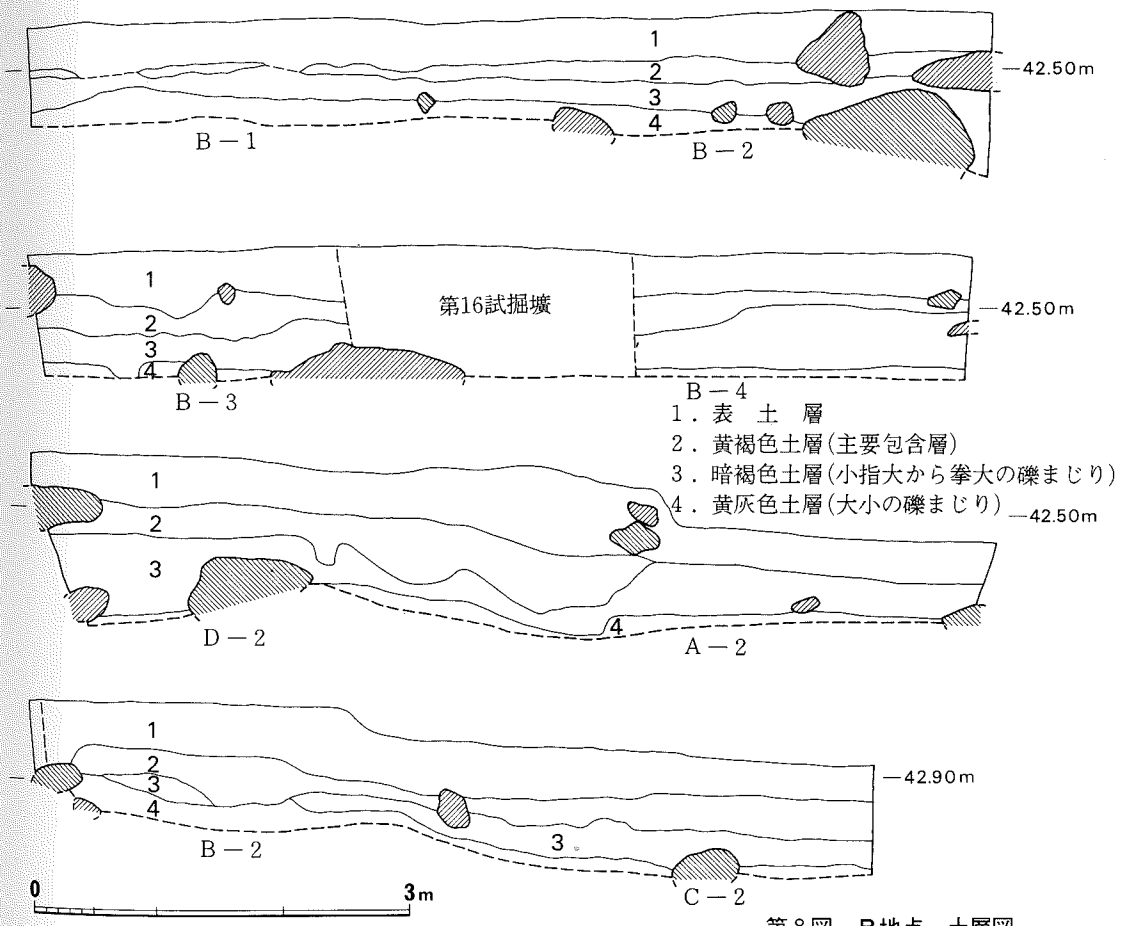
層位はある部分や，ブロック状に認められる層を除いて，標準的には4枚の層が観察される。1層は表土層で耕作を受けた層でもある。土質は有機質に富み火山灰質の黒色がかったサラリとした感触である。2層は黄褐色を呈し，小指大の礫を含みやや粘質がかっている。遺物はこの層からの出土が一番多く，主要包含層になっている。厚さは20cm～30cmに達する。3層は暗褐色土層で遺物を若干含むが，包含層として捉えることは出来ない。層中には小指大から拳大の安山岩礫を含み，粘性はあまり感じられない。4層は黄灰色を呈し，大小の礫を含み特に大きな礫もこの層では面積を大きくしている。この層からは遺物は全く認められない。大きな礫

は2・3層にも及んでいるが，調査はこれらの大礫を取り除きながら進められた。表土から4層掘り下げ面までの深さは約1m前後に達する。

遺構・遺物の出土状況

遺物の取り扱い方法は，平板実測によるドットマップ法によった。遺物の総数は先述した如くであるが，土器は粗製土器が多く精製土器は若干であり，完形品になるような大形の破片は殆ど皆無である。石器は土器に比較すると少量であるが，扁平打製石斧や磨製石器が目立つ。岩質は安山岩，蛇文岩を使用しており，黒曜石は剝片類に多い。ドットマップによる観察ではA・Bの2・3グリッドに遺物が集中する。

遺構は1号炉址がA－2，1号集石がA－1，2号集石がB－3グリッドに位置し，遺物の出土状況とほぼ合致する。B－0グリッドにおいては地山層まで浅く包含層は存在しない。従って遺物の集中する箇所は，遺構を伴いながら点在するものと思われ，昭和37年調査された本遺跡上方の小浜遺跡，また下方から遺物が採集され黒谷遺跡と呼ばれている地点も，広域的に考えれば一時代の流れの中に営まれた生活址ということができよう。　（安楽）



第8図　B地点　土層図

4．遺　　構

1基の炉址と2基の集石遺構が検出された。

第1号炉址（第9図，図版14）

調査区の南側，A－1区，A－2区にかけて出土したもので位置的には遺跡範囲の南限付近にあたる。

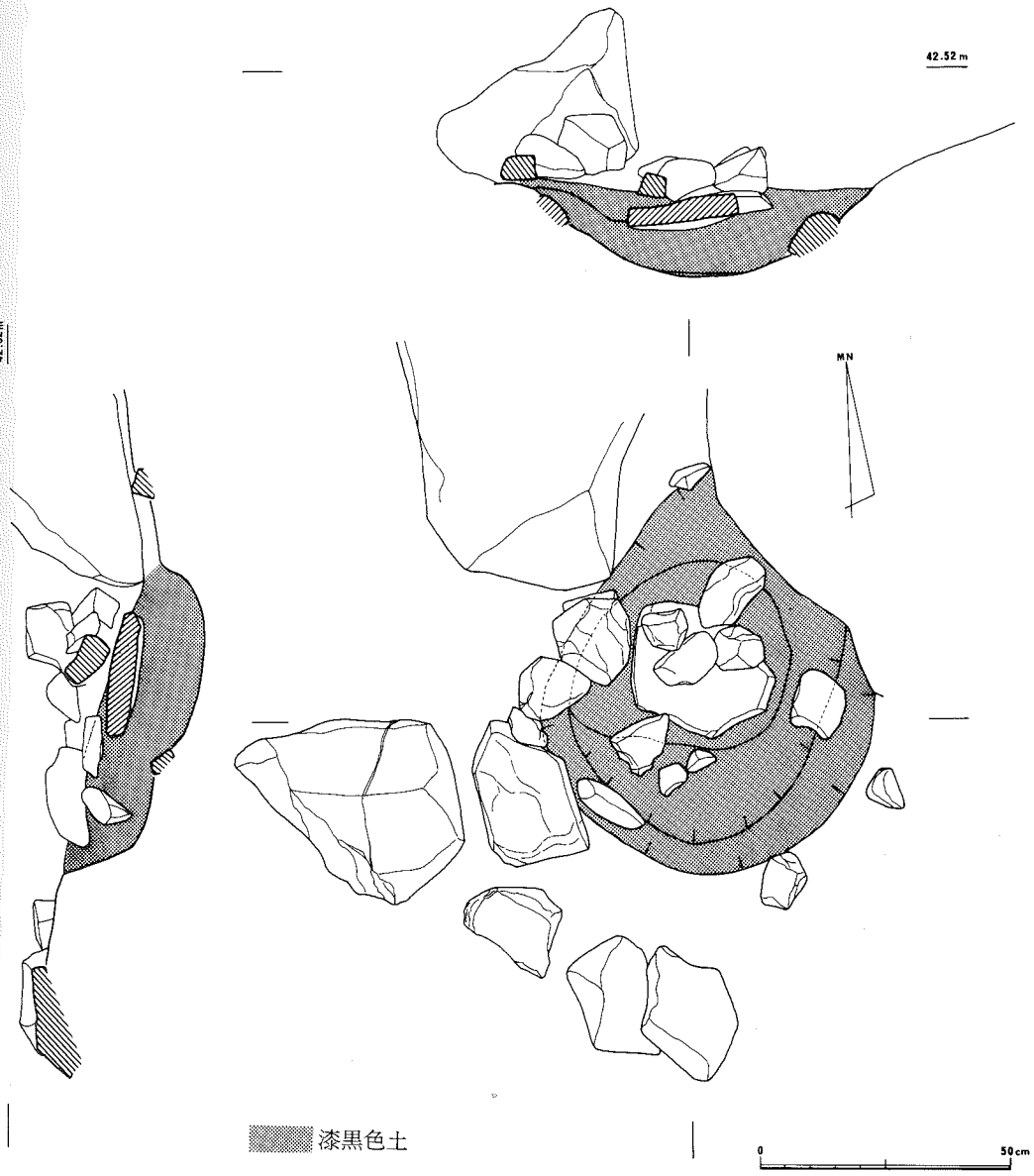
大小の自然礫で，南北60cm，東西50cmのだ円形に取り囲む。特に北側の数個の礫は意識的に立てられている。石囲みの中には厚さ5～10cmの焼土が堆積し，拳大の小礫が混入する。以上の状況から本遺構は炉址と判断される。なお，石鏃が1個内側より出土している。

第9図　第1号炉址実測図

第１号集石遺構（第10図）

炉址の西側に隣接して築かれたもので，階段状に２段の浅い掘り込みを有する。上端径は65cm，最下端径は25cm，深さは18cm程度の円形を呈する。中には漆黒色の土が充填され，同時に板状礫や拳大の小礫が投げ込まれたような状況で混在する。

共伴遺物は無く，この点では正確な時期判定は困難であるが，炉址と同じ層位であることから炉址と同時期とみて差しつかえあるまい。

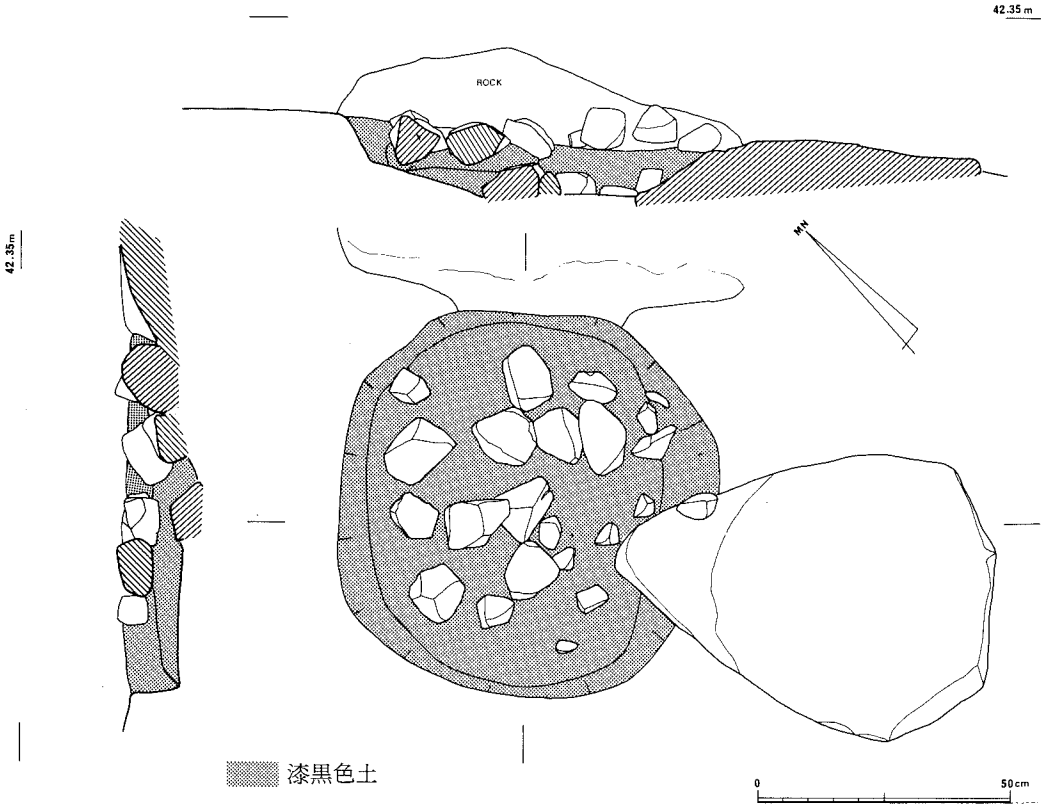


第10図　第１号集石遺構実測図

遺構の性格は，炉址の如く明瞭な火の痕跡もみられないなど不明であるが，レベル的に炉址より45cm程低く，炉址で焼けた石を投げ込む地炉的な性格の可能性もあろう。その場合，調理用的な性格を持つことになろうが，礫や漆黒色土の科学分析を行っていない為に推測の域を出ない。

第２号集石遺構（第11図，図版15）

Ｂ－３区に出土したもので，３層を切り込んで築かれた径75cm，深さ15cmの浅い円形ピットである。中には１号集石の場合と同様漆黒色土が充填し，拳大の小礫が多く混在する。内側からの出土遺物はみられないが，層位的に先の２つの遺構と同時期であることは疑いえない。その用途についても１号集石と同じ性格のものであろう。（高野）



第11図　第２号集石遺構実測図

5．遺　　物

出土遺物の総数は，本調査，試掘調査あわせて土器1,541点，石器449点を数え，大半を占めるのが粗製の無文あるいは条痕を有する土器である。石器は打製石斧，磨製石斧が顕著に見られた。時期的には縄文時代晩期終末に位置づけられ，山の寺梶木遺跡や原山遺跡出土の遺物と類似性が認められ，密接な関係をもっていたことが窺われる。

土　　器

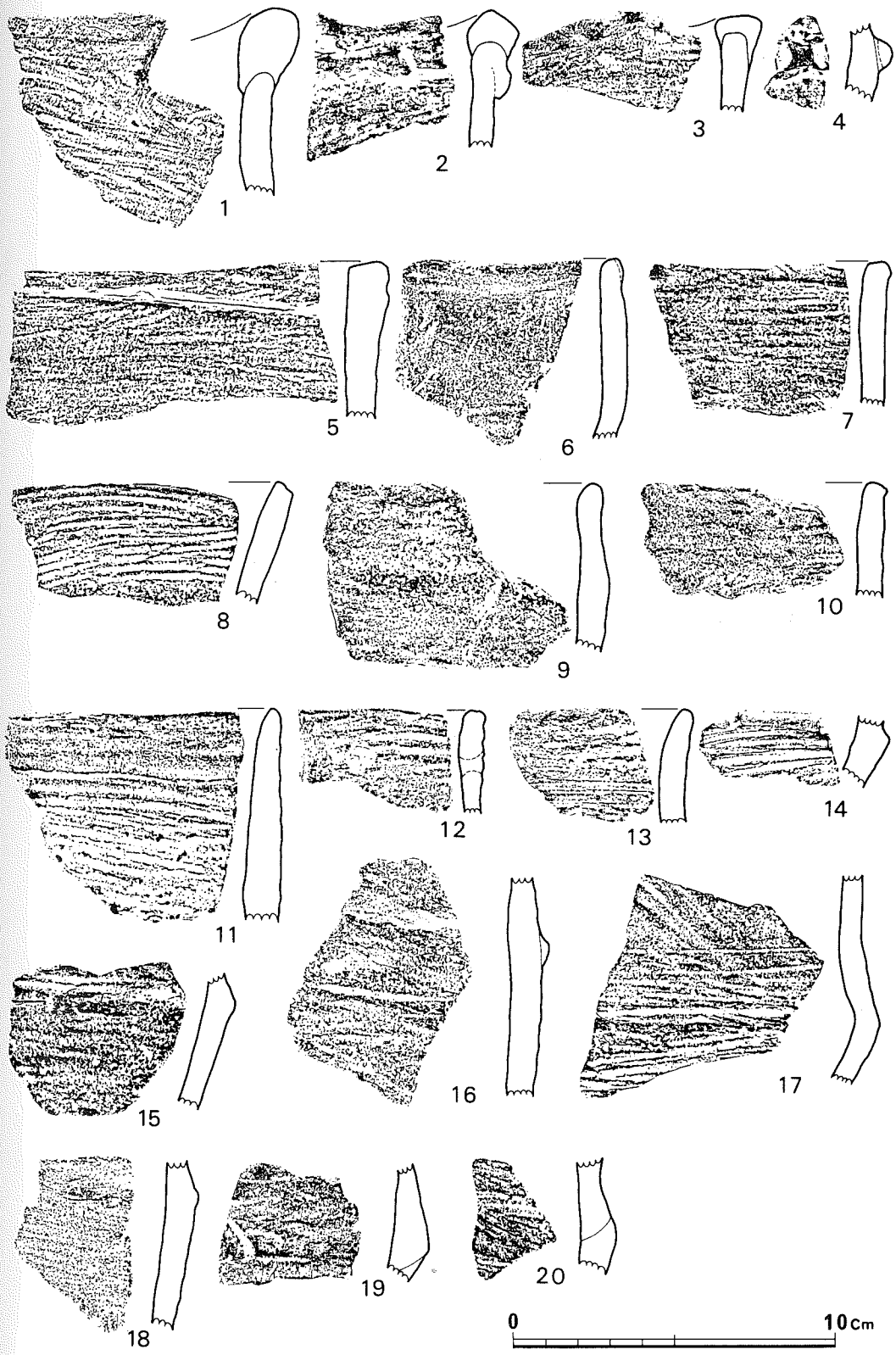
粗製土器（第12図１～第16図77）

粗製土器はリボン状突起を有するもの，胴部の張り出しを有するもの，口縁と胴部に刻目突帯を有するもの，条痕および無文土器などに分けられる。

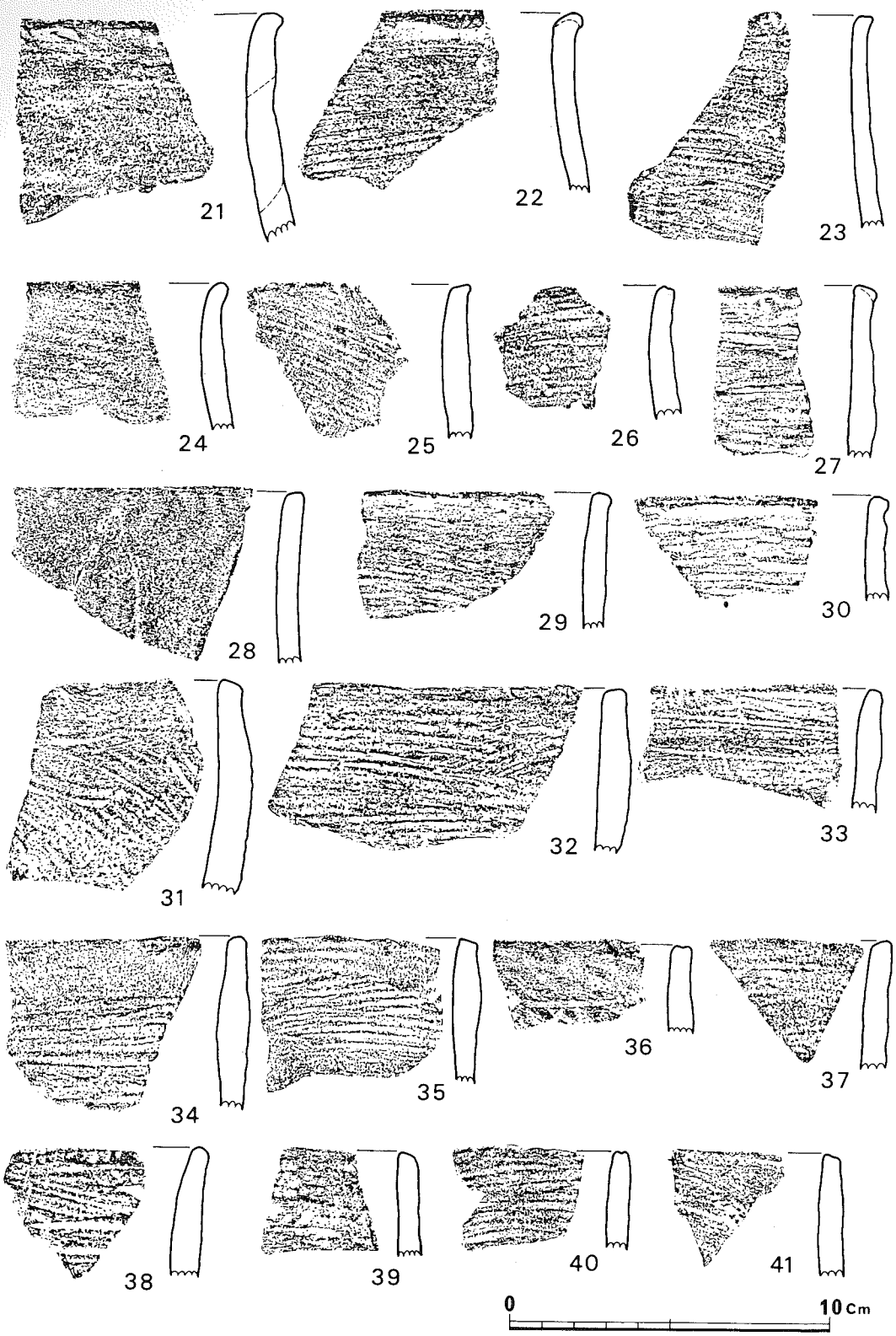
以下出土遺物について説明したい。

1．リボン状突起を有し，外面は条痕が施され，内面はナデられ，一部分ヘラ状工具で引かれ乱れた沈線が見られる。外面は口縁から突起部位にかけてスス状に黒くなった部分があり，全体に黒褐色を呈し，胎土，焼成とも良好。**2**・リボン状突起を有するが，貼り付けの痕跡が明瞭で，突起部はヘラ磨き，外面は浅い条痕が施され，内面はヘラ状のものによるナデが見られる。内外とも黒褐色を呈し，胎土に白い砂粒を多く含み焼成良好。**3**・リボン状突起を有する口縁であるが，突起端部を欠損している。内外とも弱い条痕が見られ，暗褐色を呈し，胎土，焼成とも良好。**4**・蝶ネクタイ状貼り付けの中央部にあたる部分で，内面に条痕が認められる。胎土，焼成とも良好。**5**・口唇部はやや内側に傾きながら垂直に下り，口縁は波状あるいは突出部を有すると思われる。内面は条痕整形のあと横ナデを行い，外面は条痕が施され，一条の沈線をもつ。胴部はわずかなふくらみをもつが，器壁はぶ厚い。内外とも黄褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**6**・口縁部分で垂直に立てれば波状を呈するが，傾面をつければ広口の壺にもなり，形状がはっきりしない。口唇下に浅い一条の沈線がめぐり，内外ともナデで胴部にかけて内弯している。色調は内外とも褐色を呈し，胎土良好だが焼成甘い。**7**・口唇はやや平坦で黄褐色を呈し，ナデで仕上げられ，外面は条痕が明瞭に観察され，暗褐色で胎土，焼成は良好。**8**・口唇部はヘラ状工具で整えられ，浅い沈線状のものが見られ，内面は暗褐色を呈し，磨かれた様である。外面は条痕が施され褐色，口縁は少し開き気味になる。胎土，焼成は良好。**9**・口唇はやや尖がり気味に丸くおさめられ，やや肩が張っている。内面は条痕，外面はナデによる整形で色調は内外とも褐色を呈す。胎土良好だが焼成甘くやや磨耗している。**10**・**11**とも口縁で同じ器形になり，**11**は外面が粗い条痕で整形され，内面は条痕の上を丁寧にナデている。**10**は内外とも暗褐色**11**は内外とも黒色を呈し，胎土は良く，焼締められ非常に堅い。**12**・補修孔を有する口縁で，口唇はやや平坦，内面はナデを行い外面は条痕が施されている。色調は内

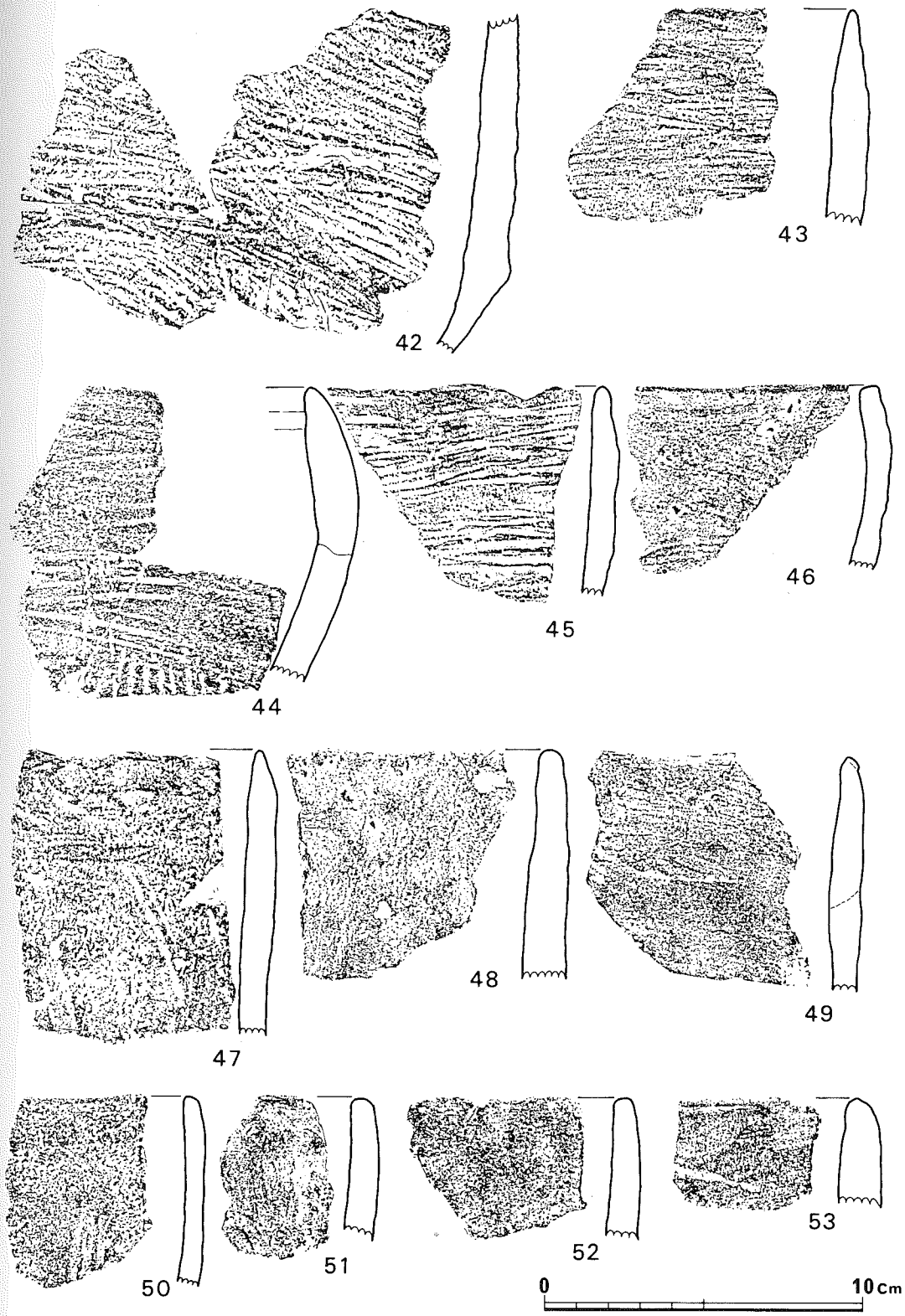
外とも黄褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**13**・やや外反する口縁部で口唇は丸くおさめられている。内面は褐色，外面はススの付着を見，黒色。胎土，焼成は良好。**14**・内外に粗い条痕が施され「く」字に曲った所で欠損しているので，胴部か定かでない。内面褐色，外面暗褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**15**・**16**・肩部に弱い貼り付け突帯を有する土器で，**15**は内面黒色でナデ，外面は褐色を呈し，条痕が施され，胎土は良好だが焼成やや甘い。**16**は内外面とも褐色を呈し，内面はナデ，外面は条痕が施され胎土，焼成は良好。**21**～**26**は口縁端部が外反し，肩部にかけて反りをもつ土器で，「く」字に張り出す胴部につながると思われる。**21**は口唇部が平坦で，わずかに内側に傾斜し，内外とも暗褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**22**はやや器壁が薄く，口唇は貼り付けた粘土を外側にわずかに返し，反りをもたせている。外面は条痕を斜行させ，内面はヘラ状の施文具でナデている。色調は内面やや灰黒色，外面黄褐色で胎土，焼成は良好。**23**は外面だけ丁寧に条痕が施され，口唇部は平坦で色調は内外とも褐色，胎土，焼成は良好。他の土器は外面に条痕をもち内面はナデられており胎土，焼成は良好。**27**～**30**・この土器群は，口唇外側に若干の返りをもつ点においては前述した土器と一緒であるが，わずかに外反する特徴を持ちながらも胴部に至る所で，やや内弯する形状を成す点に違いが認められる。**27**は内外とも条痕が施され，口唇はわずかに肥厚し，返りを有し，平坦である。外面はススが一部付着し胎土，焼成は良好。**28**は口唇が平坦で内外面ともナデによる仕上げが行われ，胎土も精製されている。口縁はほぼ直行しており，胴部はややふくらむと思われる。**29**・**30**はどちらも口縁がわずかに外反し返りをもつ。**29**は棒状工具による条痕が明瞭で，内面の方がはっきりしている。胎土，焼成は良好。**31**～**35**・口唇部は平坦で内外にわずかな傾斜をもち，外面は条痕による器面調整が施されている。器形は内側にゆるくカーブしており，**31**の場合は口縁部にゆるい段を付けている。**32**の外面にススの付着を見る他は胎土も良好で焼成も良い。**36**～**41**・小破片であるが平坦な口縁を有する土器である。**42**・鉢形土器で口縁部を欠くが，器壁厚く内外に粗い条痕が全体に施されている。貝殻による施文とは違い方向も一定でない。胴部は「く」字形に折れているが，底部に近い形状を示す。内外面は暗褐色を呈し，外面はススの付着を見る。胎土は粗く焼成は良好。**43**・口縁部は先細り，やや尖り気味に丸くおさめられ，ふくらみをもちながら直行する。内面は茶褐色，外面はススの付着で黒色を呈し，内外とも条痕が施されている。**42**と同一個体になると思われる。**44**・口縁部は大きく内弯し，端部はやや尖がり丸くおさめられている。内側の口唇部直下に浅い沈線が一条めぐり，全体的に条痕が施されているが，磨耗している。外面屈曲部下には粗い条痕が，上は斜行し，胴部に至る部分は縦に施されている。器形は鉢形になると思われ，胎土粗く焼成は良好。**45**・口唇部はヘラ状工具で整形され，わずかに平坦面をもつ。口縁全体は内弯し，内外とも貝殻条痕が明瞭である。色調は内外とも褐色で胎土，焼成は良好。**46**・器形は44ほど屈曲しないが，口縁に近い部分が弯曲しており，鉢形になると思われ，内面はナデ，外面は擦過による調整痕が観察される。胎土，焼成は良好。**47**～**53**・厚手の無文土器群である。**47**は口縁が尖がり，内面は弱い条痕が施され，



第12図　粗製土器実測図(1)



第13図　粗製土器実測図(2)



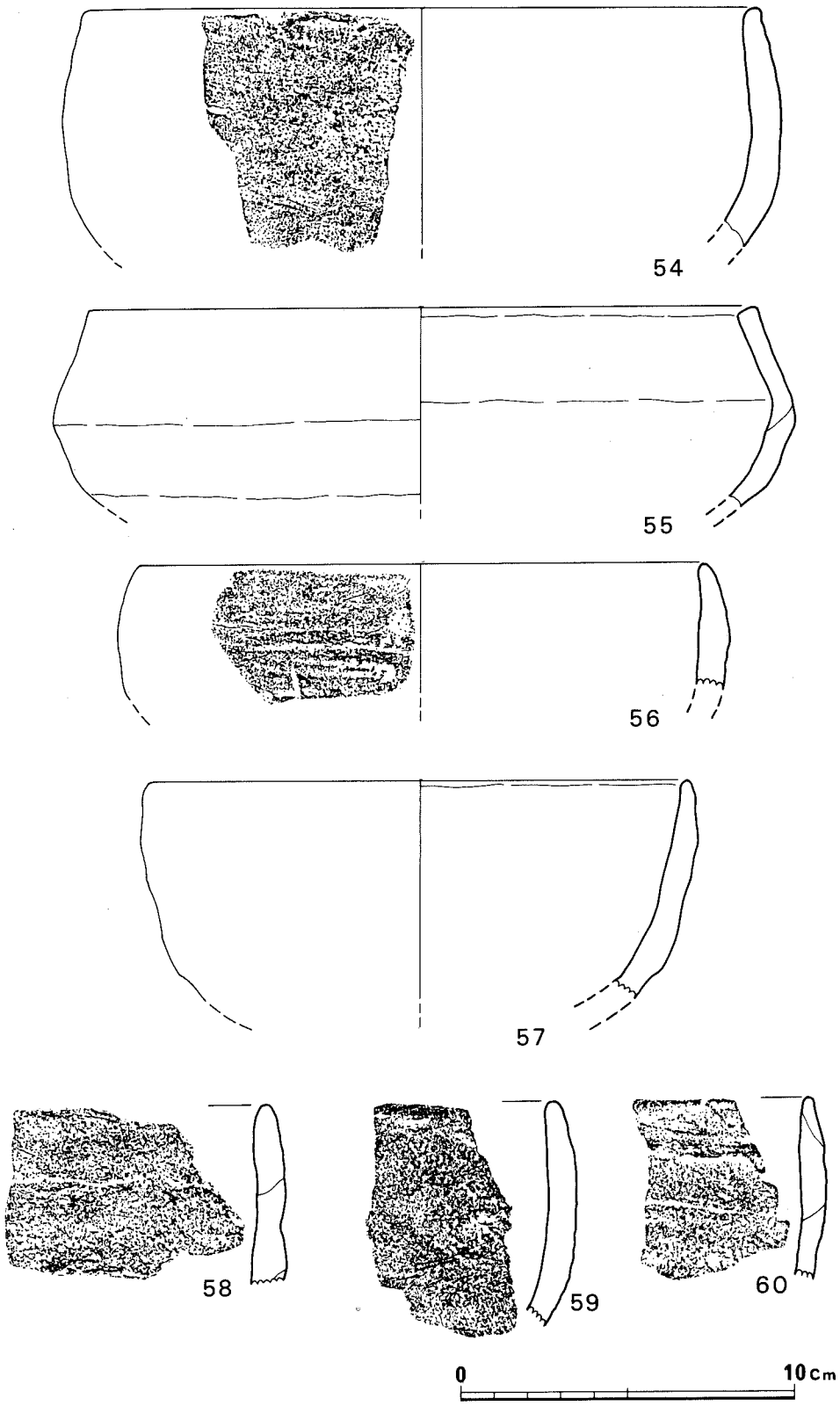
第14図　粗製土器実測図(3)

その上を横ナデで整えられている。外面は擦過状の調整痕がみられ，ザラついている。内外とも灰褐色を呈し胎土，焼成は良好。**48**・器壁厚く，口縁は丸味をおびる。口唇はナデ，内面はハケ状の不規則なナデ，外面は擦過状の器面調整が施され，凹凸がありザラついている。胎土は白い粒子を多く含み焼成良く焼締められており非常に堅い。色調は内外とも黒褐色を呈す。**49**・口唇はヘラで外にナデられ，部分的に返りをもつ。内面は貝殻条痕で整えられ，外面はハケ状工具によるナデが見られる。内外とも灰褐色で胎土，焼成は良好。**50**・口唇は平坦で全体に内弯している。無文土器にしては器壁薄く，外面の下部にわずかに縦方向に条痕を認める。内外ともススが付着しており黒褐色を呈する。胎土は精製され焼成は良好。**51**～**53**・ともに器壁厚く，内外面ともナデ仕上げされ，赤褐色を呈し胎土良好だが，焼成甘くややもろい。**52**の推定復原口径は直径20cm内におさまる。

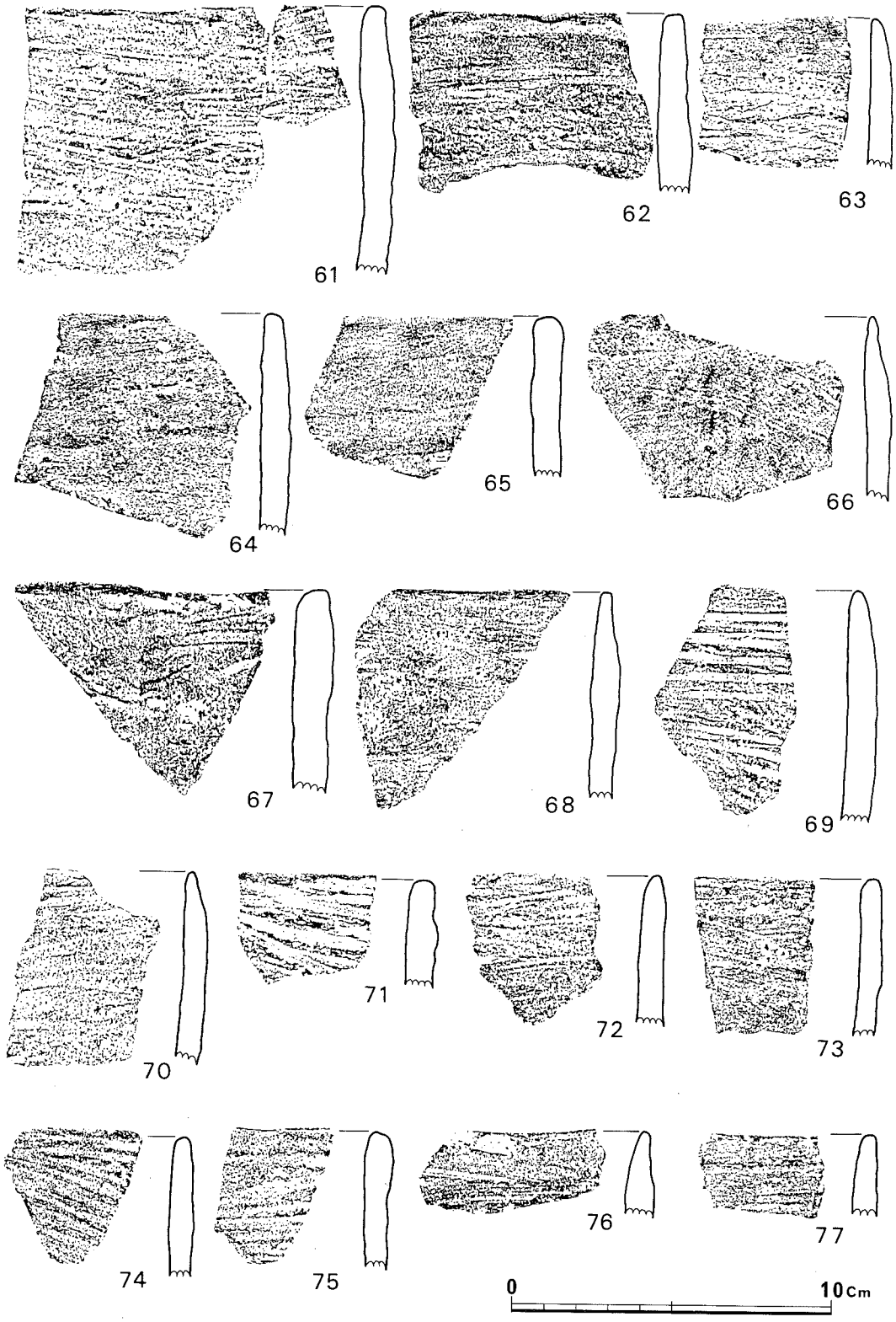
54～**60**・鉢形の無文土器になるものである。

54・B－2グリッドの出土で，口唇は丸くおさめられ，胴部は弯曲し，内外ともナデが行われ，復原口径は20.5cmを測る。色調は内面黄褐色，外面にはススの付着を見る。**55**・口唇は平坦になる部分と，丸くおさめられた部分から成り，肩部分は「く」字形に屈曲している。さらに胴部から底部にかけて，接合部分からわずかに段差がつく。内外面ともナデ仕上げされ，口縁から胴部にかけてはススの付着を見，暗褐色を呈す。胎土は緻密で焼成やや甘い。16試掘壙よりの出土で復原口径20cm。**56**・口唇はやや尖がり，内側に内弯する。内面はナデ，外面には条痕がわずかに観察できる。内外面とも褐色を呈し胎土，焼成は良好。13試掘壙からの出土で復原口径17cm。**57**・口唇は丸くおさめられ，口縁から胴部まで弯曲して一段低くなり底部に移行するもので，器形は椀形になると考えられる。内面は褐色でナデ，外面は灰褐色で一部ススの付着があり，擦過痕が施されザラついている。13試掘壙出土で復原口径16cm。**58**・口唇は尖がり，内面はナデ，外面は指頭による調整で凹凸がある。胴部から底部にかけては一段低くなると思われるが，接合面で離れている。色調は暗黒色を呈し，ススの付着を見る。胎土少し粗いが焼成は良好。**59**・椀の形状を呈するが，口唇は丸くおさめられている。内面はハケ状のナデ痕が顕著で外面はススが全体を覆う。胎土，焼成は良好。**60**・口唇はやや尖がり気味に丸くおさめられ，胴部にかけては内弯しているものの，椀状に至るまでは弯曲していない。内面はナデ，外面は積上げの痕跡を残し，擦過による調整が行われている。色調は褐色を呈し胎土，焼成は良好。**61**～**77**・ここにあげた一括の土器は，条痕，あるいは擦過痕を有し，ほぼ口縁から胴部にかけて直行する深鉢形になる一群であり，すべて胎土，および焼成は良好である。

以上の粗製土器は，文様的には全く無文の土器が一番多くを占め，次いで条痕を有する土器，擦過痕土器などが続き，突帯，および，突起などの飾りを有する土器は少数である。器形の上では深鉢が一番多く，次いで鉢形，椀状の土器となっている。また胎土に共通することは，殆どの土器に雲母，長石が含まれていることである。これらの粗製土器の構成は山の寺遺跡においても全く同様の傾向を見せており，**1**～**20**のリボン状飾りの土器や，「く」字形に張り出し刻目



第15図　粗製土器実測図(4)

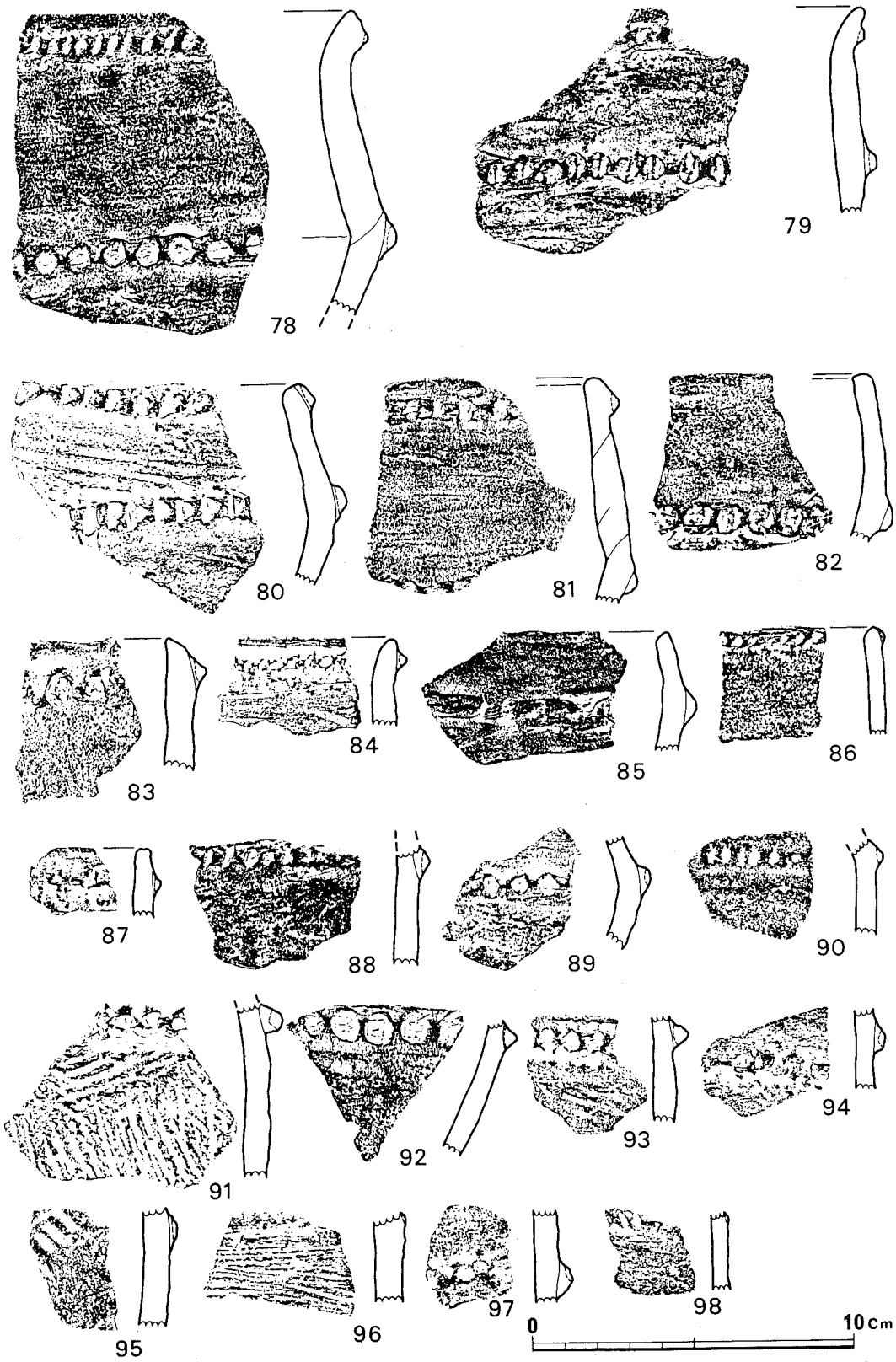


第16図　粗製土器実測図(5)

を有しない21～26の土器群などが，この出土遺物の中で先行すると云えよう。

刻目突帯文土器（第17図78～98）

78・口縁直下と「く」字形に張り出した胴部に貼り付けられた突帯に刻目を施し，上部の刻目はヘラ状のもので施され，胴部は棒状のもので両面より抉られている。従って一番深い部分に稜線を残す。外面はハケ状によるナデ痕が明瞭であり，褐色を呈し胎土，焼成は良好。B－3グリッドからの出土。**79**・わずかに口唇部を残し，口縁部と胴部に貼り付けの刻目突帯文を有するが，口縁直下の刻目は浅く，胴部は両面抉りで大きい。しかし器形はほぼ直立した形状で二条の突帯文間隔は狭い。内外ともハケ状のやや粗いナデ調整で，暗黄褐色を呈し，胎土には石英粒を多く含み焼成は甘い。**80**・口縁と肩部に刻目突帯を有し，その間隔は狭く屈曲する。刻目施文は右面からのみ切り込みを入れており，切口は三角形状を呈する。内外面は条痕が施されているが胴部はナデで仕上げられている。色調は褐色を呈し胎土，焼成は良好。**81**・表採資料であるが，口縁と胴部に浅い刻目突帯がめぐり,「く」字形に屈曲し，内面はザラザラしているが，外面はハケ状のナデが見られる。胎土は精緻であるが，焼成甘く灰褐色を呈す。**82**・口縁部は平坦で，やや内弯しながら肩部に刻目突帯文を有し，刻目は左右からの抉りで大きい。内面はザラついているが，外面はナデで仕上げられ褐色を呈し，胎土，焼成とも良好。全体の形状は角張らず丸味を帯びながら底部へ直行すると思われる。**83**・尖がった口縁直下に突帯を貼り付け，左右から抉り刻目を入れている。内外とも黄褐色を呈し，ナデによる仕上げで胎土，焼成は良好。**84**・全体に黒色を呈し，尖がった口縁直下に低い貼り付けを行い小さな刻目を施す。内外ともナデ，胎土には石英粒を多く含み焼成は良好。**85**・口縁から肩部にかけてゆるく内弯し，肩に突帯をめぐらすが，刻目は殆ど施されていない。内外ともナデで粘土は精製され，焼成良好。**86**・器壁は薄く，口縁部に近い部分に刻目を施し，内外ともナデ，外面にはススの付着を見る。形状は小形の甕になると思われる。色調暗褐色を呈し胎土，焼成は良好。**87**・器壁薄く，平坦な口縁部直下に低い突帯を貼りつけ，刻目はわずかに施されている。内外ともナデが行われ，褐色を呈し胎土，焼成とも良好。**88**・**89**ともに張り出し部の突帯に刻目を有するが，**88**は接合部から折れている。内外ともナデによる調整が施され胎土，焼成は良好。**90**・突帯に浅い刻目を入れた肩の部分で折れており，胴部は直行する。内外とも黄褐色を呈し，胎土は精製されているが，器表面は若干の磨耗を受けザラついている。この土器は原山遺跡出土の土器に胎土，焼成が非常に類似しており，原山遺跡から持込まれた可能性も考えられる。**91**・突帯部分に棒状工具による刺突を施し，胴部は粗い条痕が縦横に走っている。この土器の刻目は刺突されている点で，他の土器と異なる。内面は浅い条痕の上をハケ状による仕上げを施し，内外とも暗褐色で胎土，焼成は良好。**92**・屈曲する接合部分で折れているが，突帯には大きな刻目が施されている。**82**と同じような特徴を持ち，胎土，焼成は良好。**93**～**98**・刻目突帯を有する土器で，口縁部以下に施文されるものである。**96**はわずかに刻目が観察され，条痕が付く。



第17図　刻目突帯文土器実測図(6)

98は口縁に近い部分で，浅い刻目を施し，その器形は**86**と同じ小形の甕になるであろう。殆どの土器が，色調褐色を呈し胎土，焼成は良好。

刻目突帯を有する土器は以上述べた如くであるが，その特色は，口縁部が外反し肩部から胴部にかけて「く」字形に内弯するもの，口縁部から胴部にかけてゆるく内弯するもの，口縁から胴部にかけてゆるく直行するタイプに分けられる。また刻目の施文方法も，ヘラ状工具で切り込みをつけるものから，右から斜めに切り込み垂直におろし，三角形状の切り口を呈するもの。左右から切り込みを入れ，中央に稜線を残し円形の切り口を残すもの，棒状の刺突を行うものに分けられ，さらにこれら刻目の組合せも行われている。

組織痕土器（第18図99～第19図134）

鏡山猛氏によってその研究が確立した組織痕土器は，編物，組物，織物の圧痕土器を総称して呼ばれ，縄文晩期後半の時期を主体とする遺跡において出土例が増加しており，長崎県下でも21例の遺跡が知られている。

朝日山遺跡においても組織痕土器の総数は36点におよび，その構成は網目，蓆目，籠目およびその他の組織圧痕に分けられる。

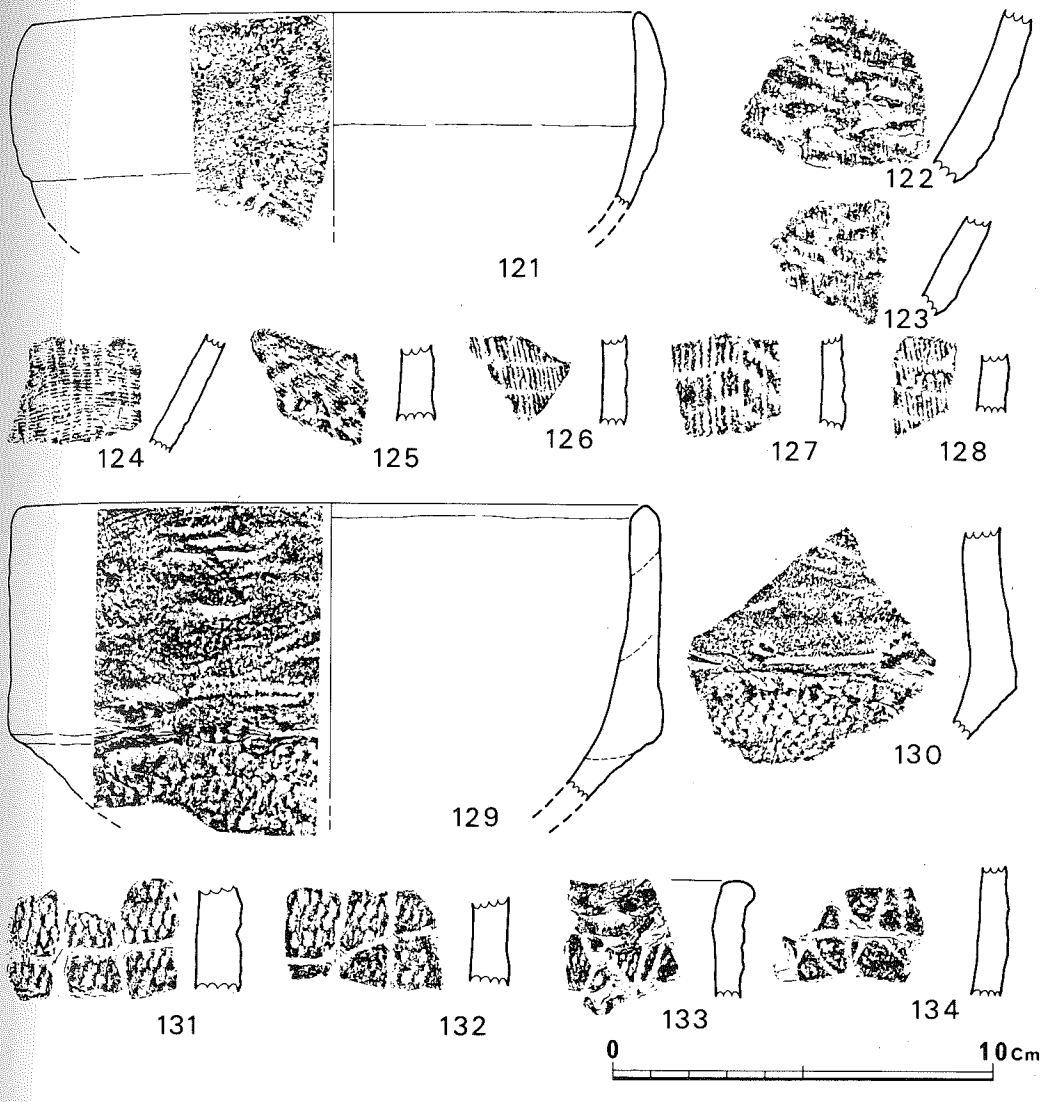
網目痕土器（第18図99～107）

99・口縁端部はやや平坦で若干外反し，肩から胴部にかけてゆるく内弯している。内面はナデ状の調整が，外面はハケ状のナデが見られ，輪積線が波状に観察できる。口縁から3.5㎝下った所から網の圧痕が施文され，約4㎜四方の網目が整然と並ぶ。器形は鉢型を呈し，胎土，焼成は良好。**100**～**107**は網目圧痕の土器であるが，外面の色調は褐色ないし茶褐色，内面は殆ど黒色を呈している。また器壁断面で共通していることは，内外の焼成時の色調が，丁度半分に分れていることである。**102**・**107**の土器は網目圧痕が他とは逆になっているように観察されるが，これは結節の部分が大きいことによるようである。

蓆目痕土器（第18図108～第19図128）

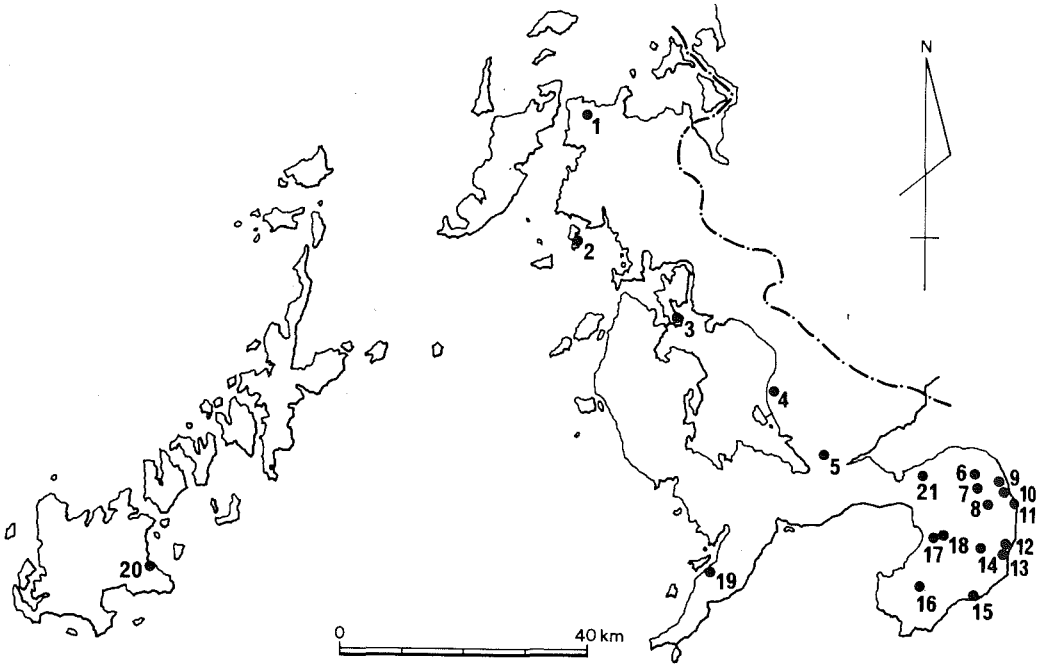
108・**109**は口縁部を欠損しているが，胴部にかけて丸くのび，一段低く，くびれた部分から蓆目が施されている。この蓆目が施される部分は急に器壁が薄くなるが，この現象は，組織痕土器の特徴として捉えることができる。内面はナデ，外面は擦過による調整が行われ，全体にススが付着，暗黒褐色を呈し胎土は精緻で焼成は良好。**110**・薄手の口縁部全体に蓆目を施し，経糸はほぼ6㎜幅で垂直に下り，緯糸は右から左へ斜行する。内面はナデで胎土，焼成は良好。**111**・肩から胴部にかけての破片で，蓆目を有する。内外ともヘラ状のもので横ナデが行われ，蓆目の一部を消している。経糸は縦に2本認められ間隔は約2.5㎝を測り広く，緯糸は横に波状に認められ褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**112**・胴部が急に折れ，その折れ部から

第18図　組織痕土器実測図(1)



第19図　組織痕土器実測図(2)

下に蓆目を施している。内外ともヘラで磨き，その上をわずかにナデている。胎土，焼成とも良好で焼締められ堅い。**113**・厚手の土器で内面はハケ状によるナデ，外面は粗い条痕による調整が行われ，蓆目圧痕部は急に器壁が薄くなり段差をもつ。外面は暗褐色で胎土やや粗く焼成も甘い。器形は大きな鉢形土器になると思われる。**114**～**128**（121をのぞく）・これらの土器はすべて蓆目圧痕を有する土器である。**114**～**116**は経糸が乱れ，間隔が疎である。**116**は底部に近いと思われる。他の土器は経糸，緯糸は整然としており両者とも間隔が密である。特に**119**や**124**などはその典型である。全体に色調は内外とも褐色および赤褐色を呈し，内面はヘラ磨きの上を丁寧なナデで仕上げている。**121**・口縁から蓆目圧痕が施されている部分までゆるく内弯し，一段低くなっている。内面はナデで仕上げられ，途中に一段さらに下方に一段



第20図　組織痕土器出土遺跡分布図

第２表　組織痕土器出土遺跡地名表

No.	遺　跡　名	所　在　地	備　考	参　考　文　献
1	里田原遺跡	北松浦郡田平町里免	夜臼　網痕	黒田原遺跡　1975年
2	宮の本遺跡	佐世保市高島町宮の本	山の寺　網痕	宮の本遺跡緊急調査概報　1980年
3	針尾人崎遺跡	佐世保市針尾中町字人崎		1977年　長崎県文化課調査　報告書近刊
4	黒丸遺跡	大村市黒丸町	山の寺　網・籠痕	黒丸遺跡　1980年
5	峰ノ原遺跡	諫早市大渡野町	黒川　網痕	諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集　1975年
6	小ケ倉遺跡	南高来郡国見町多比良小ケ倉		山の寺梶木遺跡　1973年
7	百花台遺跡	南高来郡国見町多比良百花台		〃
8	礫石原遺跡	島原市礫石原	礫石原　網痕	礫石原遺跡　1977年
9	小原下遺跡	南高来郡有明町小原下		山の寺梶木遺跡　1973年
10	山の内遺跡	南高来郡有明町山の内		〃
11	三会遺跡	島原市三会		島原市の海中干潟遺跡　1974年
12	瀬野遺跡	南高来郡深江町瀬野		山の寺梶木遺跡　1973年
13	中原遺跡	南高来郡深江町中原		〃
14	山の寺梶木遺跡	南高来郡深江町山の寺	山の寺　網、蓆、籠痕	〃
15	堂崎遺跡	南高来郡有家町堂崎	礫石原　網痕	1980年から長崎県文化課で調査中
16	原山遺跡	南高来郡北有馬町原山	網痕	山の寺梶木遺跡　1973年
17	黒谷遺跡	南高来郡小浜町黒谷	黒川、山の寺　網・網・籠痕	九州考古学14　1962年 九州考古学論攷　1972年
18	朝日山遺跡	南高来郡小浜町朝日山	黒川、山の寺　蓆・網・籠痕	九州考古学論攷　1972年 長崎県小浜町の先史文化観　1974年
19	深堀遺跡	長崎市深堀	黒川　網痕	1980年　長崎市文化課調査
20	水の窪遺跡	福江市下大津町水の窪	黒川　網痕	水の窪遺跡　1976年
21	中熊遺跡	南高来郡吾妻町大塚		吾妻町中熊台地調査報告　1979年

と低い段が付けられている。外面はススの付着が著しい。胎土には雲母，長石を多く含み焼成は良好。復原口径16cmを測り小形の鉢を呈する。

籠目状圧痕土器（第19図129～130）

129・130・両者とも同一個体と思われる土器である。**129**は復原口径16.5cmを測る鉢形土器であるが，口縁部は「く」字形にくびれた部分からほぼ垂直に立ち上がり，口唇はやや丸くおさめながら内側へ傾斜している。内側は輪積の線が残り，その上をナデている。底部に近い所ではススの付着があり外面は口縁から屈曲部にかけて粗く整形された擦過条痕が走る。籠目状はそれ程明瞭ではないが，屈曲した張り出し部が少し外反したようになり，内面から押圧した状況が窺える。胎土，焼成は良好。

その他の網目痕土器（第19図131～134）

131・132・籠目状圧痕の上からさらに大きな目の網を押圧したもので，網の結節がよくわかる。両者とも同一個体で器壁は厚く，内外とも褐色を呈し，胎土，焼成は良好。**133・134**・前者は口縁部で後者は端部を欠く。しかしどちらも複雑な網目を有し結節がからみ合っている。内外とも褐色を呈し内面は指頭によるナデが丁寧に行われ胎土，焼成は良好。

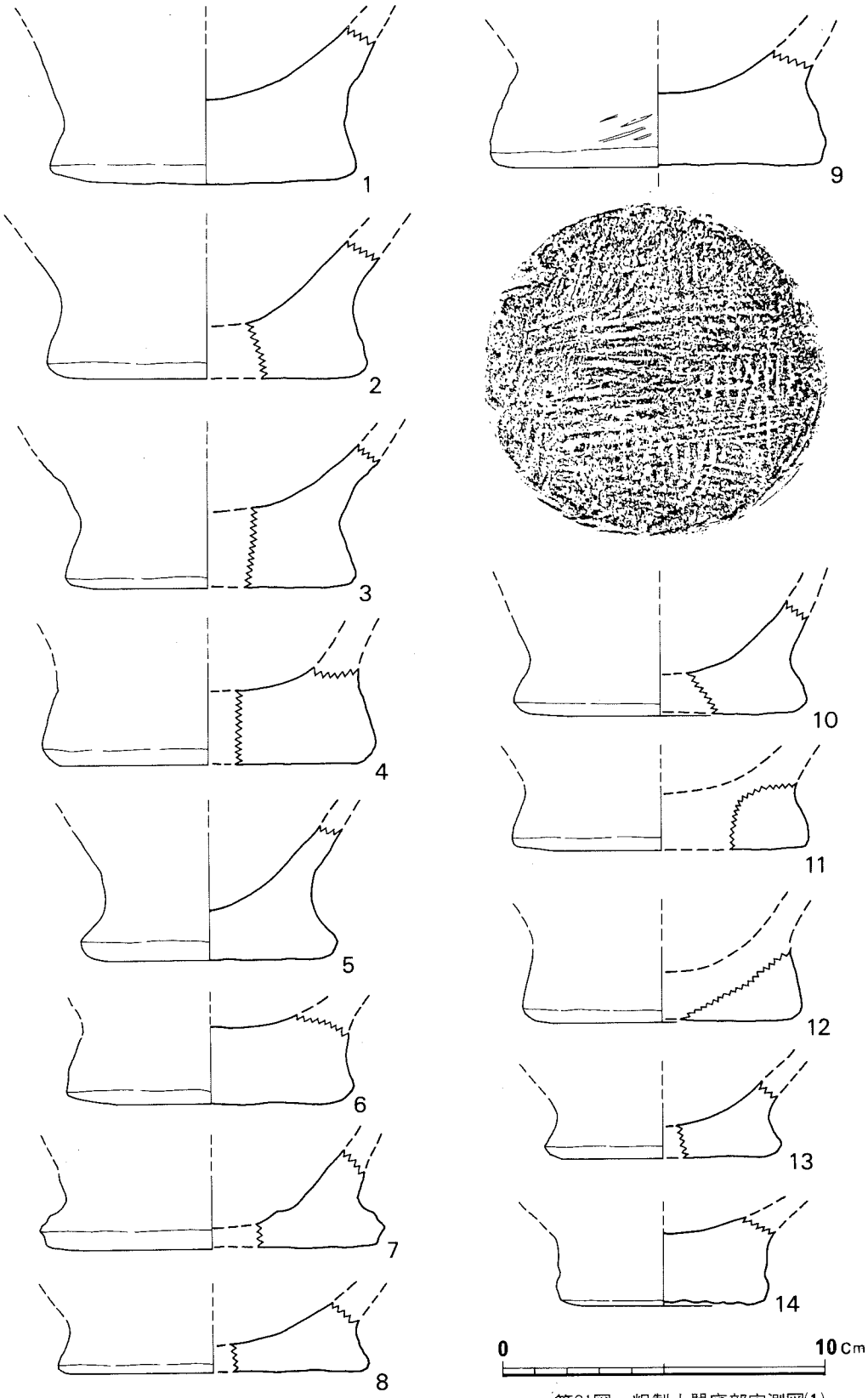
本遺跡における組織痕土器の割合は蓆目圧痕土器が全体の約60％を，次に網目圧痕が25％を占め蓆目圧痕が多い。器形的には蓆目痕をもつ土器は，肩部が急に屈曲するか，全体的に丸くおさめられる二つの形が考えられる。網目痕の場合は全体に丸くおさまる椀，あるいは鉢状を呈するものだけのようである。

長崎県下における組織痕土器の出土地は，第20図に示した如くである。特に島原半島地域では晩期の遺跡が集中しているので，必然的に多くなっており他の地域では見られない現象を呈している。

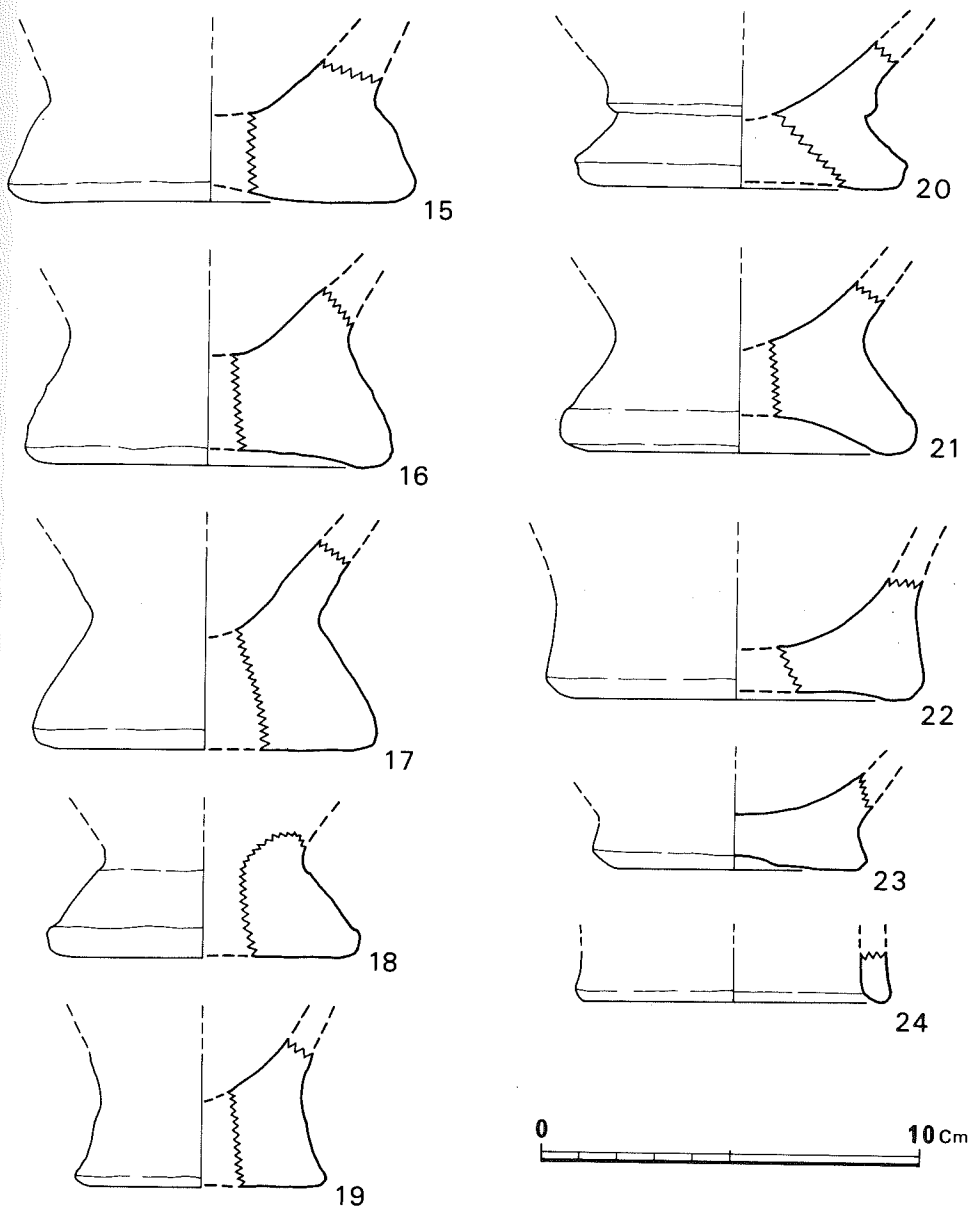
底部（第21図１～第22図24）

粗製の土器底部総数は30点，その中で図示したのは24点である。製作の技法は円盤状の底を呈するものと，底中心部だけ円盤状にして左右から貼り合せ，底部と胴部をはっきり区別しているものがある。これらは殆ど粗製の深鉢の形状を呈すものである。

9のように大形の底部に縦横に粗い条痕を意識的に施しているものもある。**18**はヘラ状のもので研磨した上をハケでさらにナデており，胴部へ立ち上がるくびれ部の所に突帯状の出張りを施している。杯状の器形になると思われる。この種のものに類似したものは図示しなかった中にも含まれる。**24**は小破片であるが，ヘラ磨きされ黒色を呈し高杯になるものである。殆ど胎土，焼成は良好である。



第21図　粗製土器底部実測図(1)



第22図　粗製土器底部実測図(2)

山の寺遺跡においても粗製深鉢の底部が多いが，刻目突帯を有する底部など高杯や高台になる底部も共伴しており，本遺跡出土の底部も同様な傾向といえる。

精製土器（第23図１～11）

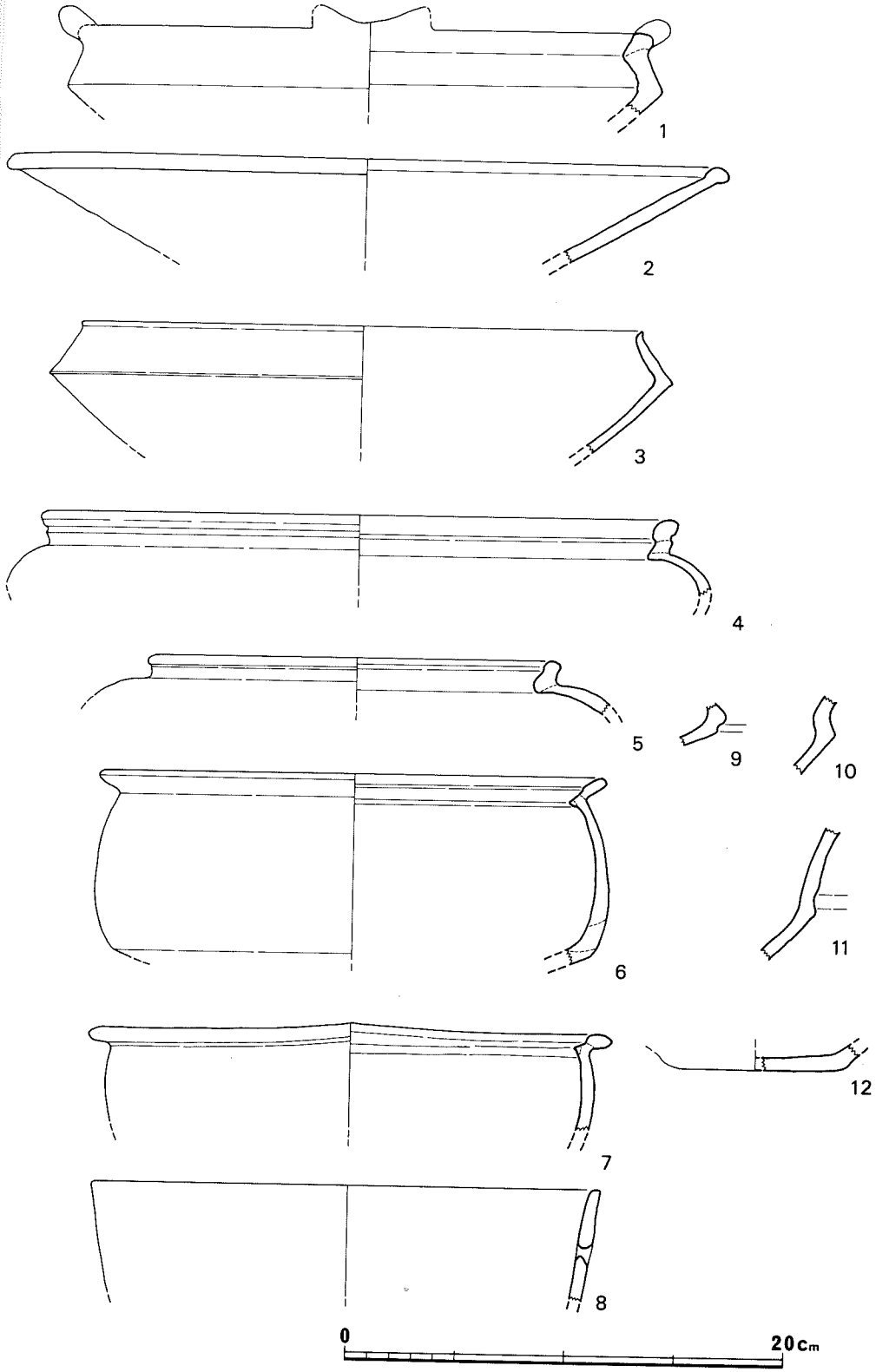
1・口縁にリボン状突起を有する鉢形の土器で，胴部内面は粗い条痕を施し「く」字形に屈曲する。口縁部は外反しヘラ磨き，外面は全体にヘラ磨きされ光沢ある黒褐色を呈す。胎土は粗

いが丁寧に研磨された土器である。復原口径26cm。10も同様の器形であるが口縁部を欠く。**2**・口縁部が丸くやや平坦で外面は小さなくびれ部をもつ。口唇部内面はヘラ削りによる段をもつ。全体に皿状の器形を呈し直線的になる。内外とも黒色でヘラ磨きが施され，断面観察では内外1㎜前後は黄褐色，中心部は黒色を呈し，器表面だけ黒色を塗布した感がある。復原口径32cm。**3**・口唇部は尖がりわずかに外反し，肩部に至る所に段が付けられ大きく外反する。外面は口縁に一条の沈線をめぐらし二重口縁になり胴部は袋状にふくらむ。よく全体が研磨され，色調は黄褐色，胎土，焼成とも良好で復原口径29cm。**5**・**4**とほぼ同じ形態であるが研磨されておらず，やや磨耗している。復原口径18.5cm。**6**・口縁は頸部から外反し開いているが，内面は貼り付けられ二重口縁になり三角形状に突出している。器面は粗くヘラ磨きした上をハケ状のものでナデている。外面は丁寧にヘラ磨きが行われ，胴部は丸くふくらみ下端部で急に内側で屈曲している。底部へ直接続くものか不明であるが，袋状の鉢形を呈するものであろう。胎土には白い砂粒，長石，雲母などを多く含む灰黒色を呈し焼成は良好。復原口径23cm。**7**・全体の形状は**6**に類似しているが，口縁部は平坦で端部は丸くおさめられ波状を呈す。頸部は内側に三角形状に突出しをもち二重口縁になる。内面はヘラ磨きのあとナデ，外面はヘラ磨きで仕上げられている。**8**・口唇部は丸くおさめられ，胴部へ直行する口縁で補修孔を有する。胎土はそれ程精製されてないが，内外とも表面はヘラ磨きによる仕上げが行われ，黒色ないし黄褐色を呈し胎土には白い砂粒を多く含み焼成は良好。**9**・精製研磨の屈曲した胴部片でヘラ状に施された沈線を一条めぐらすが，全体の形状は不明である。**11**・口縁を欠き，胴部は「く」字形に屈曲，ヘラ状の浅い沈線が一条めぐる。胴上部は外反し形状は鉢形である。内外とも丁寧なヘラ磨きが施され色調は灰褐色。張り出し部の復原径は約20cmを測る。**12**・精製された内面灰褐色・外面黒色を呈する研磨を受けない底部であるが，鉢形の精製土器に続くと考えられる。復原径8cm。

以上の精製土器は黒色研磨の洗練されたものではなく，ヘラで磨いた痕跡を明瞭に残すものが多く，色調も灰黒色系を呈し，黒川式以前に見られる黒色研磨の土器とは区別されよう。形態的には擬宝珠状あるいは玉縁状といわれる口縁を有し，黒川式に相当する土器も見られる。

壺形土器および底部（第24図1～12）

1・口縁はわずかに外反しやや尖がり気味に丸くおさめられている。頸部はほぼ垂直に下り，肩部で開き胴部との接合部でゆるい段がつく。完形品でないので詳細な観察が出来ないが，胴部はあまり丸く張らず上部の方で最大径を測る。底部は丸底に近い平底で中心はややあげ底である。外面全体と口縁部内面にかけて丹が塗布されている。胎土は精緻だが焼成甘く，内面は剝落が著しい。**2**・口縁部は尖がり気味に外反するが頸部は直線的に開き，肩部の接合部で折れている。内外面ともナデ仕上げで黒色を呈する。胎土は石英粒を多く含み焼成はやや甘い。復原口径11.5cm。**3**・口縁が尖がり気味で**1**・**2**と大差ないが，頸部にかけて外反著しい。内



第23図　精製土器(浅鉢類)実測図(1)

外ともナデで研磨は受けていない。色調は口縁周辺が黒色で他は黄褐色を呈す。胎土は石英粒，長石，雲母を含み焼成はやや甘い。**4**・口縁部がわずかに外反し，端部は丸くおさめられた精製土器であるが，器壁の剝落と磨耗が著しく明確な壺形土器としての断定はし難い。**5**・長頸の壺で口唇部で外反する。肩部も若干外反するが欠損している。内面は粗いヘラ調整と横ナデ，外面は丁寧なヘラ磨きが施され，褐色ないし黄褐色を呈し胎土は精製されている。**6**・小形壺口縁部で内外面に丹が塗布されている。口縁は頸部にかけてわずかに外反しており局部的に反らない。器壁は薄く胎土は精製され焼成は良好。**7**・胎土は精製されザラついているが，ヘラ磨きされている。口唇部はやや外反している。**8**・**7**とほぼ同様の胎土の底部であるが，内面はナデで整形されている。形状は丸底に近く壺形になるものと思われる。**9**・胴まわり8cm，胴部と肩部の張り出し部分に細い一条の線を施し，底部は丸底である。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。胎土は精製され外面はヘラ状による整形が行われ，焼成は良く灰褐色を呈する。供献用の小形壺状の土器になると思われる。**11**・大形の壺底部で底から胴へ立ち上がる部分は角がとれ丸味をおび，ややあげ底になっている。全面に丹を塗布し，部分的にスス状の黒い付着を見る。内面は小豆大の凹凸があり荒く黄褐色を呈す。胎土は石英粒が目立ち焼成は良好。**12**・大形の壺底部で平底部分には鯨の背椎骨と思われる文様を認める。内面はハケ状のものでナデまわし，胎土は精製され焼成は甘く黄褐色を呈する。

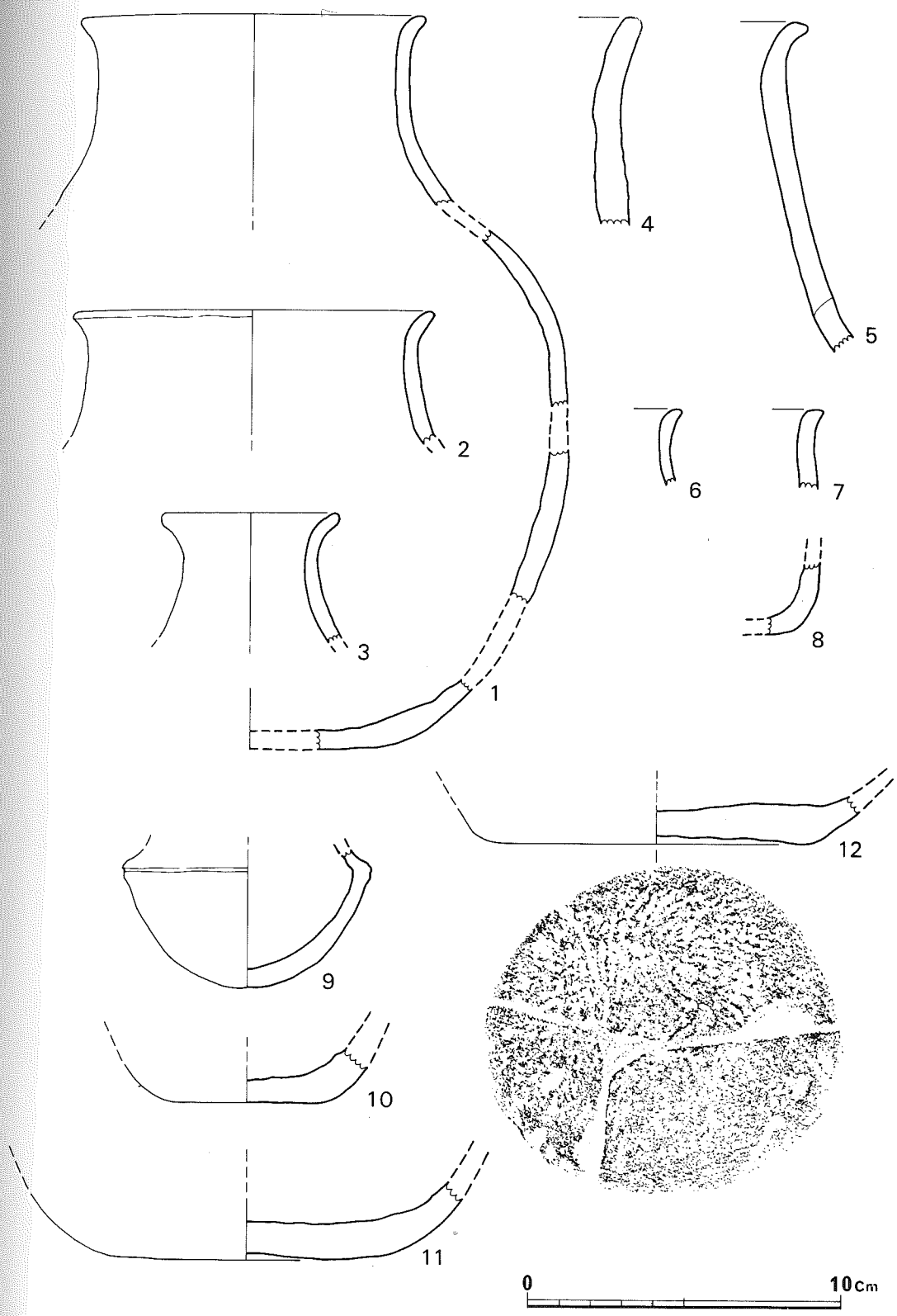
下川氏採集の遺物とその他の遺物（第25図1～24）

下川達彌氏の御厚意により氏が小浜高等学校在職中の昭和40～42年までに採集された遺物について説明したい。なお石器については9点が含まれている。

遺物採集地点は小浜遺跡として調査され，現在一部保存されている周辺から今回の調査区域に至る畑地である。

遺物**1**は刻目突帯文が見られる。内外をナデ，口縁と肩部に刻目突帯をもつが，肩から「く」字形に屈曲した部分から欠損している。**2**・**3**は網目圧痕土器で内面は黒色である。**4**・**7**は蓆目圧痕土器で経糸と緯糸の間隔が疎であるものと密に観察されるものがある。胎土は全体に良好で褐色ないし暗褐色を呈している。**10**は突帯文を有するが頸部が内弯し，これまでの突帯文土器とは逆の施文になっている。胎土粗く黄白色を呈し焼成は甘い。**11**は外面に斜と横方向に不規則な条痕を施し，内面は横方向に認められる。**12**も内面に条痕を施すが，外面は擦過状の粗い調整痕を施している。**13**～**16**はともに口縁部である。**13**はゆるい波状を描き，**16**は口唇に粘土の貼り付けを行い内外にふくらみをもたせているが，端部は平坦である。**17**は胴部にわずかな厚味があり張り出しを付けている。他の土器は内外にハケおよび条痕で調整され胎土，焼成は良好。底部は**22**～**24**の3点でいずれも厚味をもち，立ち上がり部分でくびれている。

以上ここにあげた土器は，今回調査した地点における出土遺物と共通した構成であり大差ない。その点では昭和38年調査された小浜遺跡と同じ範囲の中で考えられるべきものである。



第24図　精製土器(壺類)実測図(2)

その他の土器について（第25図19～21）

19は頸部から胴部に移行するくびれた部分に浅い沈線を２条めぐらし，その間に刺突を施している。胎土は精製され，器表面は内外とも研磨され色調は黄褐色，焼成も良好。**20・21**は文様と胎土から同一個体と思われる。内面はナデ，外面はヘラで丁寧に磨かれている。文様は３条の浅い沈線をめぐらし，上部の沈線間に磨消縄文を施している。胎土には白い砂粒を多く含み焼成も良好。

この３点の土器は今回の調査における出土であるが，山の寺式期の土器を主体とした中で異色のものである。文様，胎土，形状からして縄文後期後葉における西平式の特徴をよく備えている。しかし周辺には西平式期に相当する遺跡も存在せず，他地域から流入された可能性も考えられるが，器としてもたらされたものか，破片として持ち込まれたのかは不明である。

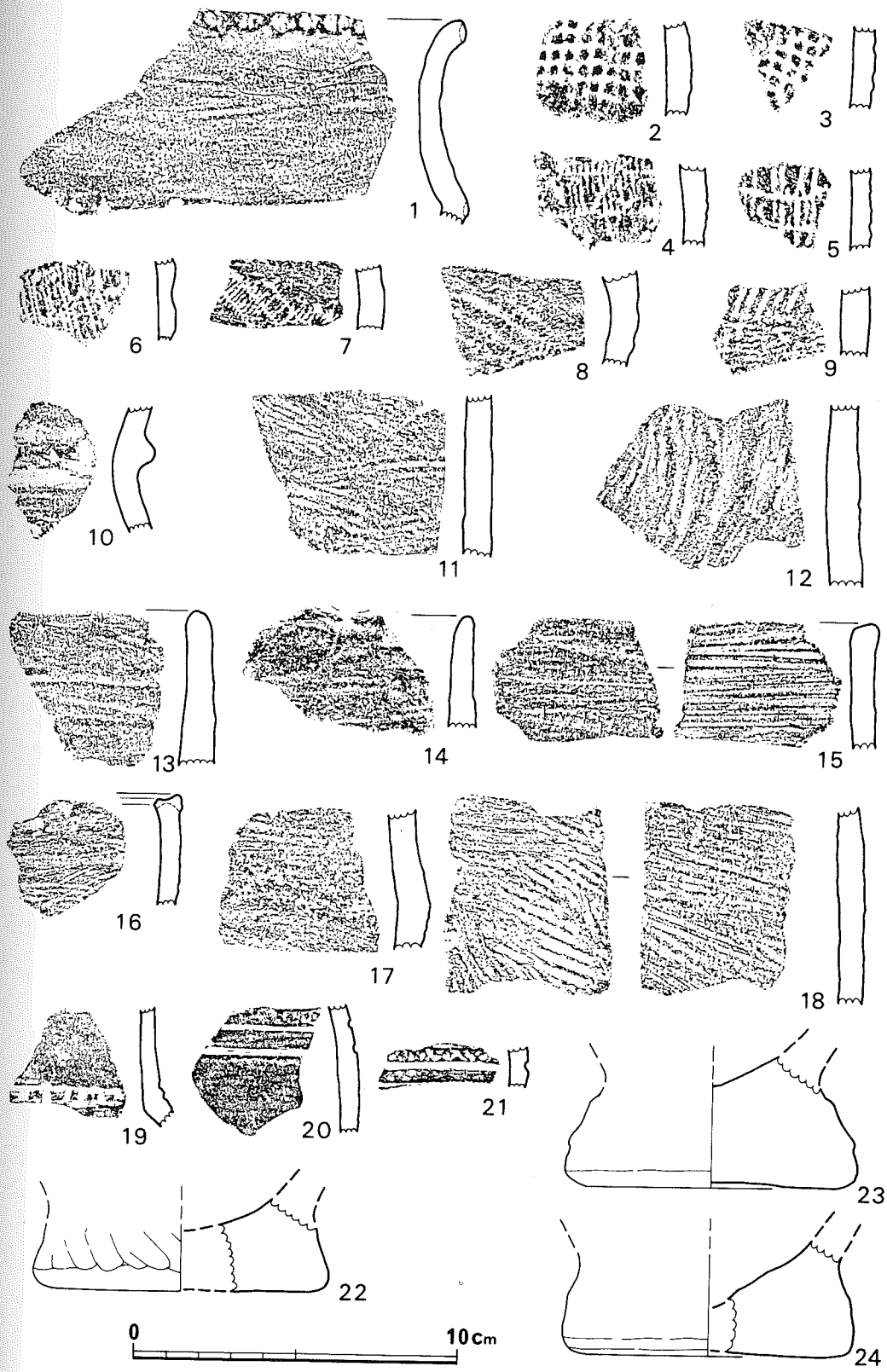
本遺跡のもつ時間的，あるいは地域的な問題を出土遺物で見てみると，甕，鉢，浅鉢，壺がセット関係を成す。またその中では刻目突帯文，組織痕，精製研磨の土器さらに小形の供献用土器が見られ，他の遺跡と比較資料となる。とりわけ類似資料出土の遺跡は山の寺遺跡があげられる。両者は雲仙岳を中央に，朝日山遺跡が西側に,山の寺遺跡は東側に位置し,南側はなだらかな山麓が形成されており，地形的にこの両遺跡の南端に位置するのが原山遺跡である。

山の寺遺跡出土の遺物は量的，バラエテイーの面では朝日山遺跡を凌ぐが，内容的にはそれ程の変化は見られず，従って時期的には平行して生活が営まれていたことが窺える。

原山遺跡は時間的に若干後出する文化であることが認識されているが，刻目突帯を有する。支石墓を主体とした埋葬遺跡としても知られている。特に原山遺跡出土の刻目突帯文土器はその胎土および焼成が他の遺跡出土の土器と比較して特徴的になっている。朝日山遺跡でも原山遺跡出土の土器と全く同じ特徴をもつ刻目突帯文土器の出土を見た。このことは本遺跡が原山遺跡と何らかのかかわりをもっていたことも推察出来，山の寺遺跡とともに三角形状に結ばれる所に位置し，興味深いものがある。

組織痕土器は全体の量から比較すると微量であるが，文様をもつ土器の中では大きな比重を占めていたと考えられる。組織痕土器の中で量的に多いのは蓆目痕であり，山の寺遺跡でもその傾向が指摘されている。網目痕の土器は晩期二式の頃主流を占め，宮崎市松添貝塚や鹿児島県黒川洞穴出土の黒川式土器に供伴している。蓆目痕は山の寺式期盛行し，夜臼式期に至って網目が残り以後衰退する過程をたどるものと考えられる。県下における組織痕土器出土の遺跡で最も多いのは山の寺式期の遺跡で，夜臼式期の網痕出土の遺跡は北松浦郡里田原遺跡が知られている。

以上のような状況よりして本遺跡の時期の決定は縄文晩期二式後葉から三式に盛行し，以後衰退していったものと考えられる。（安楽）



第25図　下川氏採集の土器およびその他の土器実測図

石　器

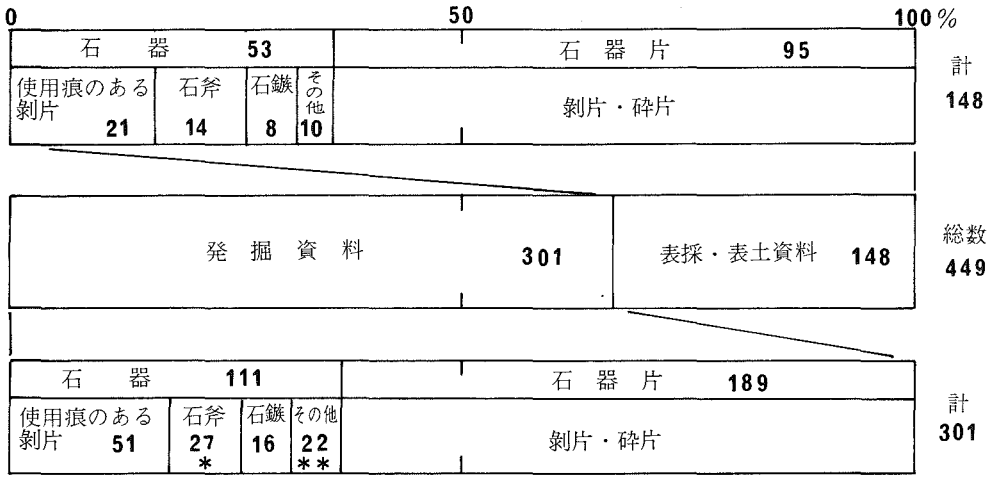
石器及び石器片の出土点数は，発掘資料，表採・表土中資料を含めて 449 点である。但し，調査は開発により破壊される区域のみに限定している為に，朝日山遺跡全体の資料ではなく，従って本来の石器総数は当然もっと増えるものである。しかし，石器の組成そのものの比率については，本遺跡がほぼ時期的に単一であることと，発掘資料と表採・表土中資料の組成比率が相似た傾向を持つことからも大きく異なることはないものと考える。(第 3 表)

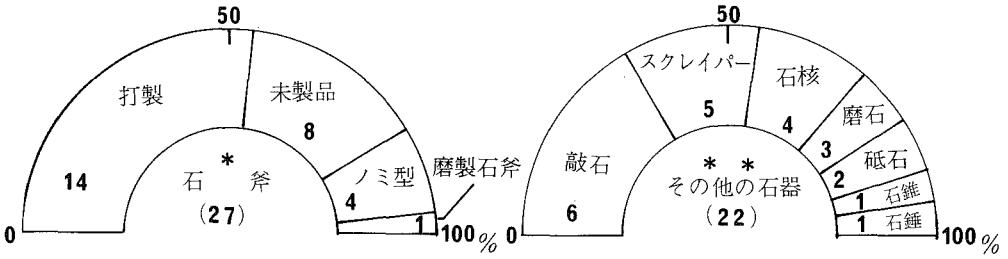
発掘資料は 301 点であるが，この内石器として使用されたものは 111 点を数える。これらの石器には，使用痕のある剝片（U.F）が最も多く，以下石斧，石鏃，敲石，スクレイパー，磨石，砥石，石錘等が含まれる。

石器の出土層位は，2 層の黄褐色土層に集中し，3 層になると殆ど含まれない。この点は当然ながら土器の出土状態とも一致し，又その分布範囲も同様である。

以下図示した各石器の概略を記しておきたい。なお，図示する石器は発掘資料及び表採，表土中資料をも含む。

第 3 表　出土石器の比率





石斧（第26図～第30図，図版29～図版31）

石斧は大きく打製石斧，磨製石斧，同未製品，扁平片刃石斧等に分けられる。

1～**23**は打製石斧である。石質は全て安山岩系で，器形は殆どが短冊形を呈する。製作にあたっては手頃な扁平の礫に全周にわたって両面より調整加工を行い形を整える。しかし調整剝離が礫全面に及ぶことはなく，全て一部に自然面を有する。消耗度はかなり高く，23点中，完形品は7点で30％強にすぎない。折損部をみると，中央部で折損したもの11点，基部のみを若干欠損するもの4点となるが，この内，大部分のものが刃部に平行して折損するのに対して，刃部に直交した折れ方を有する資料もみられる(**13**)。なお，使用時の擦痕等については殆ど観察されない。

24～**31**は何れも素材として結晶片岩を用いる。これらの石材は何れも加撃に対してもろく板状に剝離しやすい性質を持つところから打製石斧には向かないものと思われる。又，**25**・**26**・**28**・**29**については刃部に研磨痕を持っていることからも本来磨製石斧の未製品としても理解する必要がある。しかし，反面，一部を除いては何れも，磨製石斧製品にみられるような厚みに欠け，又**30**の如く，使用時の欠損と思われる資料も認められることは，局部磨製の石斧として使用された可能性も否定できない。従って本資料については，後述する扁平な小型の石斧類の未製品の可能性と同時に刃部付近のみを研磨する打製石斧として考えられる事も合わせて指摘しておきたい。

以上の石斧について，完形品及び全体の器形が判る17点の計測値を求めてみると，長さは8.5～11.5cm，巾4.5～5.5cm，厚み1.5～2.5cm，重量は80～180gとなる。これらの数値は，更に2つのグループに細分が可能であるが，ここではその全体の平均値のみを示しておきたい。すなわち，長さ9.7cm，巾5.5cm，厚み2cm，重量137gが本遺跡出土石斧の平均的な数値ということになる。

32～**35**は磨製石斧である。**32**以外は何れも使用時に折損しているが，本来は蛤刃を有する重量感ある石斧であったものと思われる。

その他の石器（第30図～第37図，図版32～図版35）

36・**37**は砥石。共に砂岩を用いる。**36**には明瞭な溝状の使用痕はみられないが，表面と側面の中央部に研磨痕がみられる。**37**は皿状の断面を有し，石皿等からの転用品と思われる。

36～**49**は敲石と磨石である。砂岩と安山岩が利用される。これらの内，**41**・**42**・**46**・**48**・**49**は敲石と磨石とに併用されたものである。

50は不明石器。結晶片岩で一端に抉りがみられる。十字形石器の未製品か。

51は石錘である。かなりの重量を有し，両側辺に抉りをもつ。結晶片岩製。

52はサヌカイトの剝片で，定形石器ではない。側縁部の使用痕からU.Fとして取り扱う。

53は大型のサヌカイト製スクレイパーである。横剝ぎの剝片を利用し，打面部の対称部位に調整加工を施こす。

54・**55**・**57**・**58**は同種の機能を持つ扁平の石斧であるが，**54**以外は両刃である。なお**54**・**57**

は両端に刃部を持つ。**56**は柱状石斧，両端に刃部を持つ。以上の石器は何れも蛇紋岩でよく研磨されている。

59・60は共に黒曜石製の石核である。何れも打面調整を行わず打面部を移動する。不定形な剥片を剥ぎとったものと思われる。なお，**60**には背面部に自然面を有する。

61～79は石鏃である。形状的には基部の抉りが深いもの(**61～68**)，抉りが浅いもの(**70～73**)，そして平坦なもの（**74～79**）の３種に分かれる。何れも欠損率が高く，19点中完形品は僅かに４点のみである。

80～82は石錐。**80・81**は共に黒曜石製。**82**は横剥ぎの安山岩剥片を利用し，使用部位の周辺のみに簡単な調整加工を行っている。

83はポイント状石器である。安山岩製で両端を欠損する。風化はかなり進行している。

84は磨製石剣の一部と思われる。図示した面はよく研磨され，鎬を作り出す。刃部も鋭い。断面はレンズ状を呈するものと思われるが裏面が完全に剥落している為に明瞭さを欠く。頁岩製。当遺跡に隣接する小浜遺跡[註1]で，且つて滑石製の石剣が出土しているが，実用品とは思われず，この点からも石器としての石剣の出土は，時期的な問題と同時に先述した柱状のノミ型石斧(**56**)の存在をも含んで興味深いものである。

85～88はスクレイパーである。先端部や側縁部に調整加工を施こし刃部を作り出す。

88～104はU.Fである。何れも縦長剥片を利用し，側縁や先端部に使用痕を持つ。

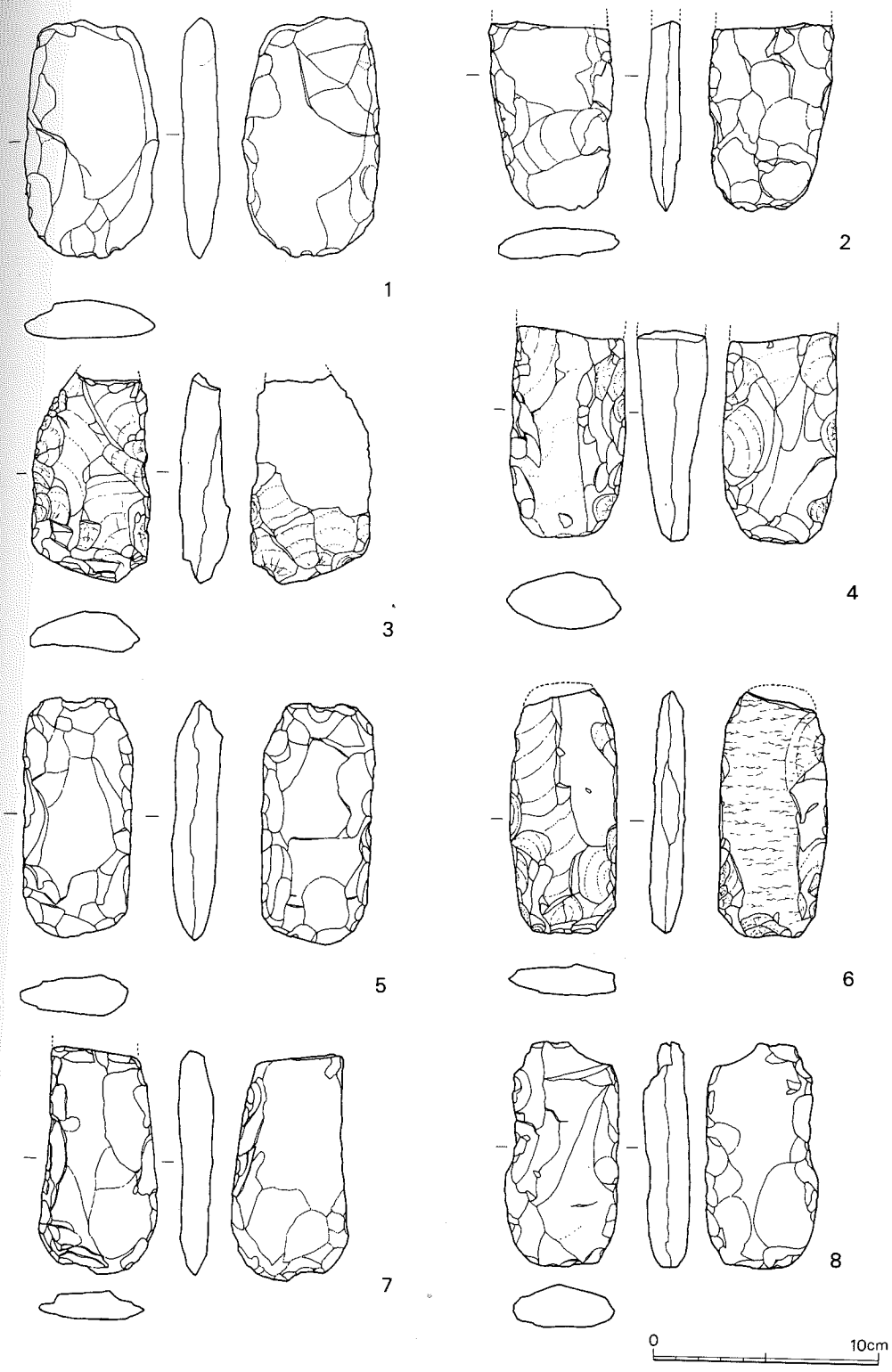
以上の石器の素材については，まず安山岩と砂岩は周辺に豊富に産出する。しかし結晶片岩類は，橘湾をへだてた対岸の長崎半島に供給地を求めなければならない。本遺跡との距離は直線にして約25km。海上を利用しての運搬が容易に考えられる。

黒曜石は，肉眼観察でみる限り４種に分けられる。(一）は漆黒色で良質のもので，所謂佐賀県伊万里市の腰岳産系と思われる(**85・86・87・90・94・95・98・101**)。(二)は，灰黒色を呈するもので従来より佐世保市淀姫系と呼ばれるものである(**61・65**)。(三）は中に不純物を多く含む種類のもので，県内に産する黒曜石には類例をみない。熊本県や鹿児島県に多いらしい。(四)はそれ以外のもので，詳細にはなお数種に分類されるものと思われる。なお，この中には佐世保市針尾中町[註2]で産する種類も含まれている。

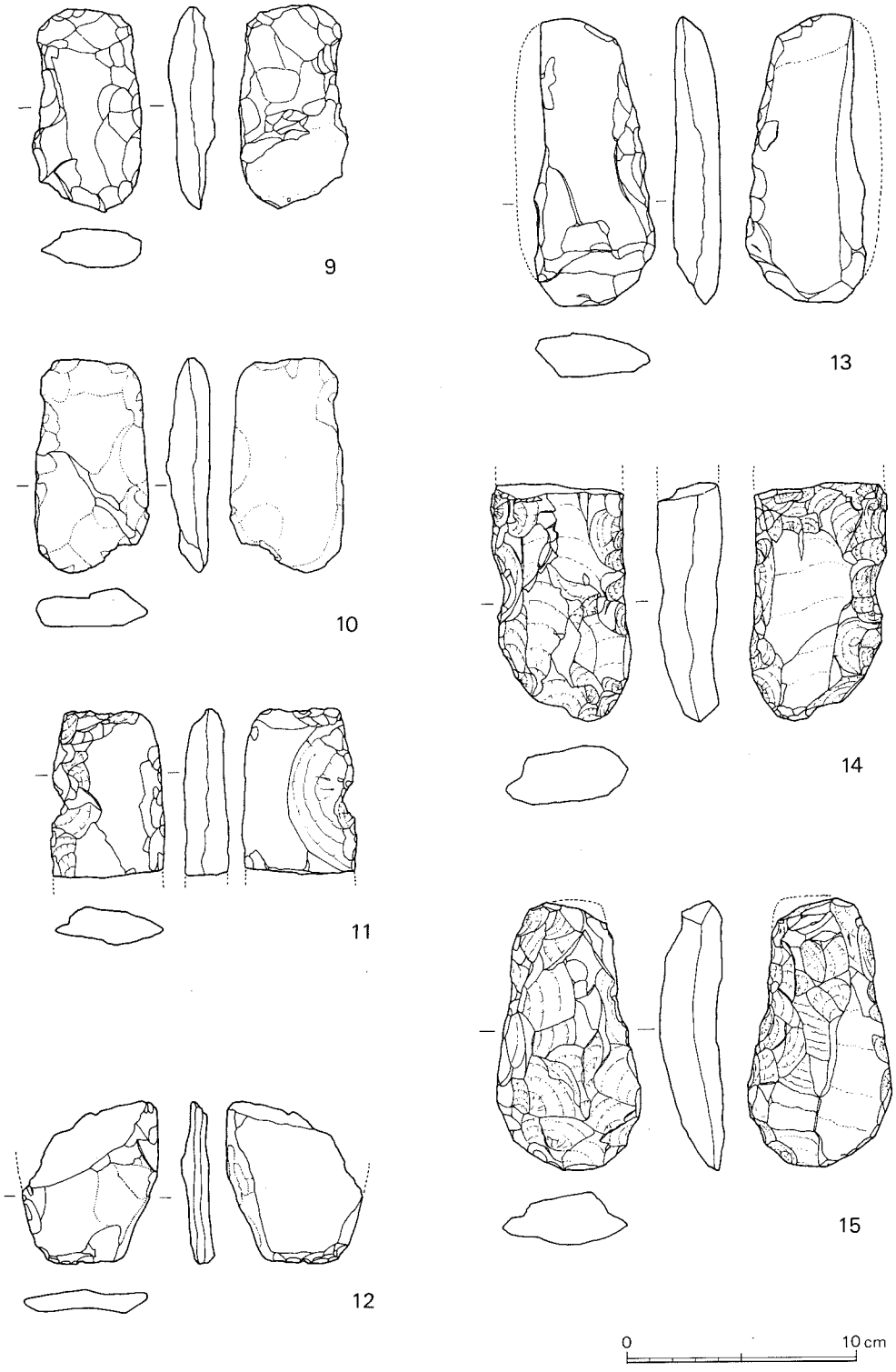
（高野）

註１　森貞次郎　1961「長崎県小浜の石剣」九州考古学13

２　1977年，県教委調査。報告書近刊。調査地は，黒曜石の原産地で，拳大から人頭大までの多様の黒曜石を産する。肉眼でみる限りでも数種に分けられ，この点からも黒曜石の産地を一概には決定できないことが判った。



第26図　石斧実測図(1)

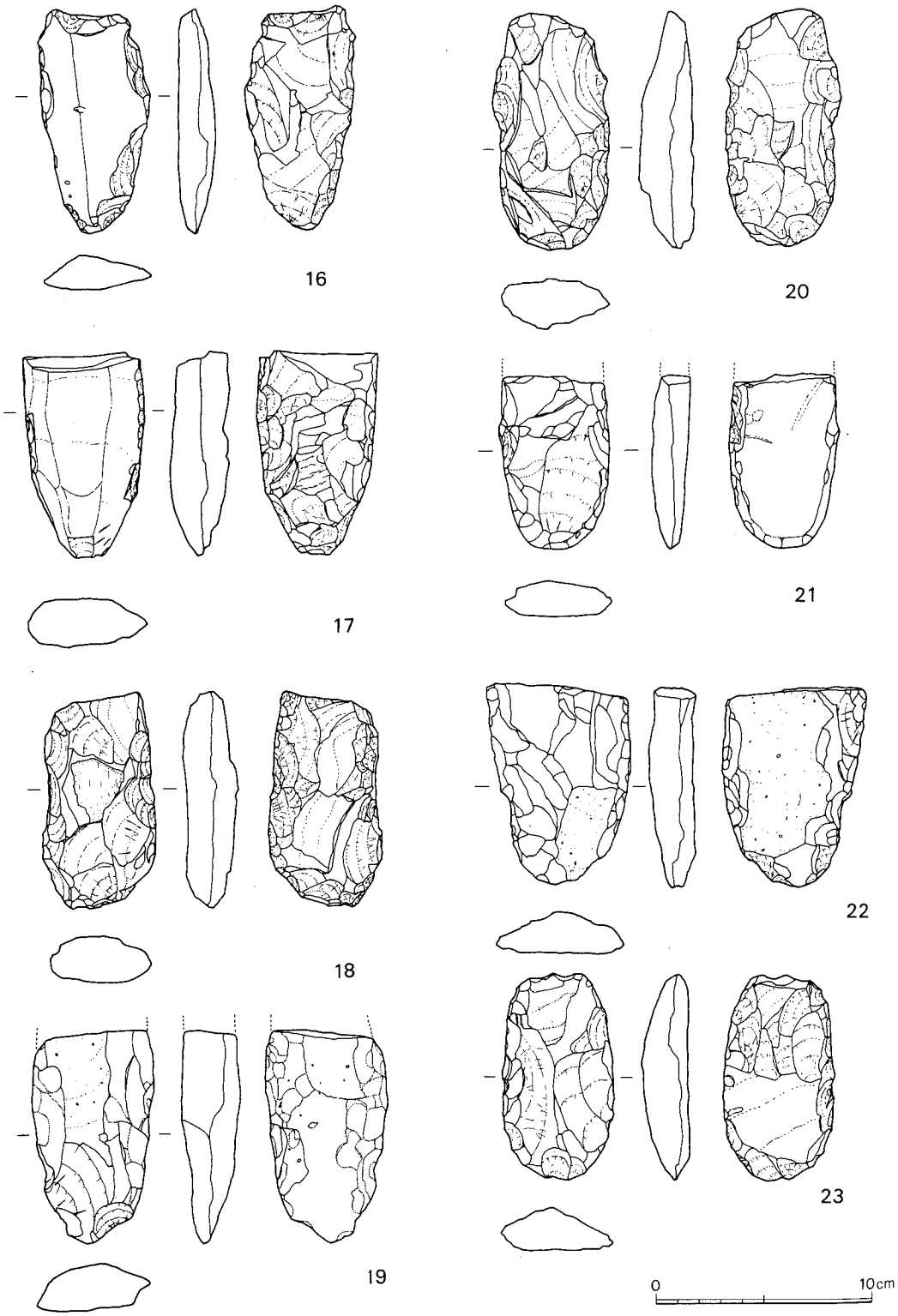


第27図　石斧実測図(2)

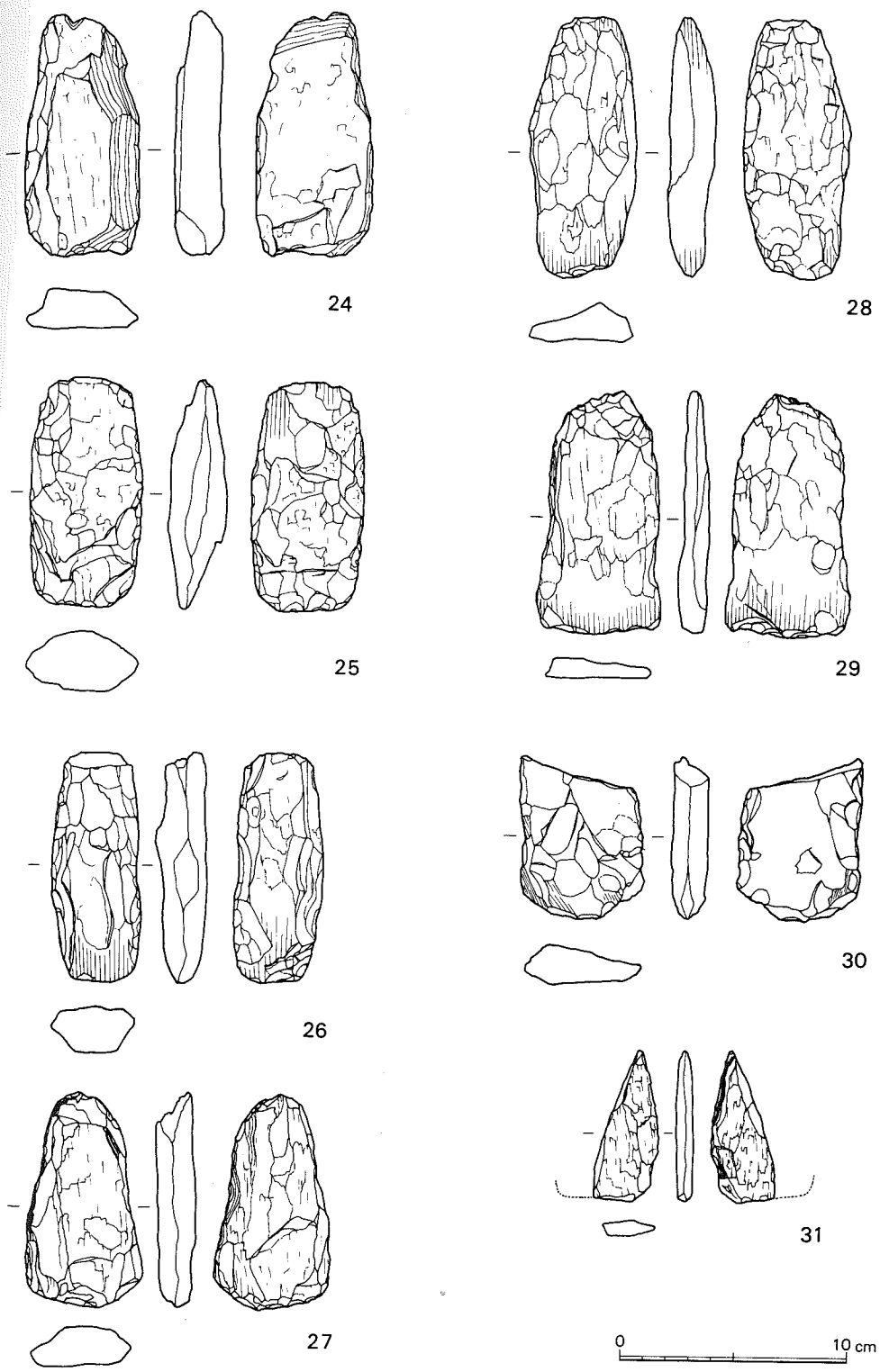
第4表　石斧計測表　①　　計測値は現存値

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
1	D－2 表土	10.7 6 1.6 140	――	短冊形。薄手素材利用。全周にわたって両面からの剝離あり。風化が進み稜線不明瞭。	完形
2	B－4 Ⅱ	8.4 5.3 1.5 80	安山岩	短冊形。薄手素材利用。使用時の加圧で片面剝落。表面に自然面が残る。	⅓欠損
3	D－2 Ⅱ	9.4 5.2 1.8 95	安山岩	全周にわたって両面からの剝離で整形。使用時の加圧で片面の半分剝落。短冊形。	基部欠損
4	C－3 Ⅱ	9.2 5 3 180	安山岩	刃部を薄く基部を厚く調整。短冊形で精緻。 刃部磨耗。	基部欠損
5	B－5 表土	10.7 4.8 2 145	――	短冊形。風化により全体的に磨耗。形は精緻、薄手の素材を利用し、全面にわたって剝離調整を行う。	ほぼ完形
6	A－2 Ⅱ	10.9 4.7 1.4 100	安山岩	扁平な板状の素材利用、全周にわたって剝離を行い形を調整。片面に自然面を残す。	基部若干欠損
7	A－2 Ⅱ	10.2 5.1 1.5 95	安山岩	薄い板状の素材利用。刃部及び側縁にも磨耗痕。	基部若干欠損
8	H Ⅱ	10 5.1 2.1 120	安山岩	短冊形。薄手素材利用。片面に自然面を残す。全周にわたり両面からの剝離で整形。	ほぼ完形 基部に新しい割れ
9	B－4 表土	8.5 4.7 1.9 100	安山岩	薄手小型の礫利用。全面に剝離を加え短冊形に整形。使用時に片面剝落。	ほぼ完形
10	28－3 Ⅱ	9.4 4.9 1.9 110	安山岩	扁平な板状の素材利用。側縁に剝離を加えて短冊形に調整、刃部、側縁共に磨耗痕あり。	ほぼ完形
11	表採	7.2 5 1.9 90	安山岩	横剝ぎの小礫利用。全周に両面からの剝離を加えて短冊形に整形。刃部及び側縁のエッヂは鋭い。	半分欠損
12	1－18 Ⅱ	6.1 5.9 1.1 45	安山岩	薄手の素材利用。全体的に風化進行し稜線不明瞭。	大部分欠損 〃　剝落
13	B－4 表土	11.6 5.6 1.9 180	安山岩	板状の素材利用。全周に剝離を行い整形、両面に自然面が残る。	縦に⅓程度欠損

番号は挿図，図版番号と一致する



第28図　石斧実測図(3)

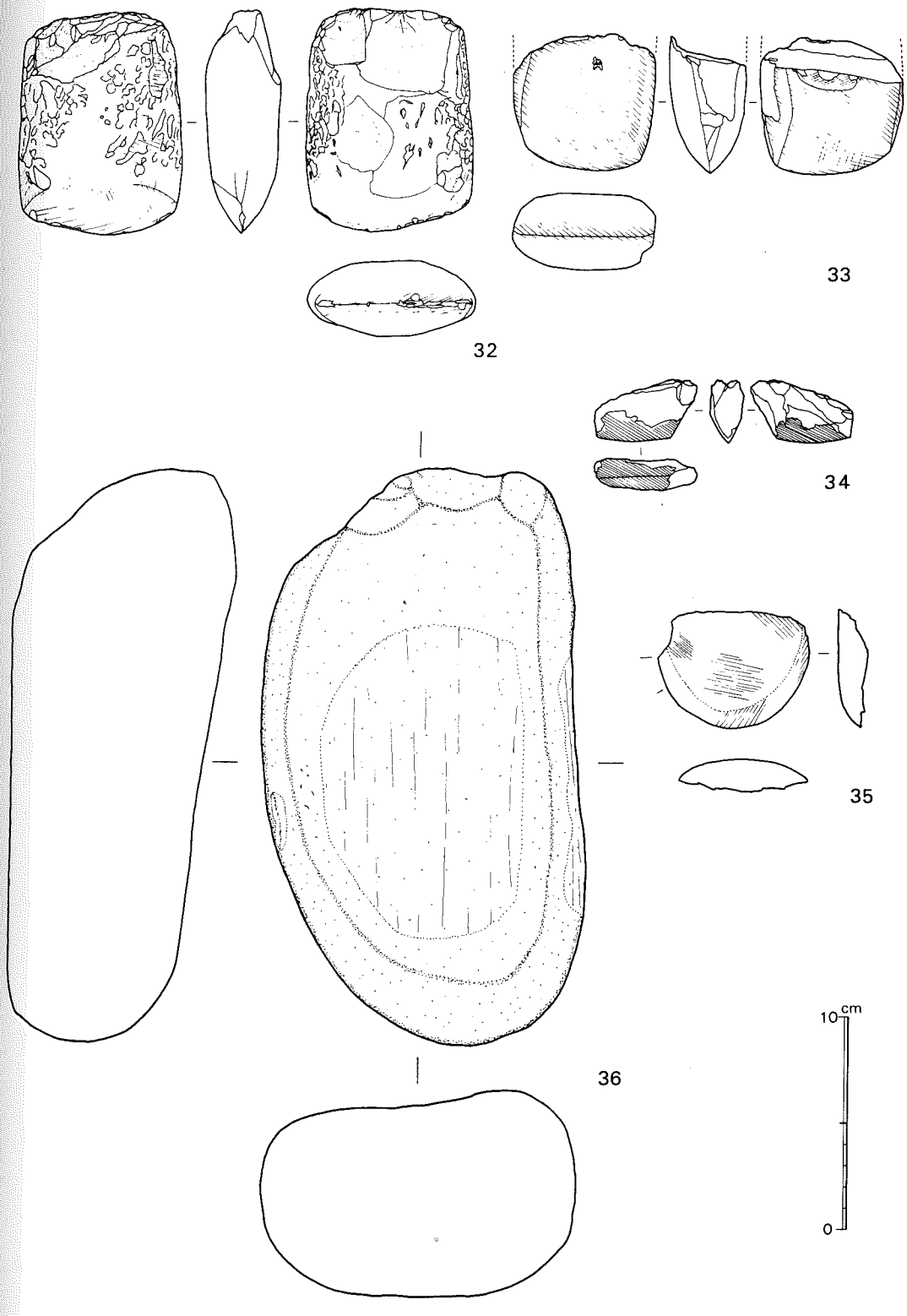


第29図　石斧実測図(4)

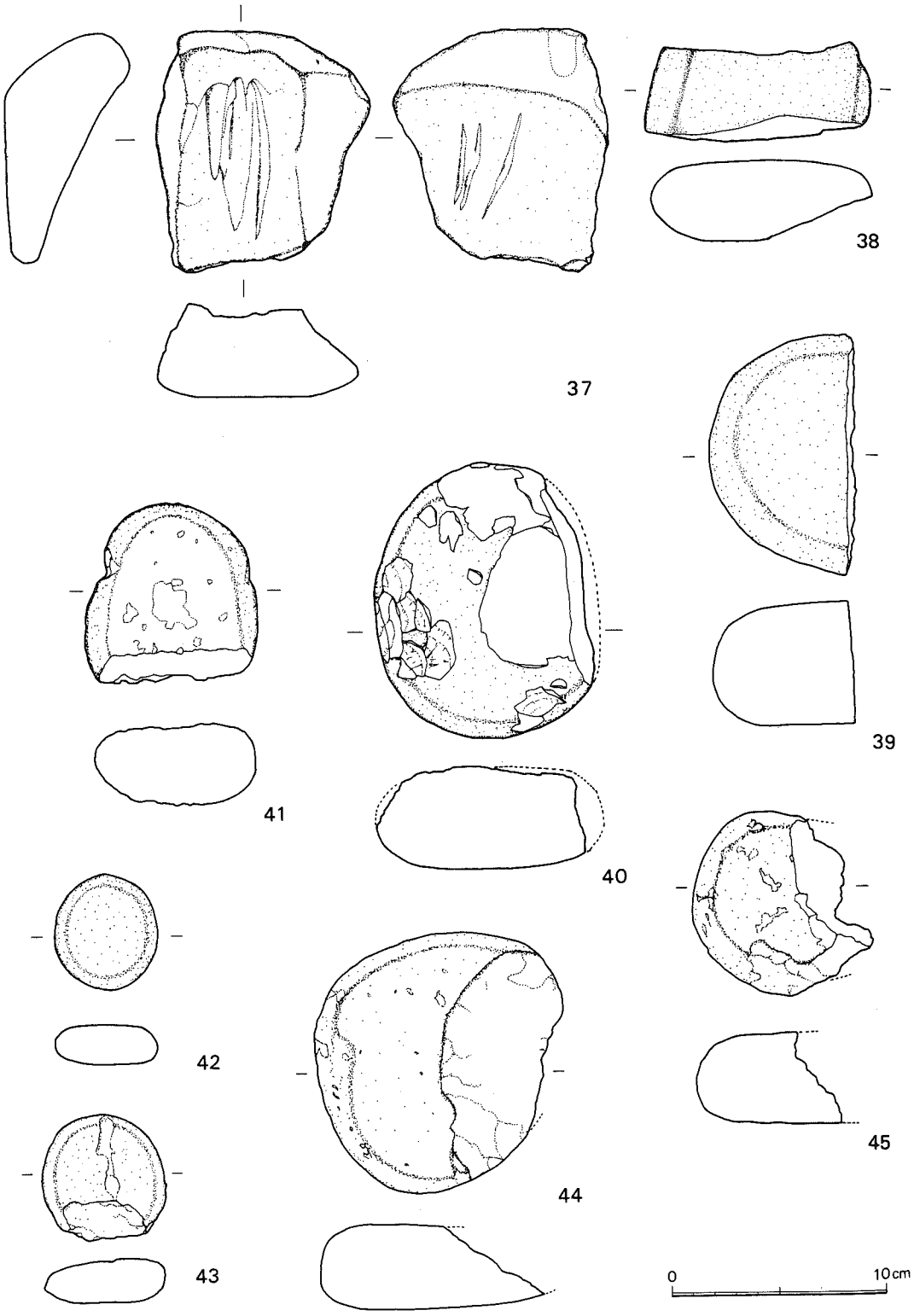
第5表　石斧計測表　②　　計測値は現存値

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
14	B－3 Ⅱ	10.3 5.7 2.8 200	安山岩	全面に剥離を加えて整形。刃部は丸味を持ち磨耗。	基部欠損
15	A－2 Ⅱ	11.7 6.2 2.4 190	安山岩	撥形。全面に剥離を加えて整形。刃部の形状は丸味を持ち，刃部・側縁共に磨耗。	基部若干欠損
16	B－5 表土	10 5 1.7 100	安山岩	小型の断面三角の礫利用。全周に剥離を加え整形。刃部の先端は剣先状に尖る。片面に自然面が残る。	完形
17	B－3 Ⅱ	9.2 5.5 2.7 160	安山岩	手頃な自然礫を利用。側縁のみに剥離を施して整形。使用時に片面剥落。	基部欠損 片面に剥落あり
18	表採	10 5.2 2.3 140	安山岩	扁平な素材利用。全周に調整剥離を行うが，表面に一部自然面が残る。刃部の形状は丸味を持ち，磨耗するが，使用時の加圧で一部剥落。	基部欠損
19	表採	9.6 5.6 2.7 170	安山岩	表面に一部自然面。側縁には全周にわたって剥離調整。刃部は剣先状に尖るが磨耗著しい。	基部欠損
20	A－3 Ⅱ	10.7 5 2.4 150	安山岩	扁平な小型の素材利用。表面に一部自然面が残る。側縁には全周にわたって整形の為の剥離。刃部は丸味を持ち磨耗。	完形
21	A－3 Ⅱ	8 5 1.7 100	安山岩	扁平な小礫利用。側縁の整形剥離は全周に及ぶ。刃部は丸味を持ち磨耗。	基部欠損
22	表採	9.3 6.7 2.2 140	安山岩	扁平な自然礫利用。側縁部に調整剥離を施して整形，刃部の先端は尖る。	基部欠損
23	B－3 Ⅱ	9.4 5.1 2.1 120	安山岩	断面三角形の小礫利用。側縁には全周にわたって両面からの調整剥離を施す。刃部は丸味を持ち磨耗する。	完形
24	C－3	10.7 5 2.1 160	結晶片岩	側縁部は全周にわたって調整剥離を施すが刃部形成にいたらず，基部に鋭利な削り痕あり。	磨製石斧未製品
25	A－2 Ⅱ	10.1 5 2.5 150	蛇紋岩	全体的な形状は整えられており一部に研磨痕あり，短冊形。	磨製石斧未製品
26	D－2 Ⅱ	10.6 3.8 2.1 110	蛇紋岩	全体的な形状は完成。上端を折損するが，本来この程度の長さに調整するものと思われる。刃部に研磨痕。	磨製石斧未製品

番号は挿図、図版番号と一致する



第30図　各種石器実測図

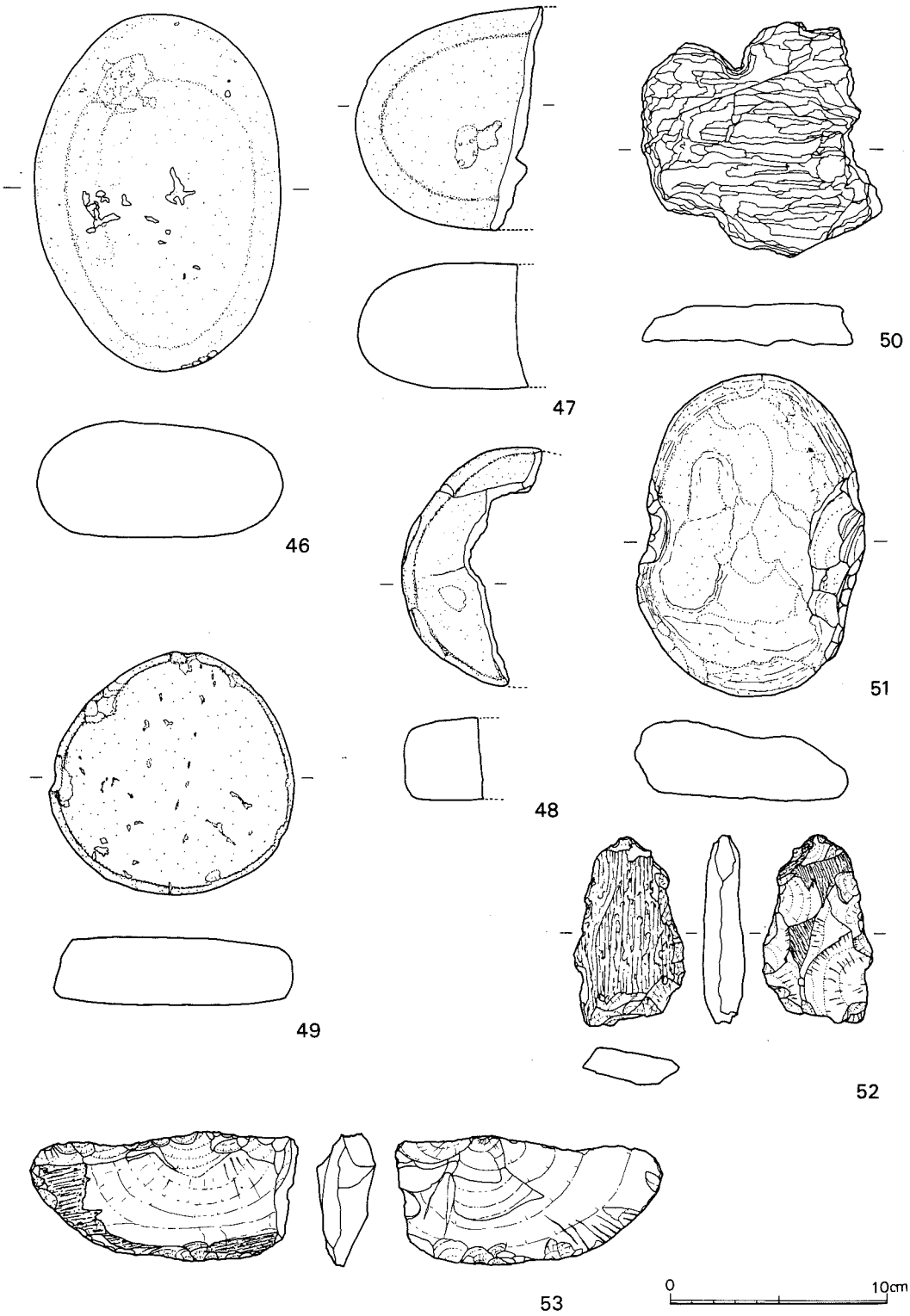


第31図　各種石器実測図

第6表　各種石器計測表　③　　計測値は現存値

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
27	表採	9.4 5 1.7 100	蛇紋岩	撥形。刃部に使用痕。研磨の痕跡無し。このまま打製石斧として使用された可能性あり。	基部欠損
28	B－3 Ⅱ	11.5 4.6 2 120	蛇紋岩	全体的な形状は大旨整える。上下両端に研磨痕あり。	磨製石斧 未製品
29	C－3 Ⅱ	10.5 5.4 1.3 80	蛇紋岩	扁平な礫利用。刃部に研磨痕，他の磨製石斧に比して著しく扁平，このまま利用された可能性あり。	磨製石斧
30	A－3 Ⅱ	7 5.3 1.6 80	蛇紋岩	短冊形を呈し，比較的扁平。刃部に一部研磨痕。このまま使用されたものであれば，折損はその時のもの。	基部欠損
31	C－3 Ⅱ	6.5 2.6 0.7 10	蛇紋岩	扁平礫利用。大部分を欠損するが，短冊形を呈していたものと思われる。	
32	25－1 Ⅱ	10.4 7.9 3.6 410	頁岩	刃部は厚く蛤刃を呈する。研磨方向は斜めであるが刃部先端部は横方向，使用痕顕著。	完形品
33	28－2 Ⅱ	6.4 6.7 3.6 170	蛇紋岩	蛤刃，全面に研磨痕が顕著。	基部欠損
34	表採	2.9 4.8 1.6 20	蛇紋岩	磨製石斧刃部。斜め方向に研磨痕顕著。	先端部のみ
35	A－3 Ⅱ	5.4 8.1 1.3 60	蛇紋岩	先端部のみ残存。全面研磨。使用時の加圧で片面剝落。	基部欠損 片面剝落
36	C－3 Ⅱ	27 14.5 9.5 5600	砂岩	表面と側面に磨痕。表面に凹みあり。一部赤変。	砥石
37	B－3 表土	11 9.6 4.2 560	砂岩	外縁が厚く，中央部は薄い。1面に4条，その反対側に3条の細い溝が走る。	砥石
38	C－3 Ⅱ	10.5 4.6 3.7 230	砂岩	側辺部に磨痕あり。	磨石 大部分欠損
39	B－3 Ⅱ	径 11 厚 3.9 260	砂岩	両面に磨痕あり。円形を呈する。	磨石 大部分欠損

番号は挿図，図版番号と一致する



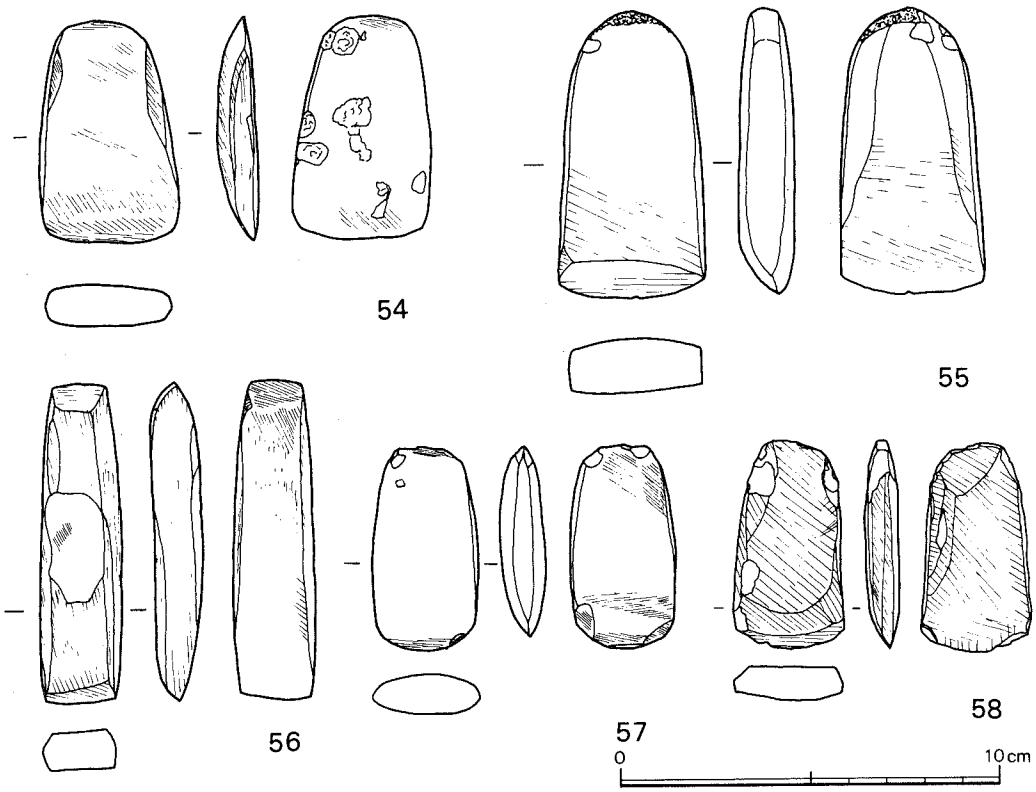
第32図　各種石器実測図

第7表　各種石器計測表　④

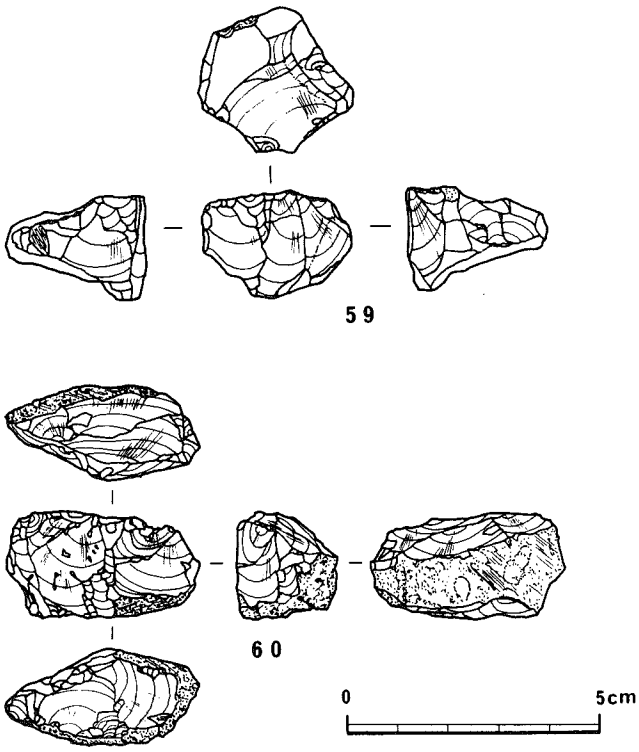
計測値は現存値

番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
40	B－5 表土	径 11.1 3.1 600	砂岩	円形。側面には縁取りあり。両面研磨，但し側面に敲石的な使用痕あり。	磨石 完形
41	B－3 Ⅱ	6.9 11.2 5.8 660	砂岩	片面に磨痕。先端部には敲打痕。	磨石 敲石 併用 半載
42	表採	5.4 4.8 1.9 80	安山岩	全体的に丸味を持つ。側面部に敲打痕。	磨石 敲石 併用 完形
43	C－3 Ⅱ	5.7 5.6 2.1 70	安山岩	一端に敲打による割れ。	敲石 一部欠損
44	B－3 Ⅱ	12.1 11.5 4 750	安山岩	側面に敲打痕。	敲石 ⅓欠損
45	C－3 Ⅱ	径 8.5 4.3 300	安山岩	だ円形。敲打により⅓程度欠失。	敲石
46	B－4 Ⅱ	16.5 10.3 5.3 1550	安山岩	だ円形。両面に磨痕あり。両端には敲打痕。	磨石 敲石 併用 完形
47	B－3 Ⅱ	8.6 10.3 5.8 730	安山岩	全体的に丸味をおびる。一端に敲打痕あり。	敲石 半載
48	1－1 Ⅱ	8.4 8 3.8 330	――	全体的に丸味をおびる。上端に敲打痕あり。 下端は欠失。	敲石 半載
49	B－4 Ⅱ	11.8 10.2 4.8 960	安山岩	全体的に丸味をおびる。両端に敲打痕。 片面は表面の剝落顕著。	磨石 敲石 併用 一部欠失
50	B－3 Ⅱ	11 10.8 1.9 260	結晶 変岩	扁平な素材，2ケ所に抉りあり。	不明 一部欠失
51	B－3 Ⅱ	14.8 10.5 3.4 870	結晶 変岩	素材の一部に調整剝離を行い整形。 両側面に抉りを入れる。	石錘
54	A－3 Ⅱ	5.9 3.6 1.1 40	蛇紋岩	両端に刃部あり。共によく研磨。但し，研磨痕は一部に斜め方向に観察されるが不明瞭。	扁平片刃 石斧 完形

番号は挿図、図版番号と一致する



第33図　扁平磨製石斧実測図



第34図　石核実測図

第8表　石器計測表　⑤

計測値は現存値

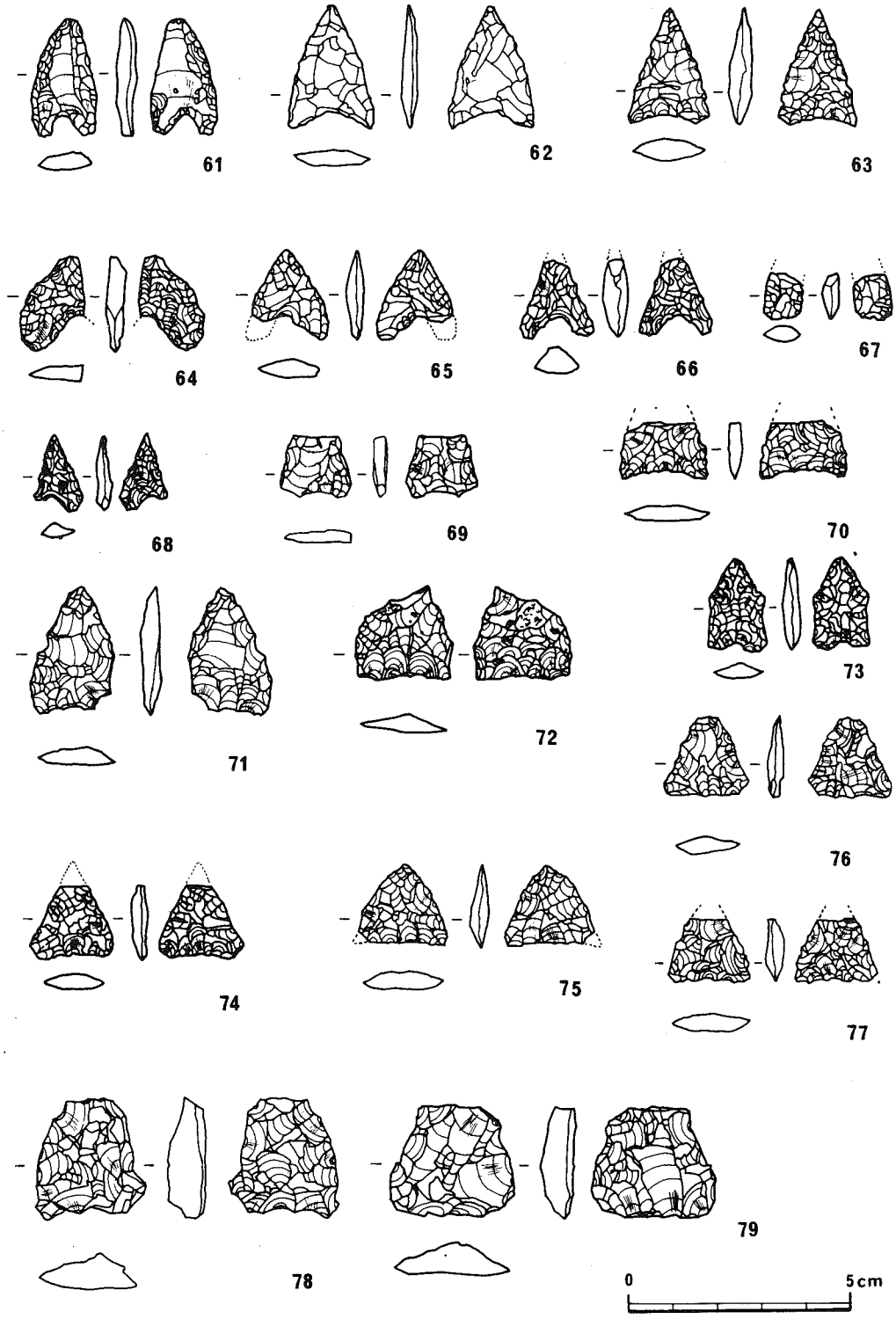
番号	出土区 層位	法量 cm g 長さ 巾 厚 重量	石質	特徴	備考
55	A－2 Ⅱ	7.5 3.9 1.4 90	蛇紋岩	基部は丸く敲打痕が認められる。その他の部位は全面研磨。刃部のみ横方向，他は斜め。	扁平片刃 石斧 完形
56	1－15 Ⅱ	5.5 2.9 1.0 20	蛇紋岩	全体的に研磨痕顕著。刃部先端部は横方向に研磨。刃部には刃に直交した擦痕あり。基部側面に一部欠けあり。	扁平片刃 石斧 完形
57	B－1 Ⅱ	5.4 2.8 1.2 30	蛇紋岩	両端に刃部を持つ。刃部には使用痕あり。 研磨痕不明瞭。	扁平片刃 石斧 完形
58	A－4 Ⅱ	8.4 2.1 1.2 40	蛇紋岩	両端に刃部を持つ。研磨痕が顕著で，刃部のみ横方向。他の部位は斜め方向。	柱状両刃 石斧 完形

第9表　剥片石器計測表　⑥

計測値は現存値。単位はcm，g

番号	出土区 層位	石質	長さ	巾	厚	重量	特徴	備考
52	16－2 Ⅱ	サヌカイト	8.6	5.1	1.9	70	側縁に使用痕あり。縦長剥片。 片面には自然面が残る。	U．F
53	B－5 表土	サヌカイト	12.3	6.0	1.6	140	横剥ぎの剥片利用。 下辺が刃部。	スクレイパー
59	1－83 Ⅱ	黒曜石	2.1	2.9	2.7	12.4	不定形な小剥片を剥離したもの。 打面調整なし。	石核
60	19－1 Ⅱ	黒曜石	2.1	3.8	2.0	14.0	不定形な小剥片を剥離したもの。 自然面あり。打面調整なし。	石核
61	表採	黒曜石 (灰黒色)	2.6	1.5	0.4	1.5	先端部欠損。	石鏃
62	B－1 Ⅱ	安山岩	2.7	1.9	0.4	1.6	先端部僅かに欠損。	石鏃
63	A－2 Ⅱ	黒曜石 (不純物混入)	2.6	1.8	0.5	1.5	炉址内出土。脚部一部欠損。 厚みがあり精緻。	石鏃
64	表採	黒曜石	2.1	1.4	0.3	1.0	鍬形鏃。 先端部及び片脚欠損。 調整剥離は丁寧。	石鏃
65	表採	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.9	脚部一部欠損。 全体的に風化が進む。	石鏃
66	表採	黒曜石 (漆黒色)	1.7	1.6	0.6	1.1	先端部欠損。 厚みがある。	石鏃
67	表採	黒曜石	1.0	0.8	0.3	0.2	脚部片。剥離は丁寧。	石鏃

番号は挿図，図版番号と一致する



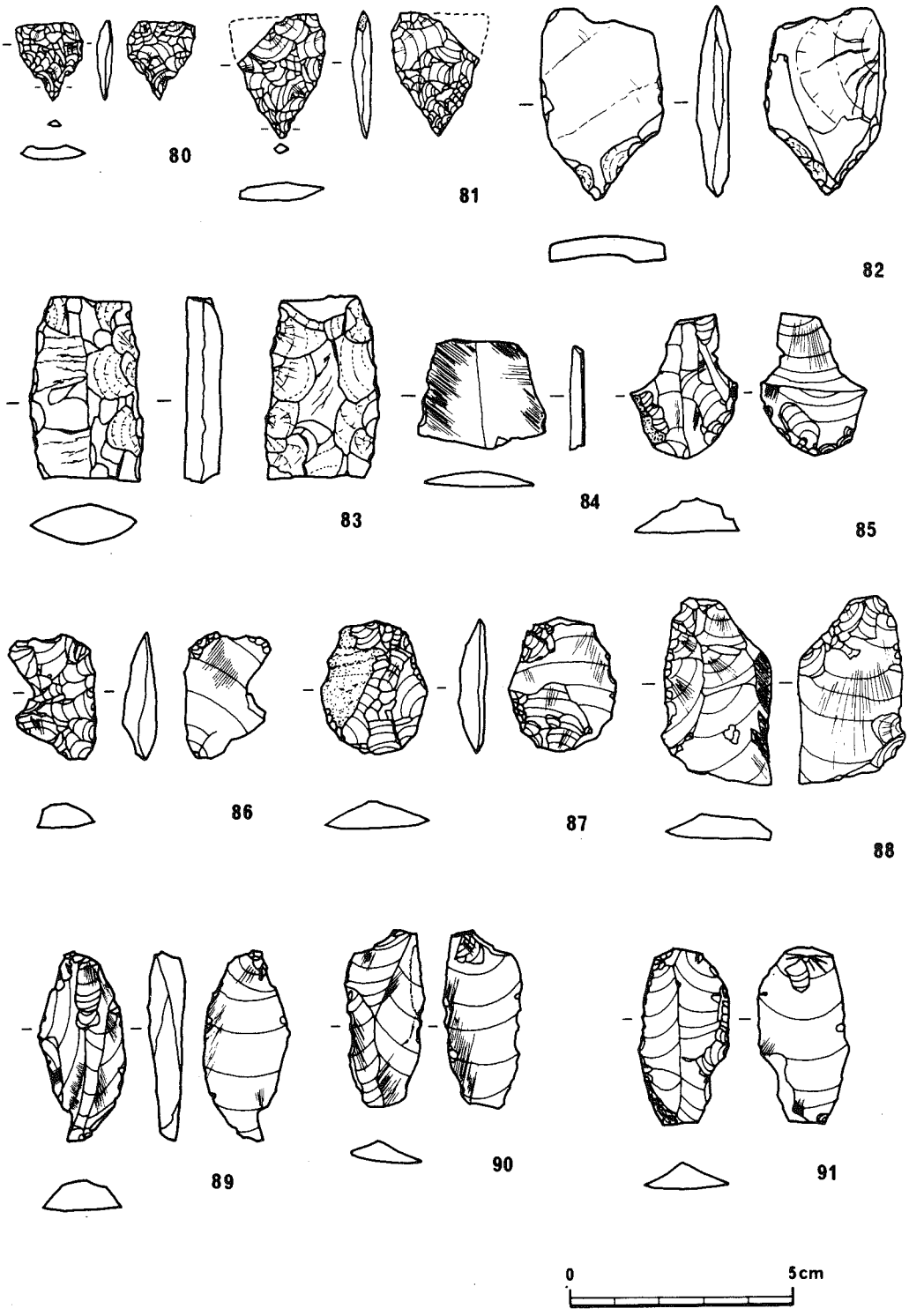
第35図　石鏃実測図

第10表　剝片石器計測表　⑦

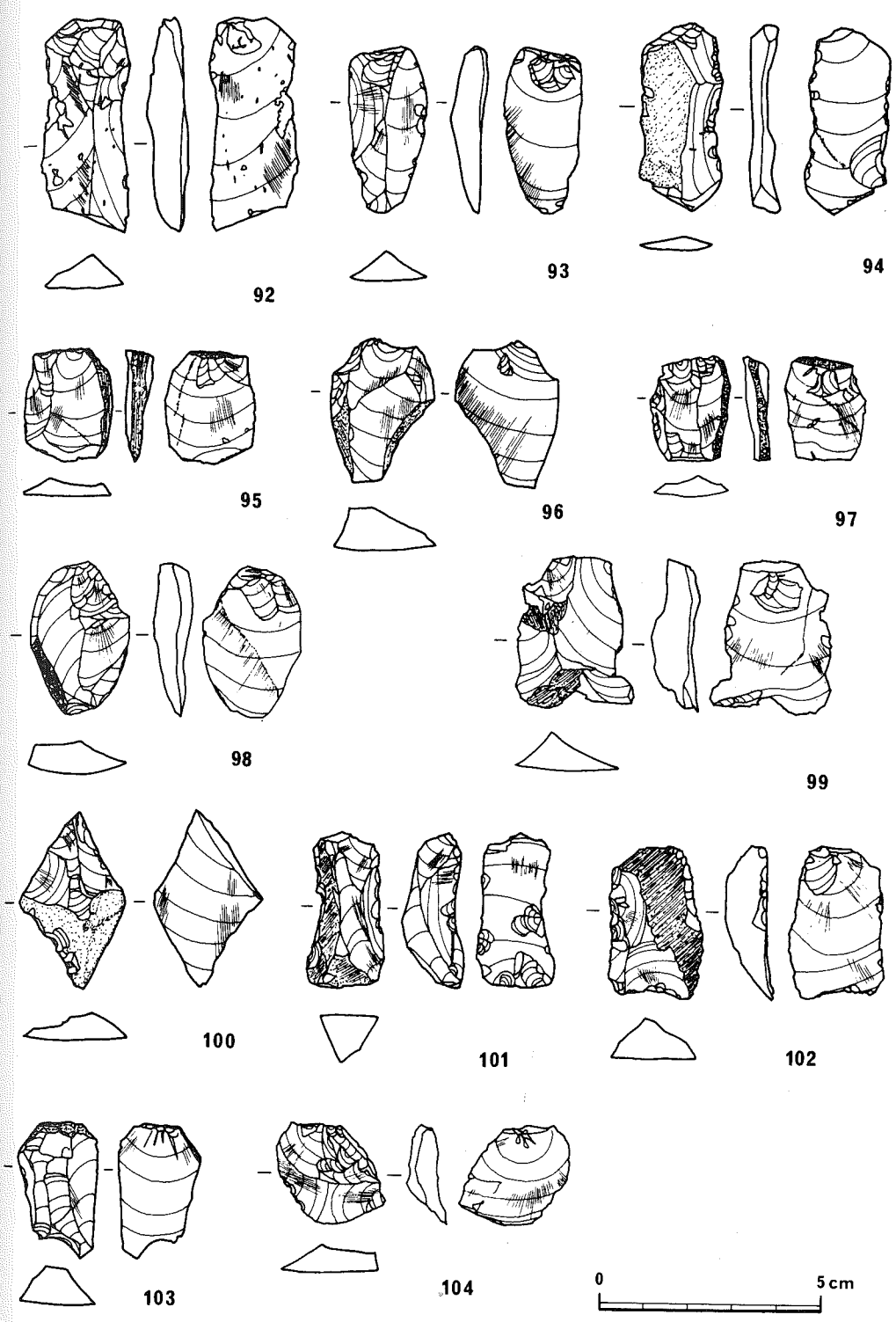
計測値は現存値。単位はcm，g

番号	出土区 層位	石質	長さ	巾	厚	重量	特徴	備考
68	表採	黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.5	片側脚部欠損。	石鏃
69	B－5 表土	黒曜石 (漆黒色)	1.3	1.8	0.4	0.7	先端部欠損。	石鏃
70	B－3 Ⅱ	黒曜石	1.1	2.0	0.3	0.9	先端部欠損。 剝離は丁寧。	石鏃
71	D－1 Ⅱ	黒曜石	2.8	1.7	0.4	1.8	片脚欠損。	石鏃
72	1－26 Ⅱ	黒曜石 (不純物混入)	2.1	2.1	0.4	2.0	先端部欠損。	石鏃
73	C－4 Ⅱ	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.9	五角形。剝離は細かく丁寧。 完形品。	石鏃
74	C－3 Ⅱ	黒曜石	1.4	1.8	0.4	1.0	先端部欠損。	石鏃
75	B－1 Ⅱ	黒曜石	1.8	2.0	0.3	1.0	正三角形に近似。 脚部僅かに欠損。	石鏃
76	A－1 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	1.7	1.8	0.3	1.0	先端部，脚部欠損。	石鏃
77	15－2 Ⅱ	黒曜石	1.7	1.8	0.3	0.9	先端部，脚部欠損。	石鏃
78	B－2 Ⅱ	黒曜石 (不純物混入)	2.7	2.4	0.7	4.6	先端部，脚部欠損。	石鏃（？）
79	表採	黒曜石	2.5	2.7	0.7	4.7	先端部欠損。	石鏃（？）
80	B－5 表土	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.6	一部欠損。	石錐
81	B－5 表土	黒曜石	2.7	1.9	0.4	1.7	一部欠損。 石鏃の可能性もあり。	石錐
82	C－4 Ⅱ	サヌカイト	4.3	2.7	0.7	4.0	横剝ぎの剝片利用。 先端部のみ調整加工。	石錐
83	D－3 Ⅱ	安山岩	4.0	2.4	0.8	11.1	両端欠損。 風化が進む。	ポイント
84	C－4 Ⅱ	頁岩	2.2	2.4	0.4	2.8	表面研磨，断面レンズ状。 両端欠損，裏面剝落。	石剣
85	B－2 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	3.1	2.3	0.7	3.4	片面剝落。 先端部に調整剝離。	スクレイパー
86	B－1 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	2.8	1.8	0.7	3.3	片面全面に調整剝離。	スクレイパー
87	B－1 Ⅱ	黒曜石	3.0	2.3	0.6	3.8	自然面を残し，全周に剝離。	スクレイパー

番号は挿図，図版番号と一致する



第36図　各種石器実測図



第37図　剥片石器実測図

第11表　剝片石器計測表　⑧　　計測値は現存値。単位はcm，g

番号	出土区 層位	石質	長さ	巾	厚	重量	特徴	備考
88	表採	黒曜石	4.2	2.3	0.6	5.8	縦長剝片利用。 側縁部に調整加工。	スクレイパー
89	A－2 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	4.3	1.8	0.6	5.0	縦長剝片。 側縁部に使用痕あり。	U．F
90	A－1 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	4.0	1.5	0.4	2.6	薄手の縦長剝片。 側縁部に使用痕あり。	U．F
91	A－2 表土	黒曜石	4.0	1.8	0.6	4.8	下端部欠損。縦長剝片。 側縁部に使用痕。	U．F
92	16－1 Ⅱ	黒曜石 (不純物混入)	4.8	2.1	0.9	6.6	断面三角形の縦長剝片利用。 側縁部に使用痕。	U．F
93	C－4 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	3.7	1.7	0.7	3.7	縦長剝片。側縁部に使用痕。 打面調整あり。	U．F
94	C－3 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	4.2	1.8	0.8	3.9	自然面の残る縦長剝片。 側縁部に使用痕。	U．F
95	28－1 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	2.5	2.0	0.6	2.3	側辺に自然面が残る。下端及び 側縁に細かい使用痕あり。	U．F
96	B－1 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	3.2	2.3	1.0	5.8	不定形の縦長剝片。側縁部と基 部の凹部に使用痕あり。	U．F
97	39－2 Ⅱ	黒曜石	2.3	1.8	0.6	2.3	側辺に自然面が残る。下端折損。 側縁部に使用痕あり。	U．F
98	40－2 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	3.4	2.2	0.8	5.1	縦長剝片利用。一部に自然面が 残る。側縁部と先端部に使用痕。	U．F
99	39－1 Ⅱ	黒曜石	3.4	2.6	1.1	5.3	縦長の不定形剝片。側縁部に使 用痕，一部に自然面。	U．F
100	C－3 Ⅱ	黒曜石	3.1	2.4	0.6	3.8	基部欠損，側縁に使用痕。 一部に自然面。	U．F
101	C－4 Ⅱ	黒曜石 (漆黒色)	3.5	1.7	1.4	6.6	断面三角形。ぶ厚い縦長剝片利用。 打面調整あり。側縁部に使用痕。	U．F
102	40－1 Ⅱ	黒曜石	3.4	2.1	1.1	5.9	側縁と下端部に使用痕。 自然面を残す。	U．F
103	B－4 Ⅱ	黒曜石	3.1	1.8	0.8	4.3	側縁部に使用痕。	U．F
104	40－3 Ⅱ	黒曜石	2.2	2.4	0.9	2.9	不定形剝片，側縁部に使用痕。	U．F

番号は挿図，図版番号と一致する

6．まとめ

小浜町朝日山遺跡は，経過の項に記したごとく，公営住宅用地造成工事に先行して実施した，いわゆる「記録保存」措置である。調査に先立って，事業サイドとの調整によって包蔵地の50％以上の面積が包蔵状態のまま残し得ることとなったが，遺跡の性格等について，ある程度のまとめが可能な調査内容であったといえよう。

遺跡の時期については，遺物・遺構の項で述べたごとく，縄文時代晩期後半とすることが可能であるが，本県においては，同期に属する遺跡の発見例や調査例が頓に増加しつつあり，従前調査されたものを含めた晩期遺跡群のなかで本遺跡を眺めてみたい。

近年，縄文時代晩期遺跡として調査されたものを列挙すれば，黒丸遺跡（大村市）・水の窪遺跡（福江市）・白浜貝塚（同）・ケイマンゴー遺跡（西海町）等がある。これらは，本遺跡の属する島原半島の同期遺跡と，その立地において立地条件その他の点で対照的である。島原半島における縄文晩期遺跡は，既報によれば礫石原遺跡（島原市）・山ノ寺遺跡（深江町）・原山遺跡（北有馬町）等のごとく，比較的高い標高域にあって，雲仙主峰直下の緩傾斜地に立地している。一方，昭和50年以前の時点の，島原半島以外の縄文晩期遺跡は，一部墓地を除いて，悉く，海岸地方にあり，このことから，外海形と仮称し，この立地傾向は，弥生時代中期まではほぼ，同じ傾向として把握されていた。このことは同時に，低標高域にある遺跡群と高燥域に立地する遺跡の性格の差として概観されたこともあった。

昭和51年に調査された水の窪遺跡（福江市）は，五島列島福江市の海岸部にある標高10mほどの台地辺端に位置する遺跡であり，黒丸遺跡は大村湾岸の標高３～４ｍ程の扇状地末端に位置している。ケイマンゴー遺跡は標高40m程の標高域ではあるが，西彼杵半島北端に位置し，海岸に程近い遺跡であり，本報の朝日山遺跡に似た立地条件下にある。これらの遺跡群は，調査以前の予察とはかなり異った内容をもつものであり，晩期遺跡観を変え得るものであったといえよう。

水の窪遺跡の場合，石器のうち，石錘１点以外は漁撈関係の石器は皆無に近く，打製石斧８点（6.6％）と石鏃33点（27％）が目立ち，ケイマンゴー遺跡においては，扁平打製石斧が発掘された石器の17.8％を占め，表採品の中でも注目すべき数のあることを注目している。黒丸遺跡では打製石斧の「圧倒的数量」が注目されている。これらの遺跡では更に，動物遺存体やその遺品が少いことが注目されよう。

一方，水の窪遺跡と８kmの距離の海岸砂丘にある白浜貝塚(ともに前掲福江市所在)は縄文前期～弥生後期の遺跡で，縄文晩期と弥生前期貝塚を有する遺跡であるが，前期（後半）貝塚を含めて磨製石斧はかなり量が認められるものの，打製石斧は豊富な遺物内容と数量にかかわらず皆無の状態であった。また白浜貝塚の動物・魚骨遺存体及び骨角貝製品は多量であり，石器

類にも漁撈関係のものが圧倒的多量であった。

このように縄文晩期遺跡に多量の打製（殊に扁平打製）石斧が出土する遺跡の傾向を近年の県に見たわけであるが，朝日山遺跡の場合も同様の石器組成傾向が指摘された。扁平打製石斧を，単絡に，なんらかの栽培に直結して考えるのは疑問があるが，前掲の水の窪遺跡・ケイマンゴー遺跡・黒丸遺跡や本報の朝日山遺跡等を考えた場合，切削具以外の機能の可能性を考えておきたい。また，海岸部における遺跡出土の晩期「扁平打製石斧」を，反対に，なんらかの漁撈に関係あるものとする仮定は今のところ困難と考えられ，海岸部遺跡においてすら多量に出土する点を，晩期文化そのものの基本的性格にかかわるものと考えておきたい。

本遺跡検出の遺構で注目されたのは人頭大の礫で構築された径1m程の炉址1基である。人頭大の礫を円形に配した石囲いのものと，小児人頭大の礫を集めたものと，形態は別として，近年，西日本でも増加しつつある遺構である。本遺跡の場合いずれも住居遺構に伴わない屋外炉であるが，今後検討を要する遺構である。

本遺跡には，調査範囲に関する限り墓地ないし埋葬遺構は伴っていない。前述白浜貝塚晩期貝層に2体の合葬人骨を見た例を除くとして，住居空間と埋葬空間の関係はいまのところ，晩期西北九州の実態は不明瞭である。

以上，朝日山遺跡の調査内容をまとめるに当って，土器組成と扁平打製石斧を中心に眺めた場合，狭い島原半島の中のみならず，晩期遺跡群の有機的連関と基本的性格にかかわるものと考えたい。

末尾とはなったが，本遺跡の調査（記録保存）の範囲は，試掘調査によって確認した遺跡範囲の半分程度で留め得た。あとの半分は緑地として今後に残されることになったのであり，ここに至った小浜町長と関係部局者の文化財保存によせられた理解の賜であることを銘記して，本項を結びたい。

（正林）

参考文献

1. 森貞次郎　「長崎県小浜の石剣」九州考古学13　1961
2. 賀川光夫　「小浜遺跡」九州考古学14　1962
3. 鏡山　猛　「原生期の織布」九州考古学論攷　1972
4. 古田正隆　「山の寺梶木遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第1集　1973
5. 古田正隆　「重要遺跡の発見から崩壊までの記録」百人委員会埋蔵文化財報告第3集　1974
6. 宮崎市教育委員会　「松添貝塚」宮崎市教育委員会文化財報告書第2集　1974
7. 下川達彌　「長崎県小浜町の先史文化概要」町制50周年記念誌　町制おばま　1974
8. 古田正隆　「島原市の海中干潟遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第2集　1974
9. 長崎県教育委員会　「里田原遺跡」長崎県教育委員会文化財調査報告第21集　1975
10. 長崎県教育委員会　「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集」　1975
11. 福江市教育委員会　「水の窪遺跡」1976
12. 吾妻町教育委員会　「中熊台地遺跡」吾妻町文化財調査報告第4集
13. 古田正隆　「礫石原遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第7集　1977
14. 大村市黒丸遺跡調査会　「黒丸遺跡」　1980
15. 佐世保市教育委員会　「宮の本遺跡の概要」　1980
16. 福江市教育委員会　「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書第2集　1980
17. 西海石油共同備蓄株式会社，長崎県教育委員会　「ケイマンゴー遺跡」長崎県文化財調査報告書第52集　1980

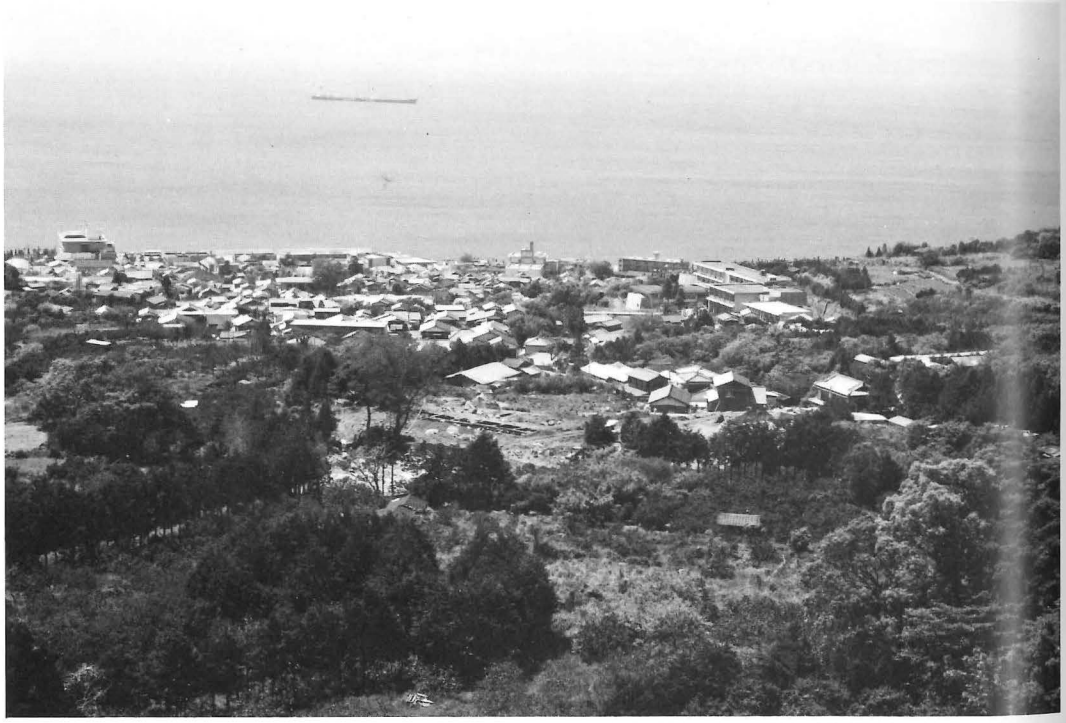
図　　版

1. 小浜遺跡　2. 朝日山遺跡　3. 黒谷遺跡

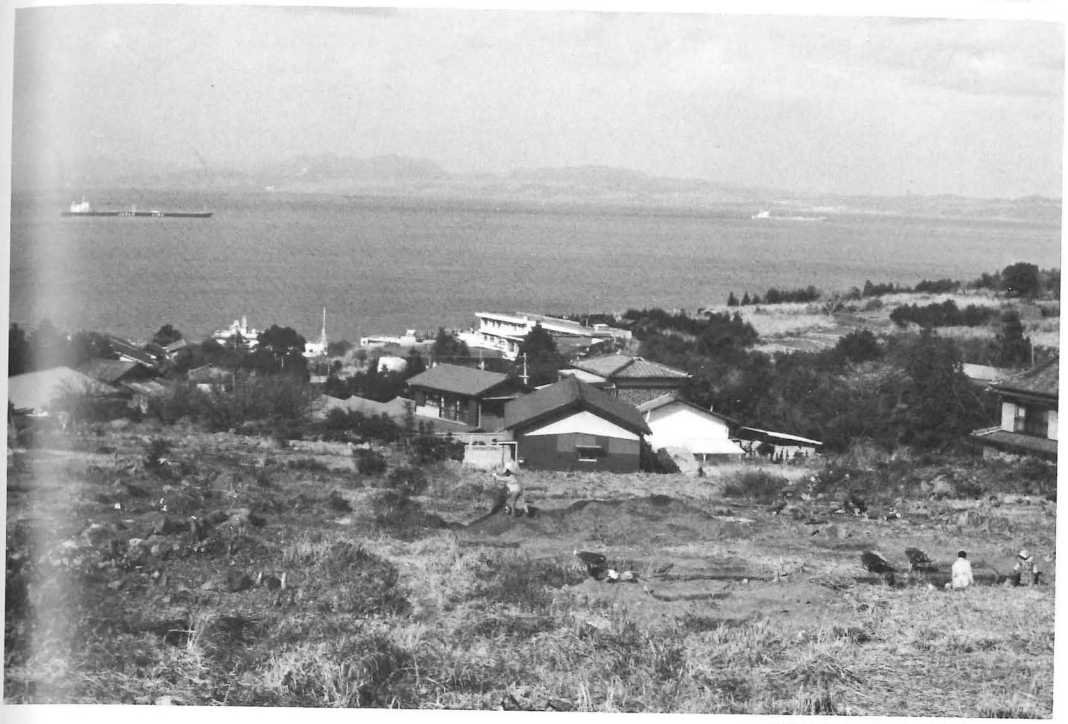
朝日山遺跡と周辺の空中写真

図版 2

朝日山遺跡遠景（北側から望む）



朝日山遺跡遠景（東側から望む）



遺跡から千々石湾を望む

試掘調査風景

図版 4

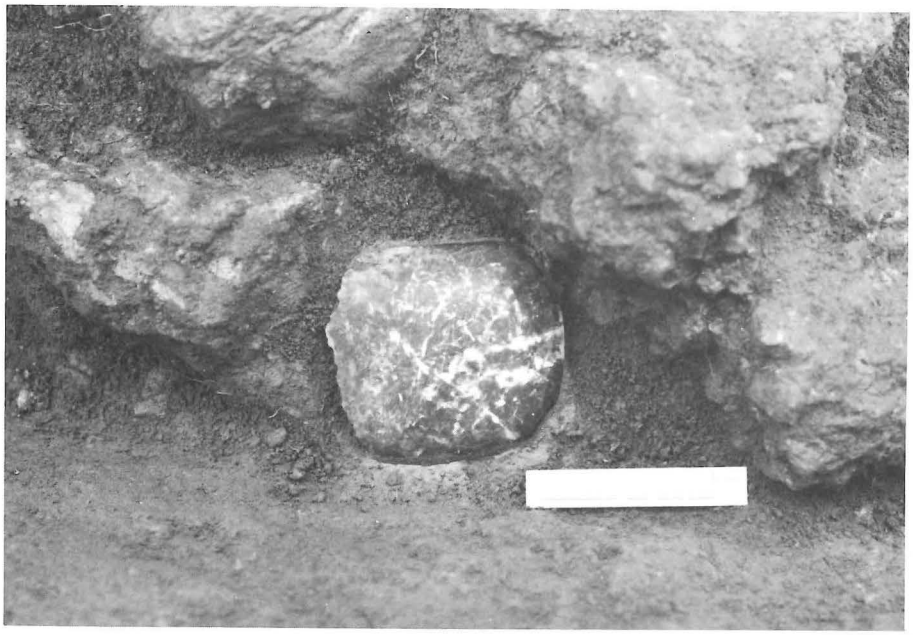
第 7 試掘壙

第22試掘壙

第10試掘壙

試掘壙　土層

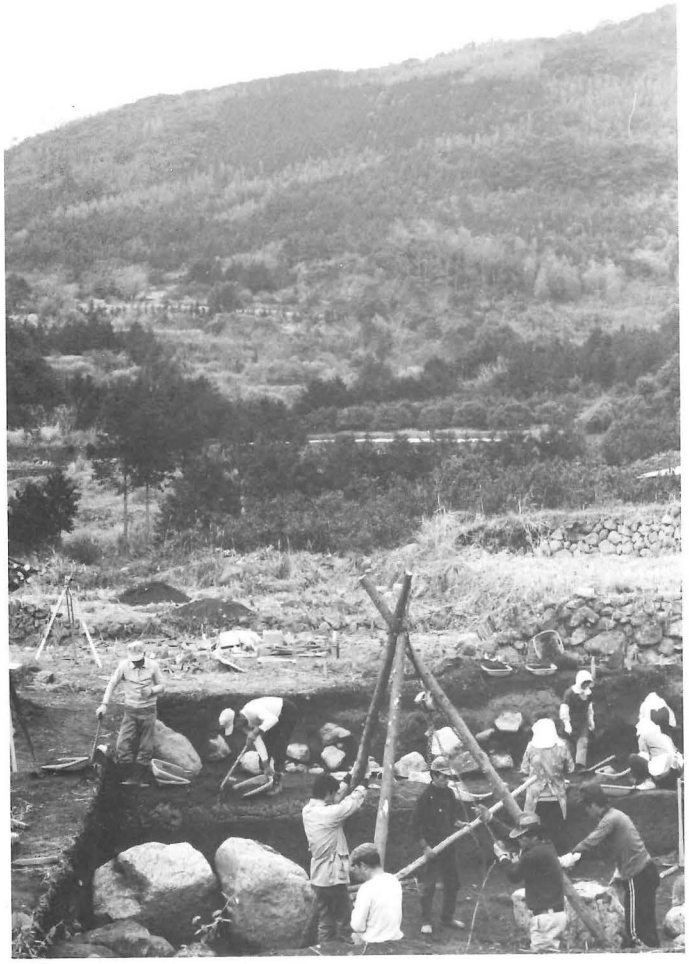
第13試掘壙炉址



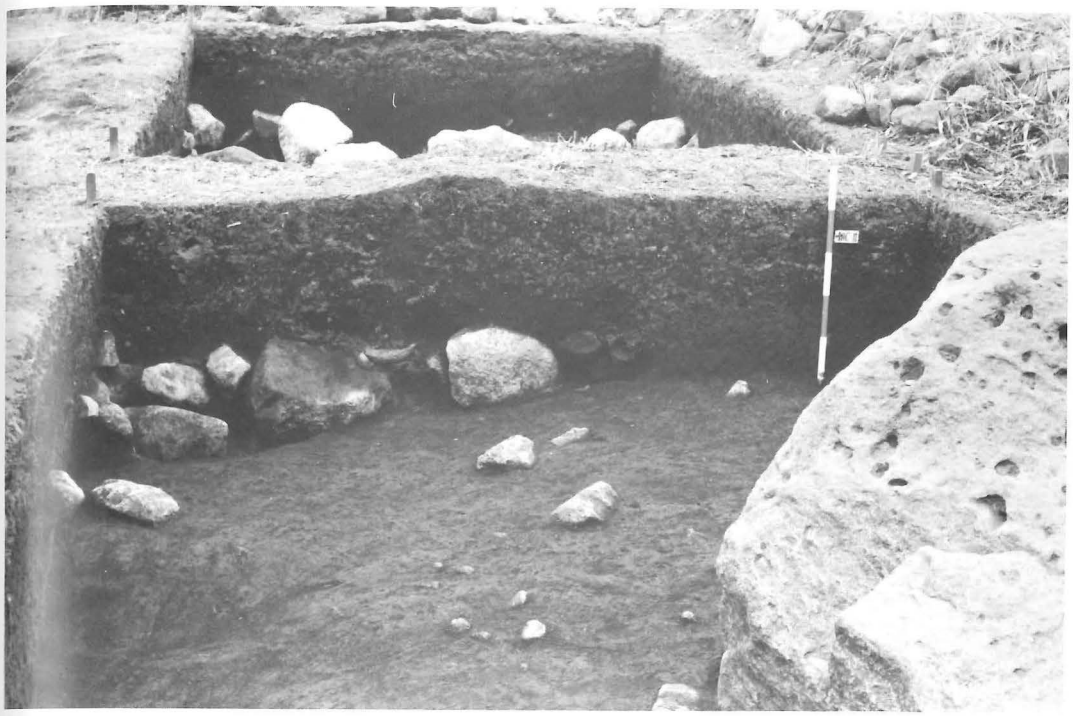
第28試掘壙磨製石斧出土状況

試掘調査時の遺構・遺物出土状況

図版 6



C地点調査風景



C－2 区北壁

C地点　土層(1)

C－4 区北壁

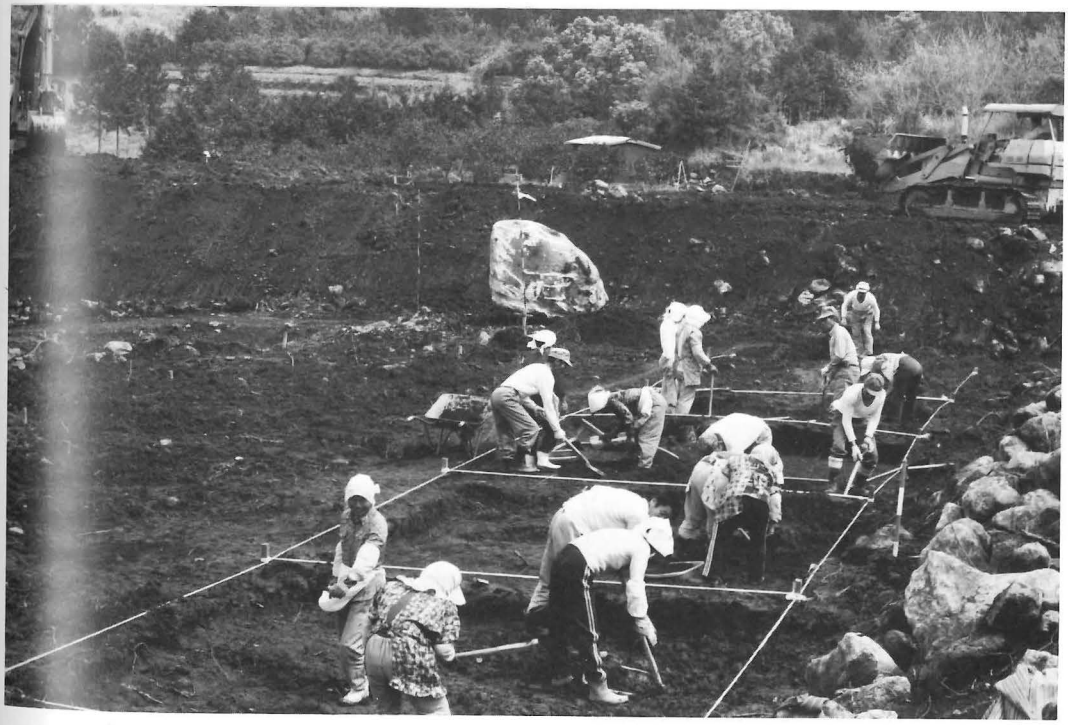
図版 8

C－3 区東壁

C地点　土層(2)

C－4 区東壁

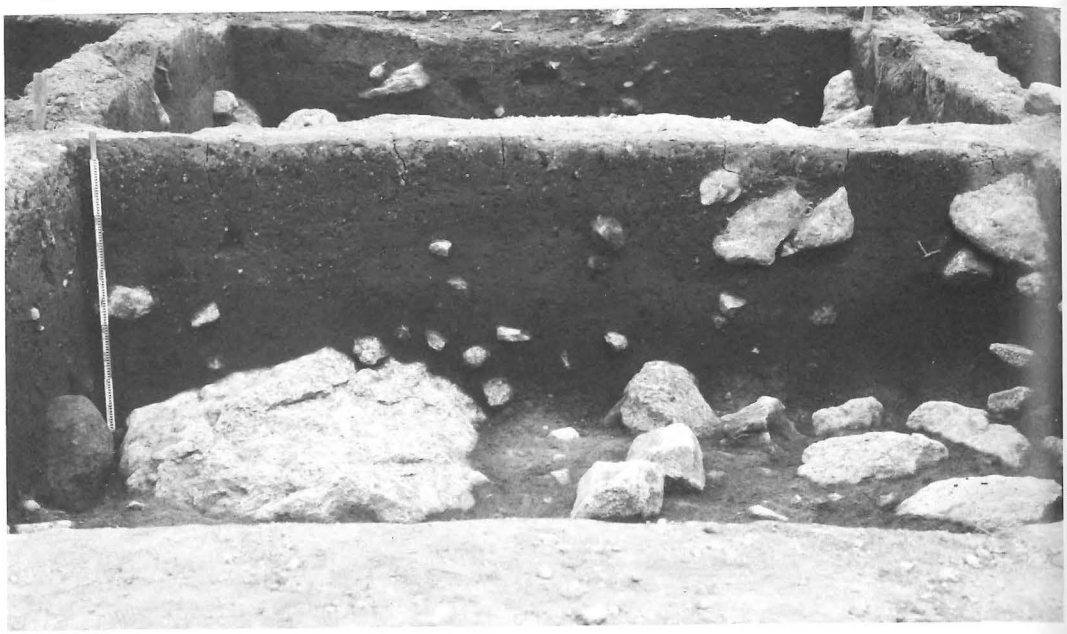
遠景



近景

B地点　調査風景

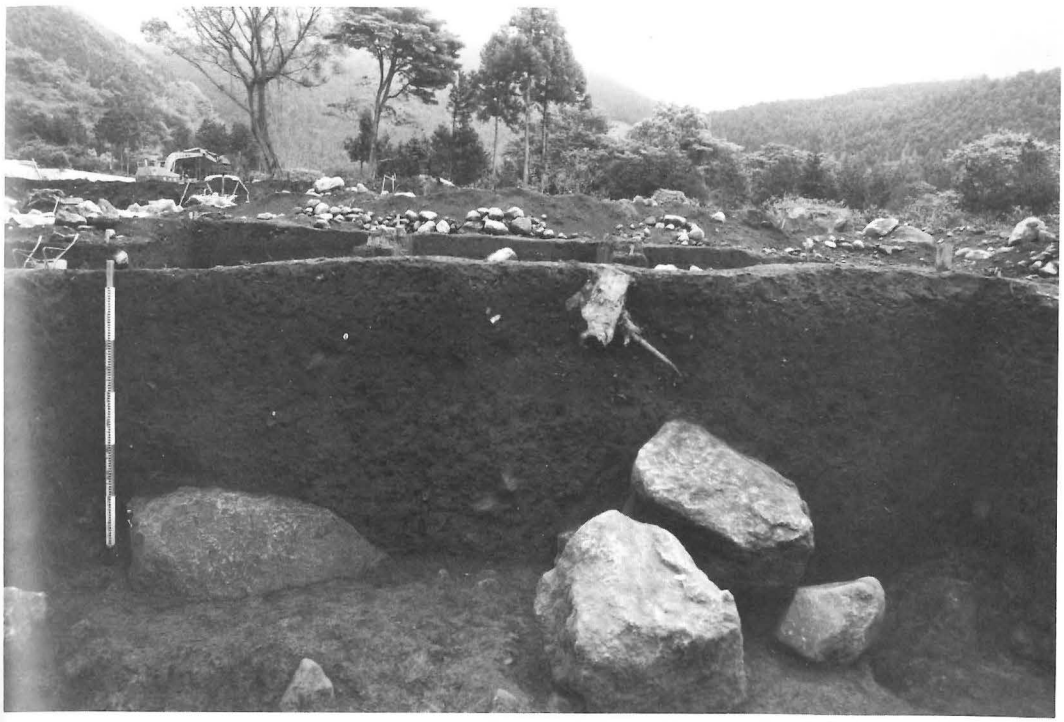
図版10



B地点・A－2東側土層

B－4東側土層

B地点　土層(1)

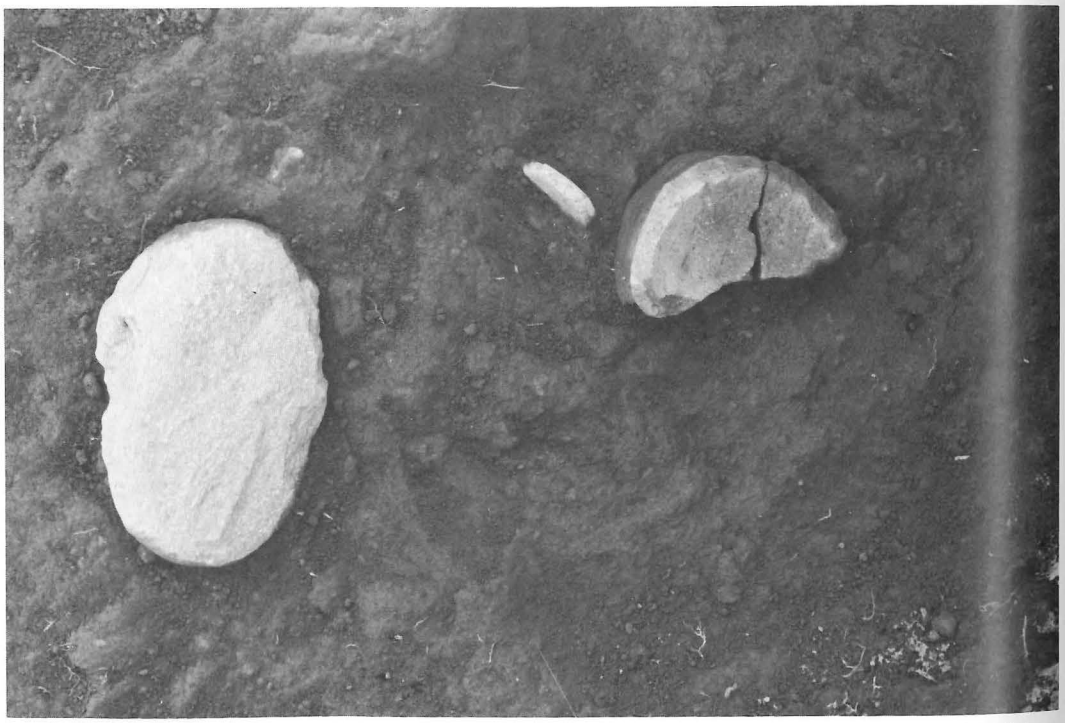


B地点・C－3東側土層

C－3北側土層

B地点　土層(2)

図版12



B地点　遺物出土状況(1)

壺形土器

網目痕土器

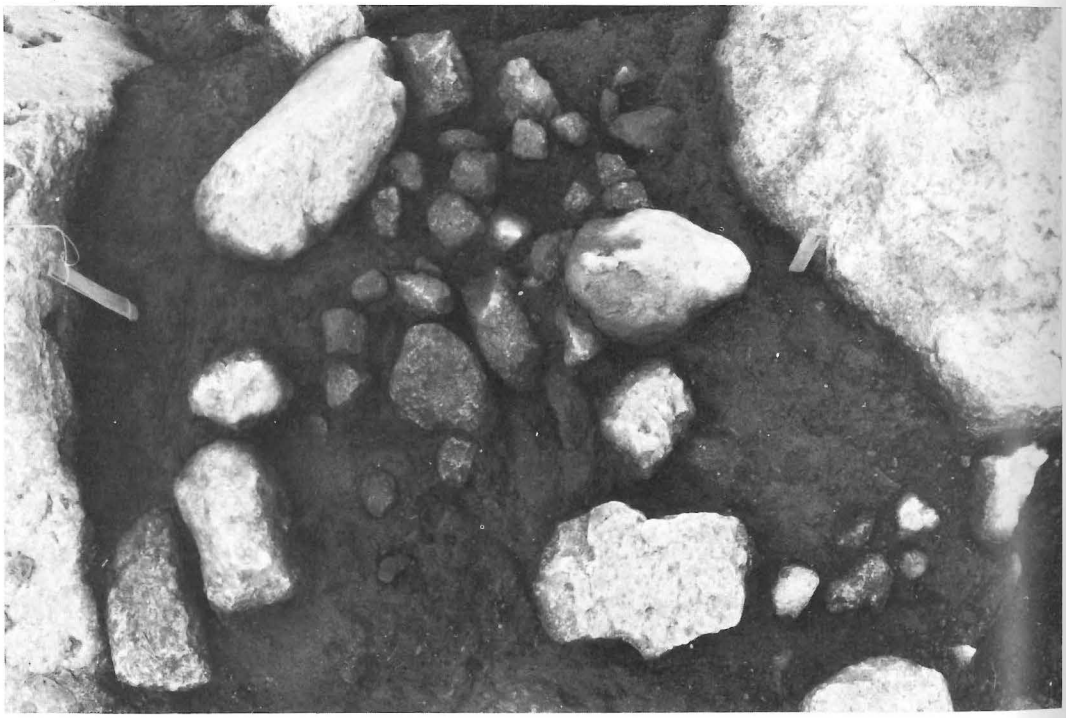
磨製ノミ形石器

小形磨製石斧

B地点　遺物出土状況(2)

図版14

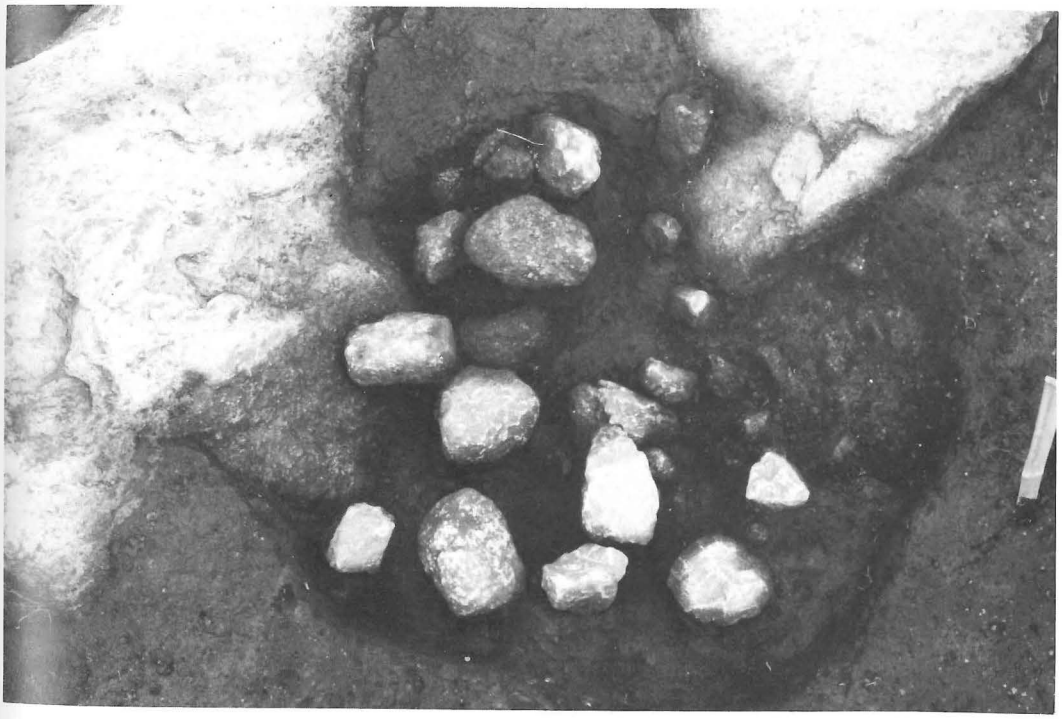
(1)



(2)

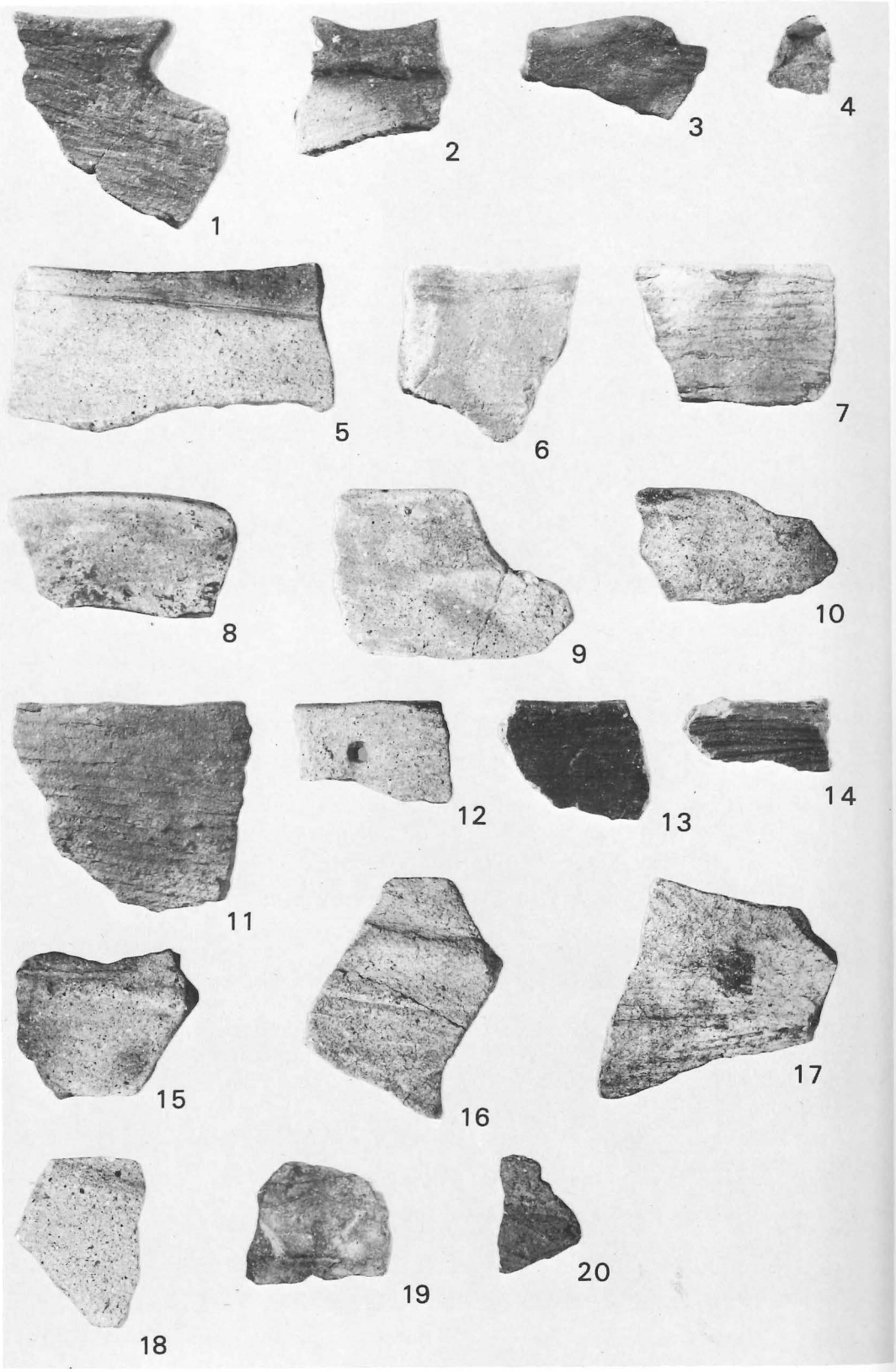
B地点出土の炉址

(1)

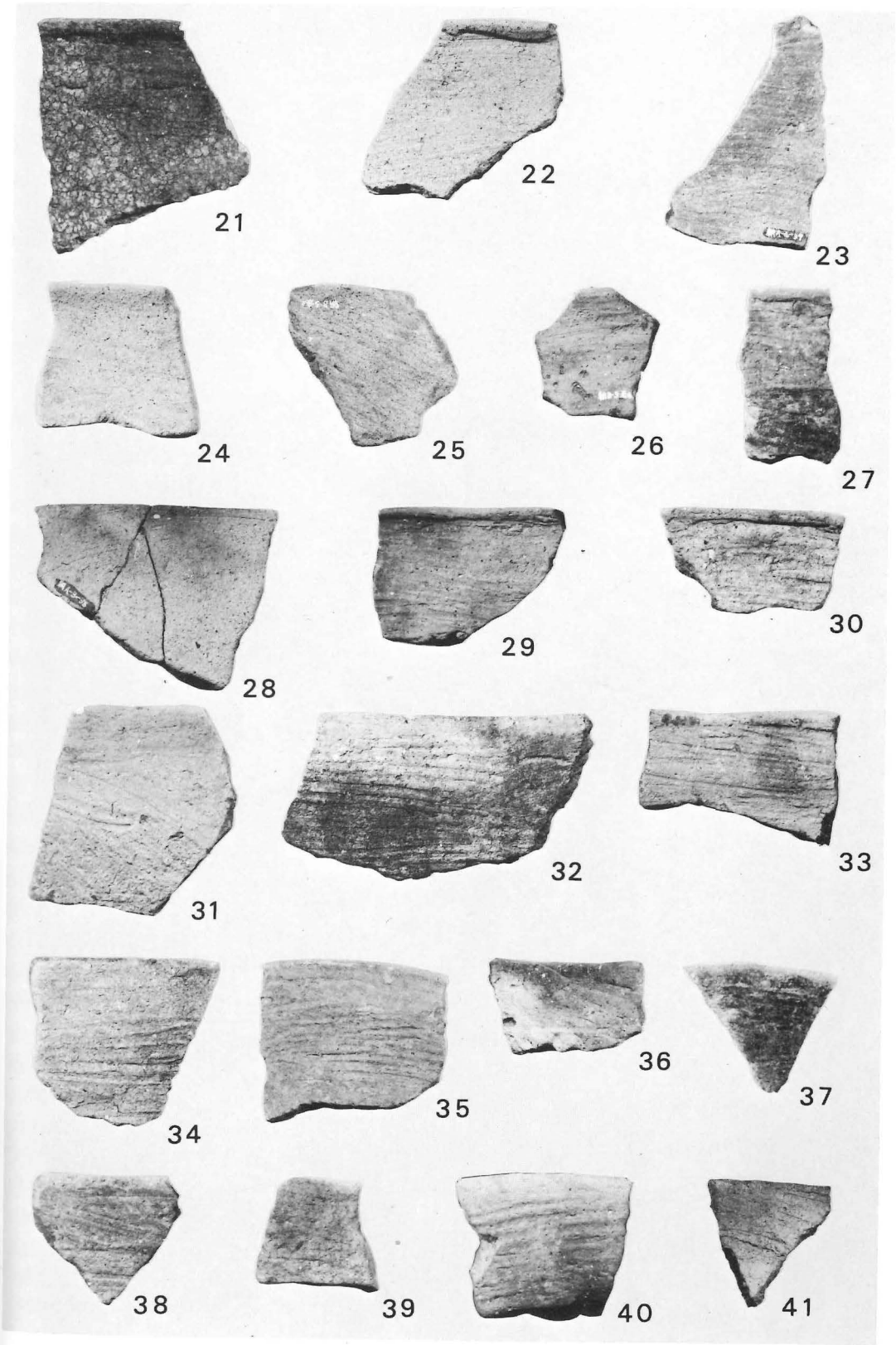


(2)

B地点出土の2号集石

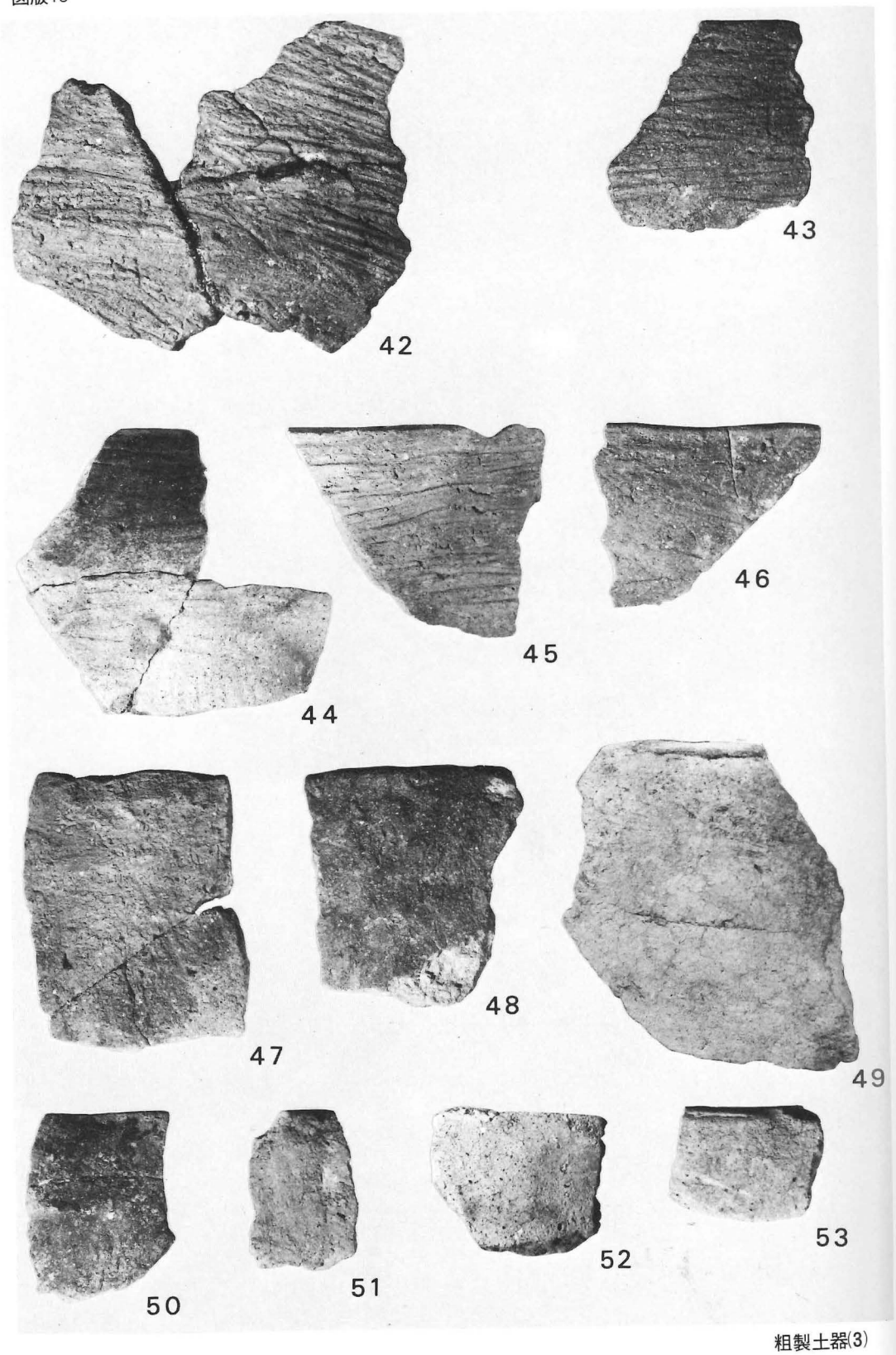


粗製土器(1)



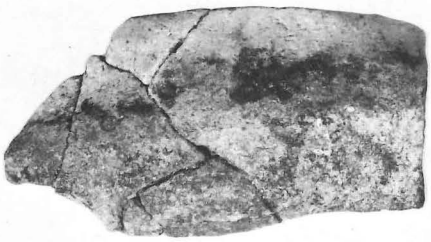
粗製土器(2)

図版18

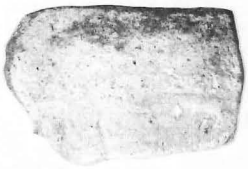


粗製土器(3)

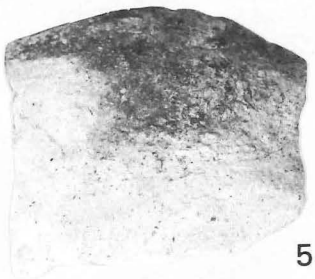
54



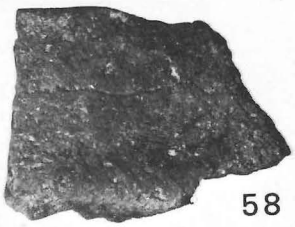
55



56

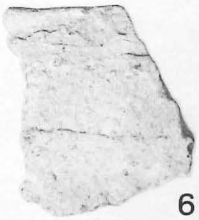


57



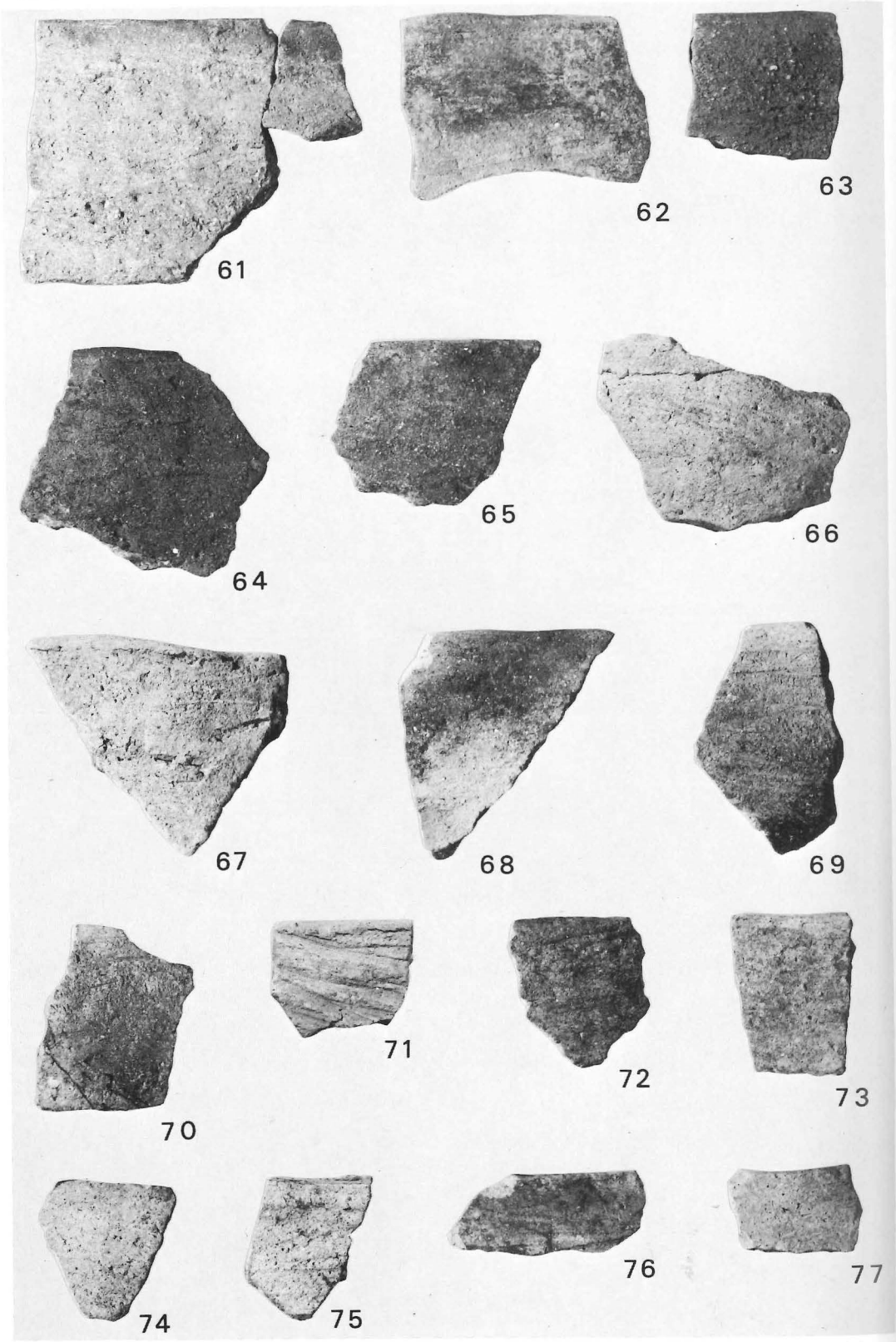
58

59

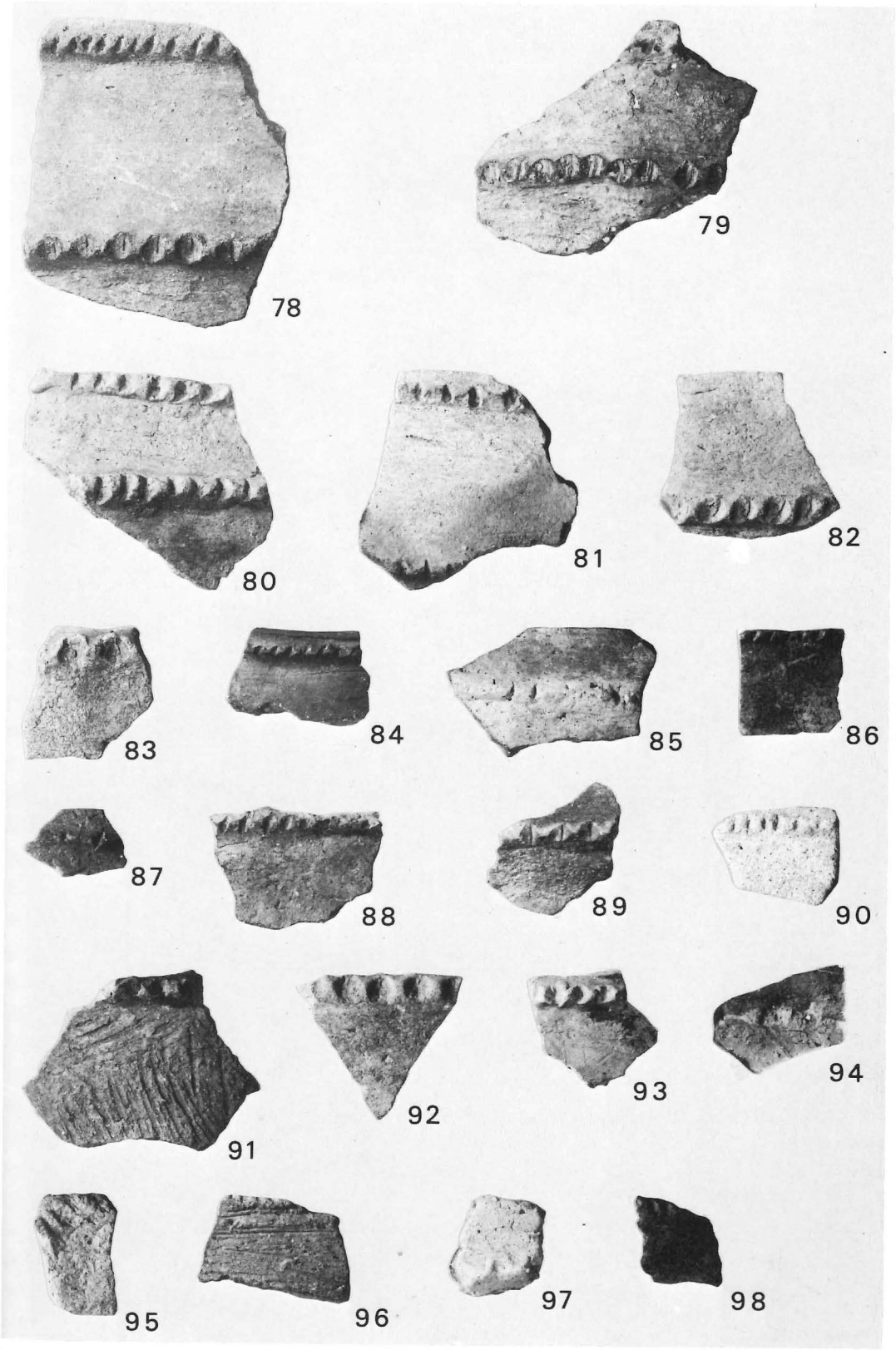


60

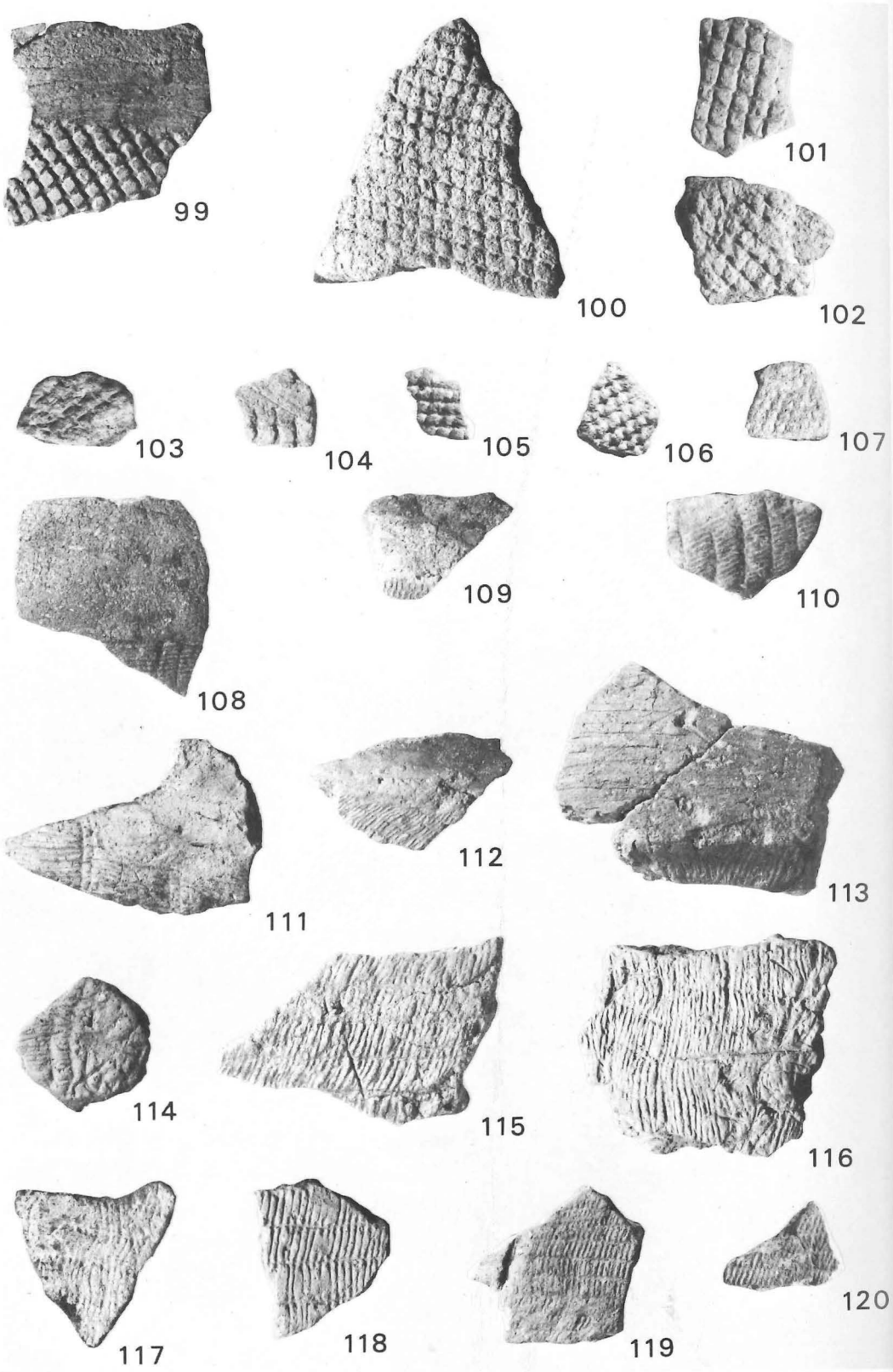
粗製土器(4)



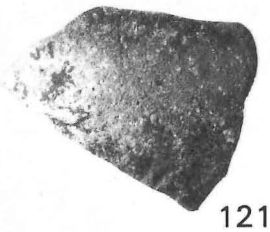
粗製土器(5)

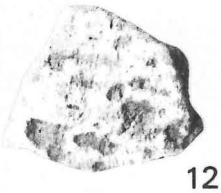


刻目突帯文土器(6)


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120

組織痕土器(1)


121


122

123

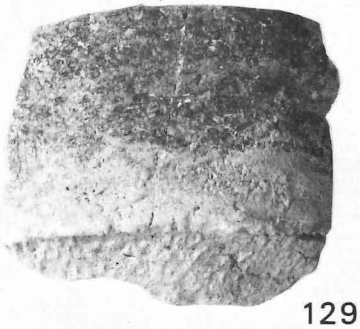
124

125

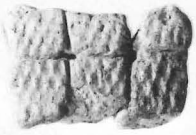
126

127

128


129

130

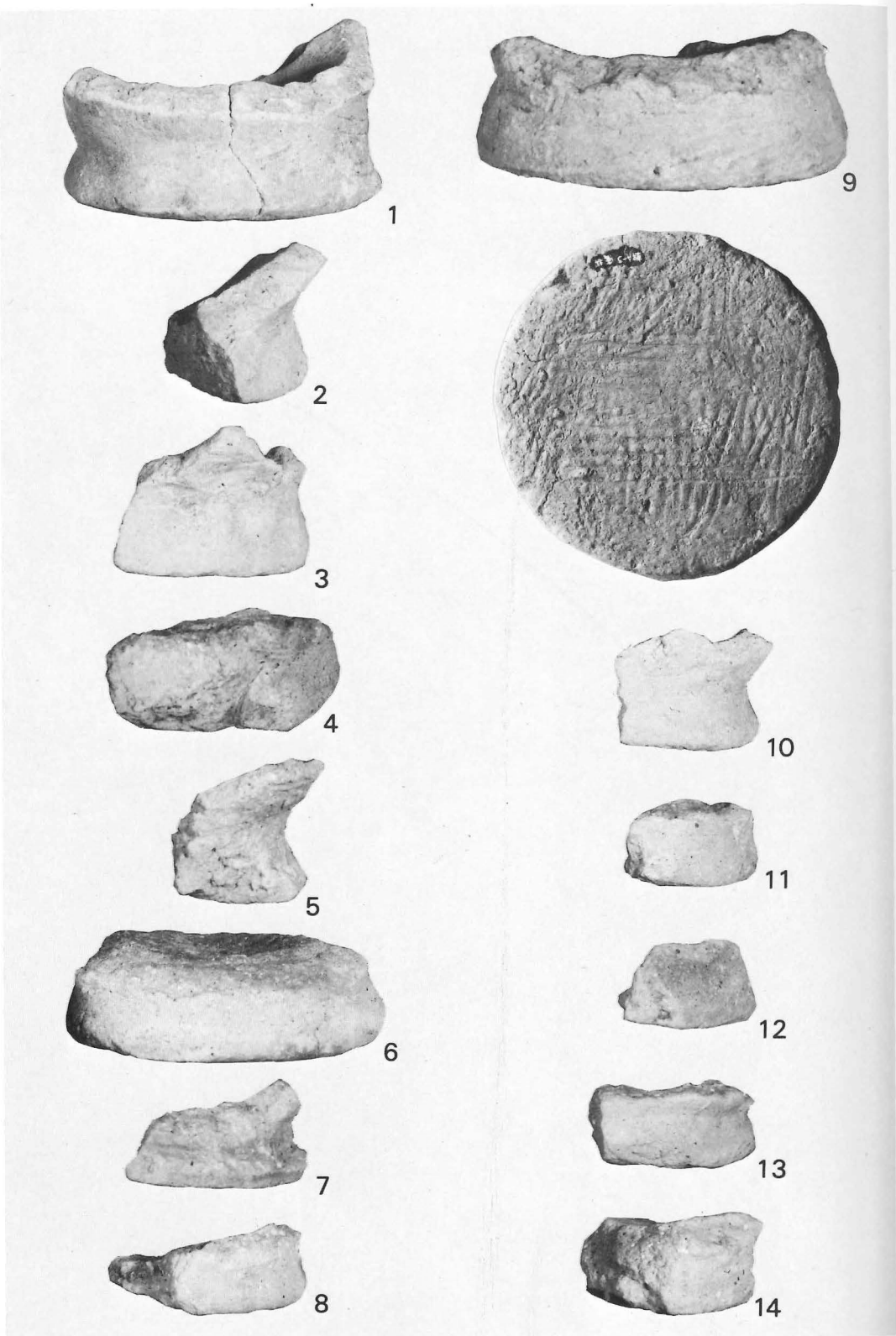

131

132

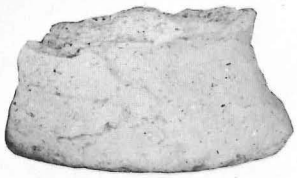
133

134

組織痕土器(2)

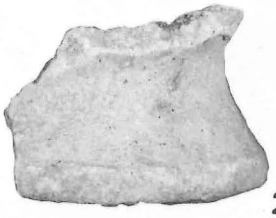


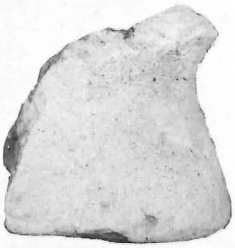
粗製土器底部(1)


15

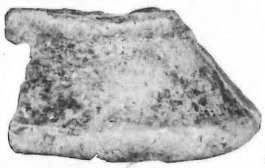
20

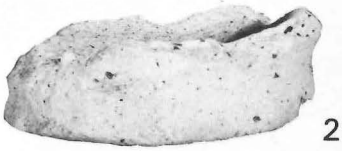
16


21


17

22

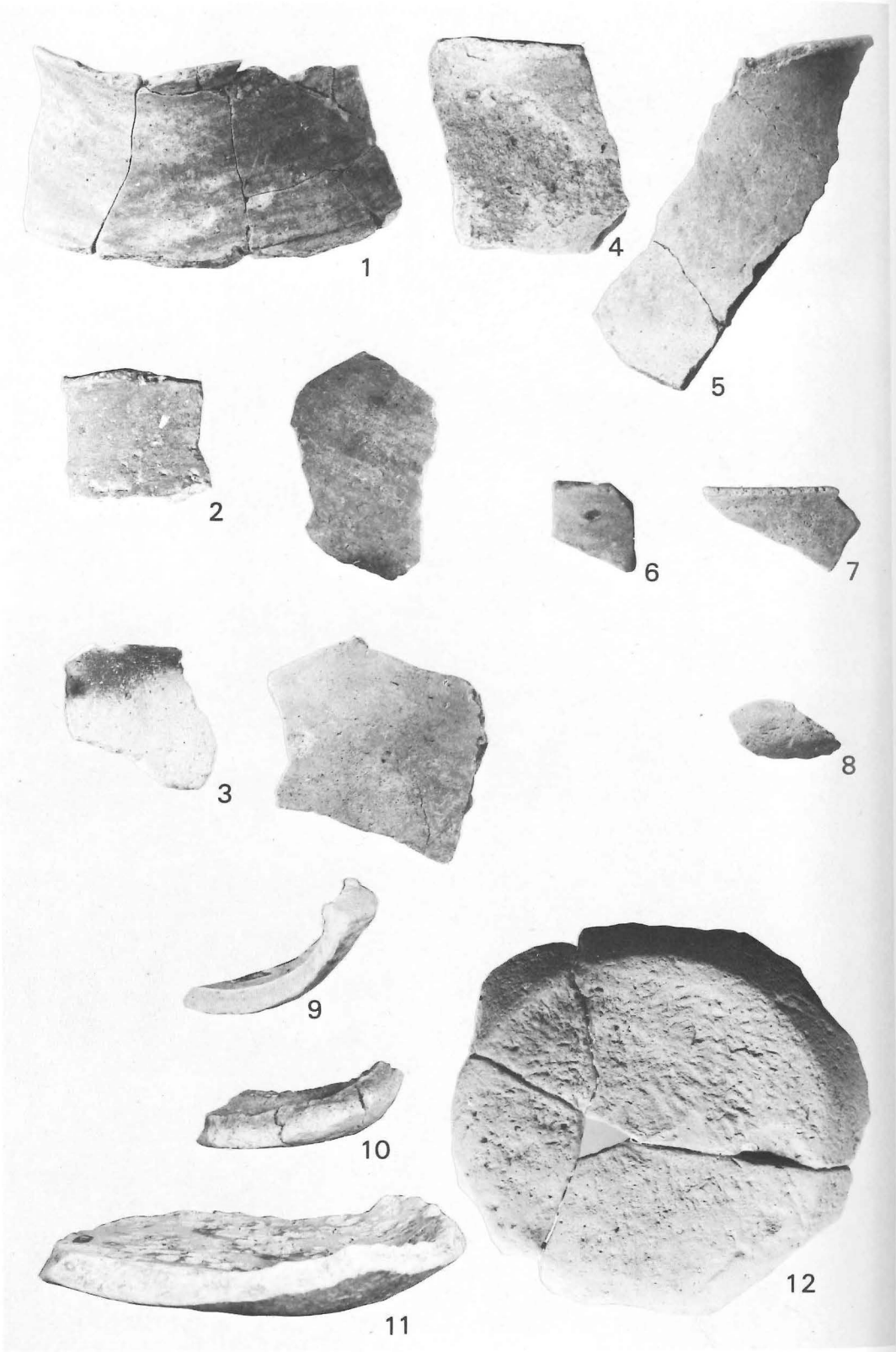

18


23

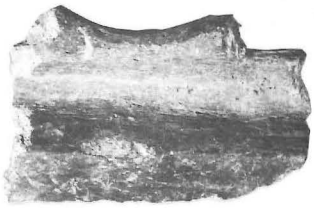
19

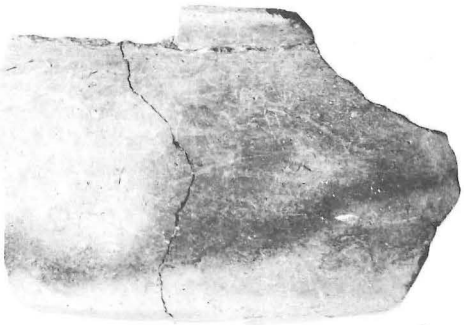
24

粗製土器底部(2)



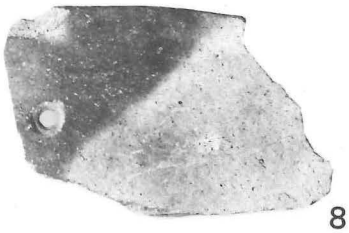
精製土器(壺類)(1)

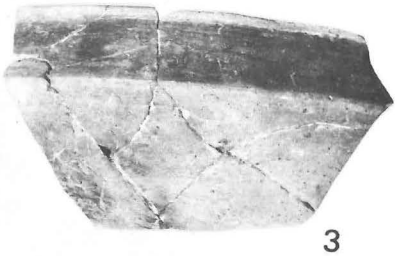

1


6

2

7

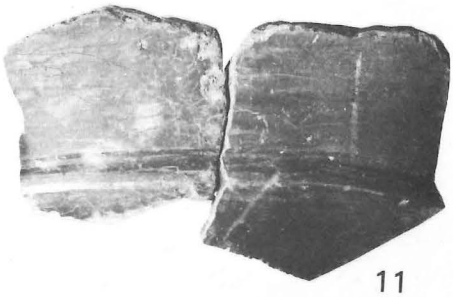

8

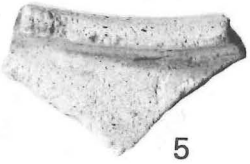

3

9

10

4

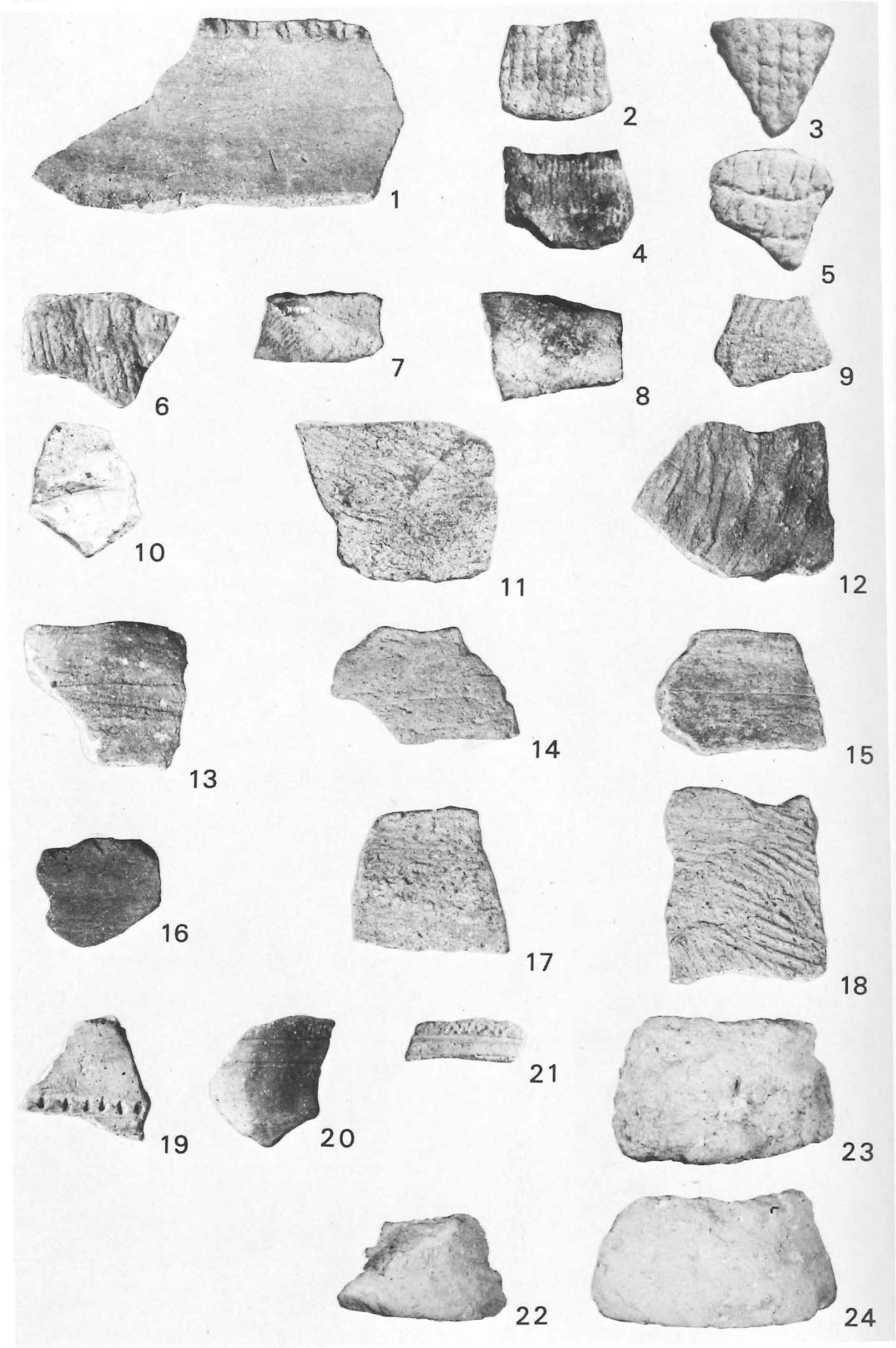

11


5

12

精製土器(浅鉢類)(2)

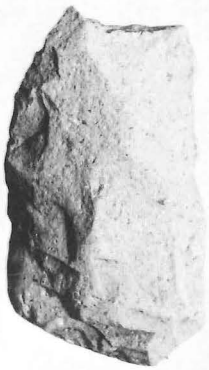
図版28



下川氏採集およびその他の土器

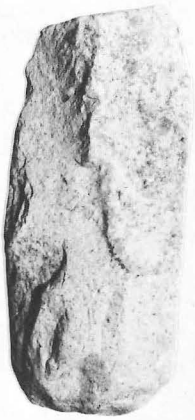
1

2

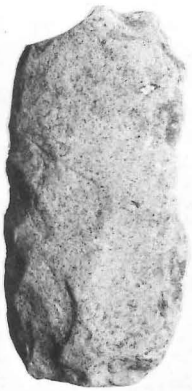

3

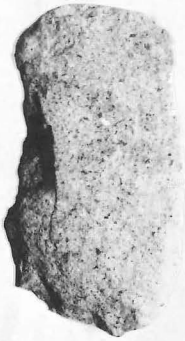
4

5


6

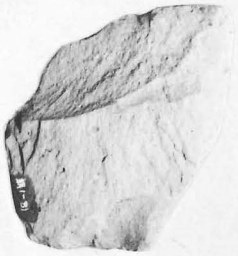
7


8

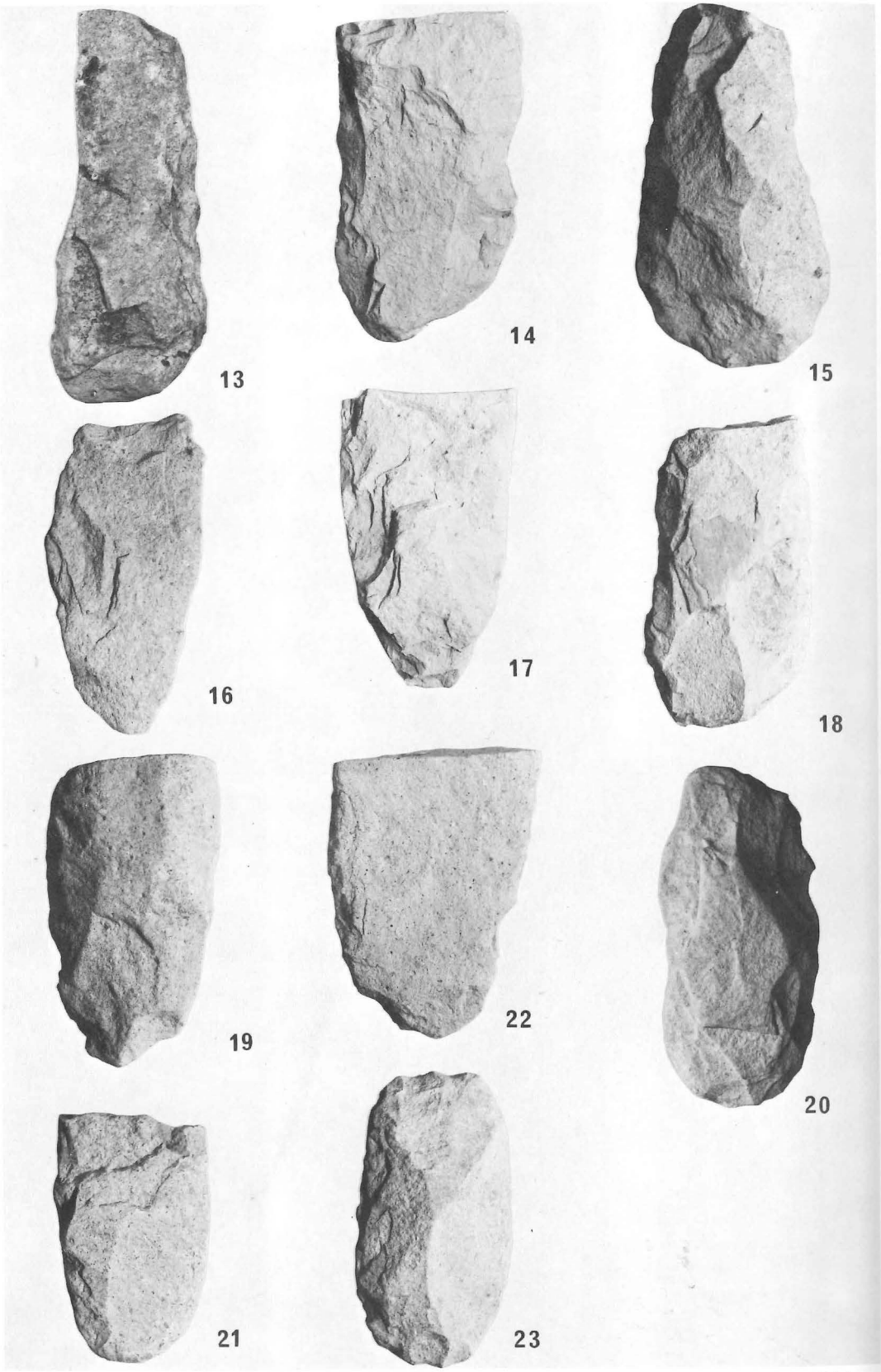

9

10

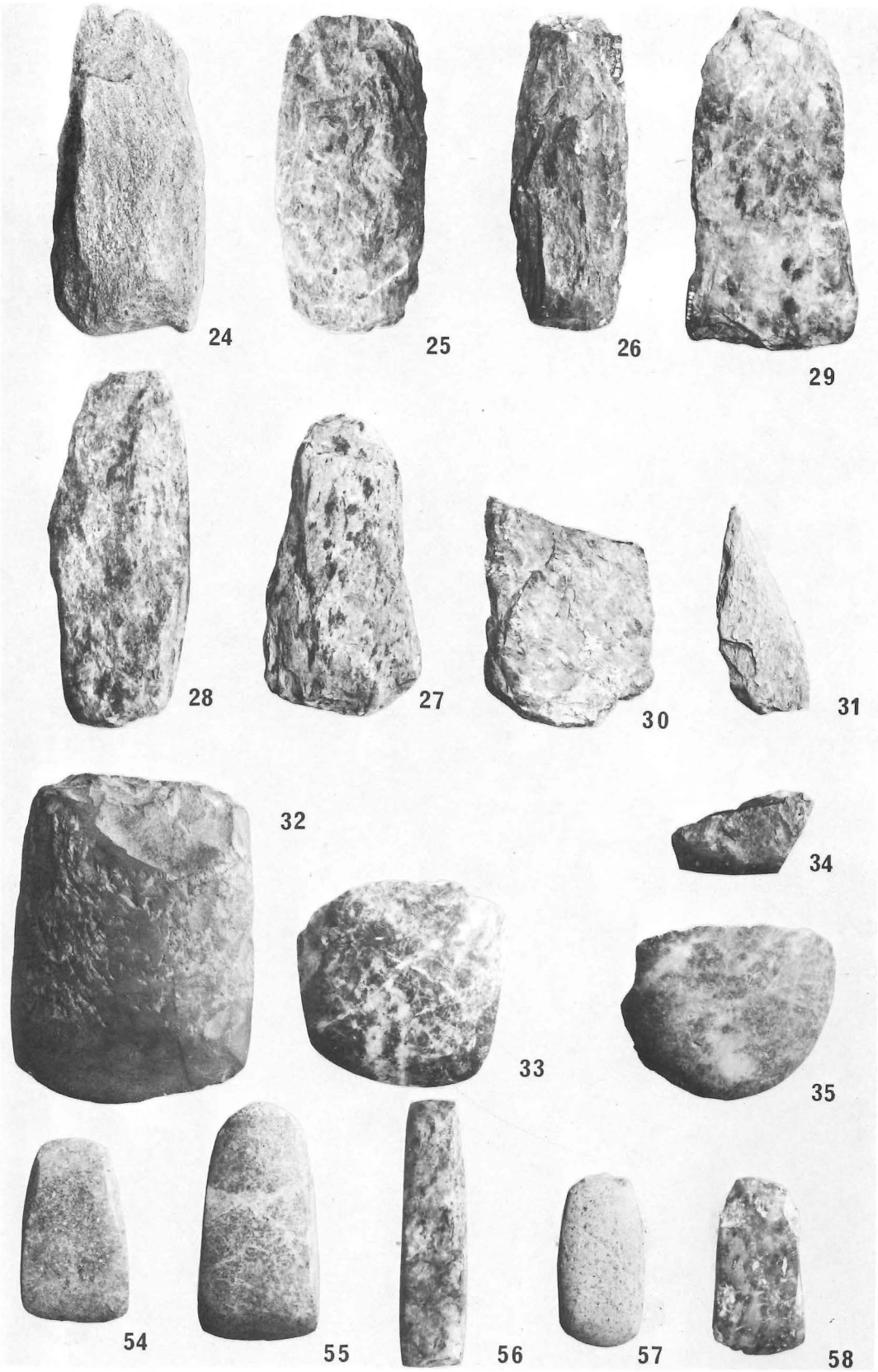
11


12

石　斧(1)

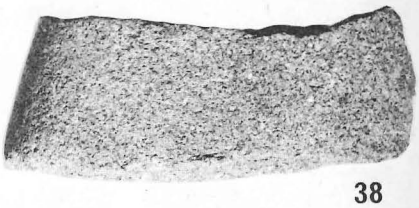


石　斧(2)



石　斧(3)

36



38

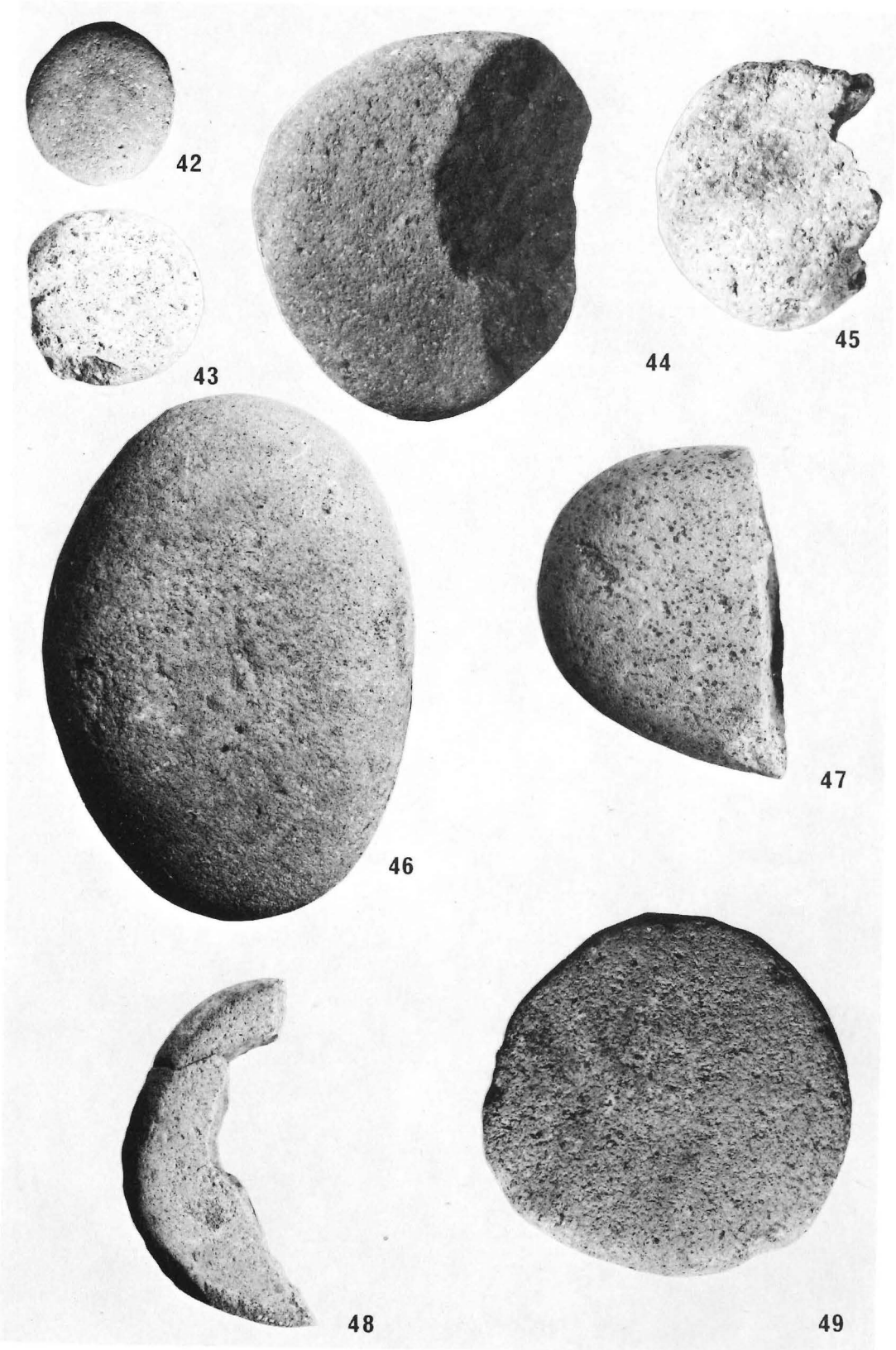
39

40

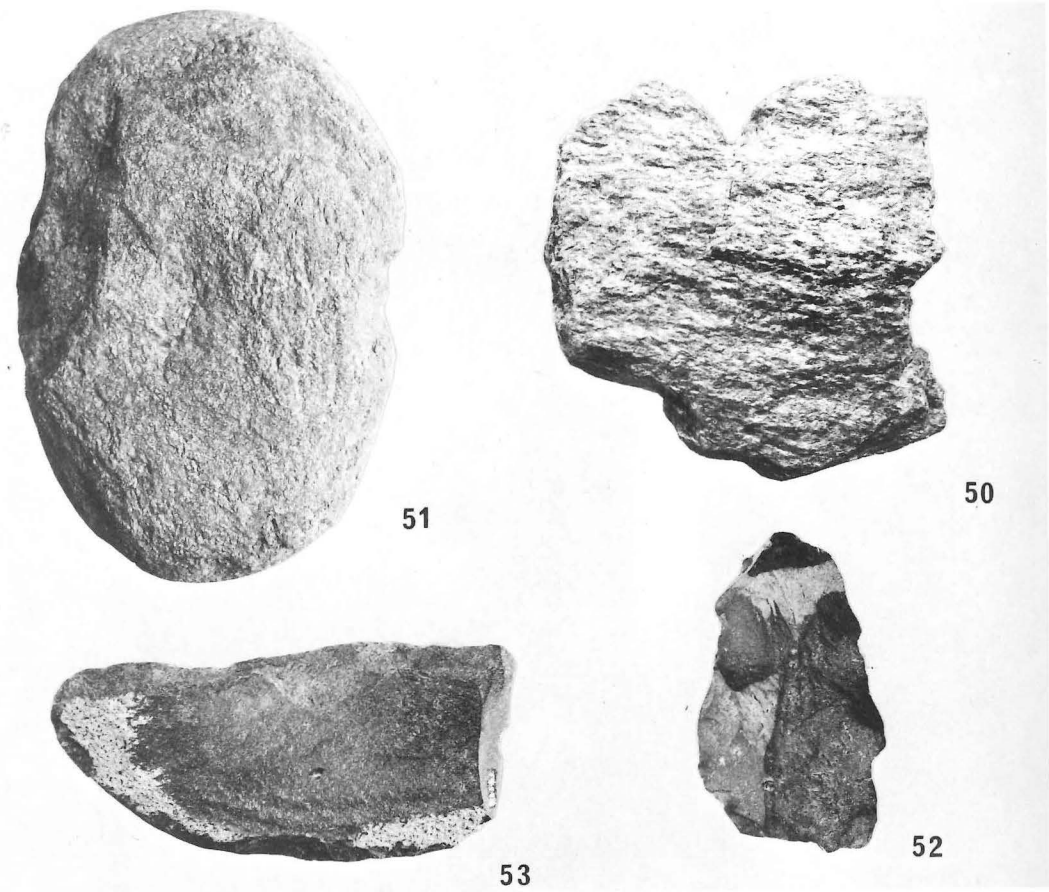
37

41

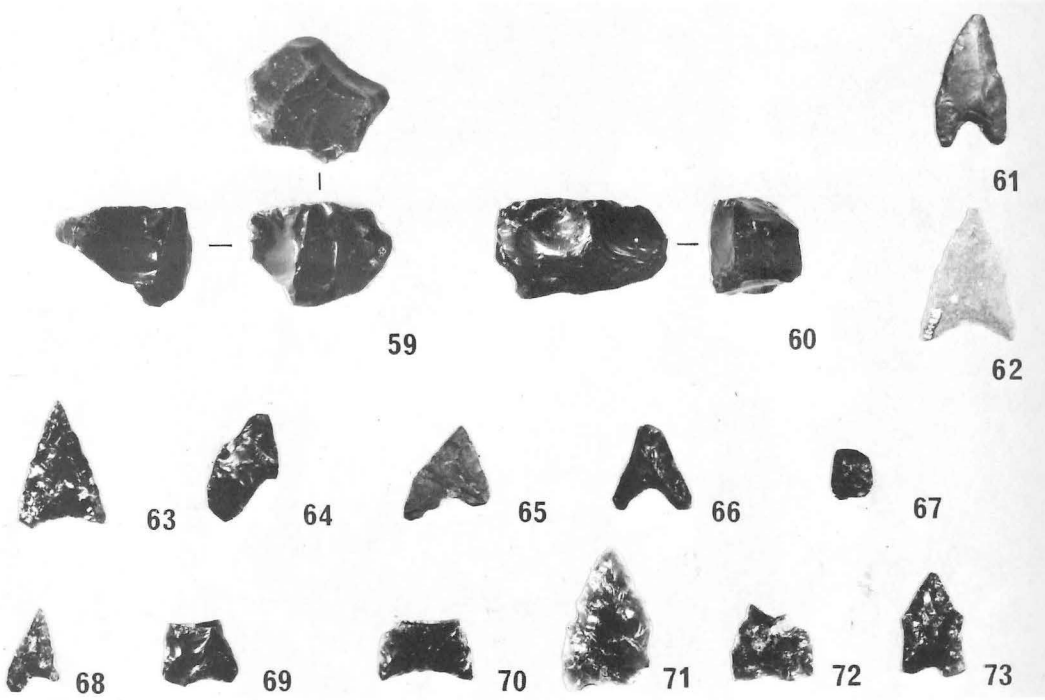
各種石器(1)



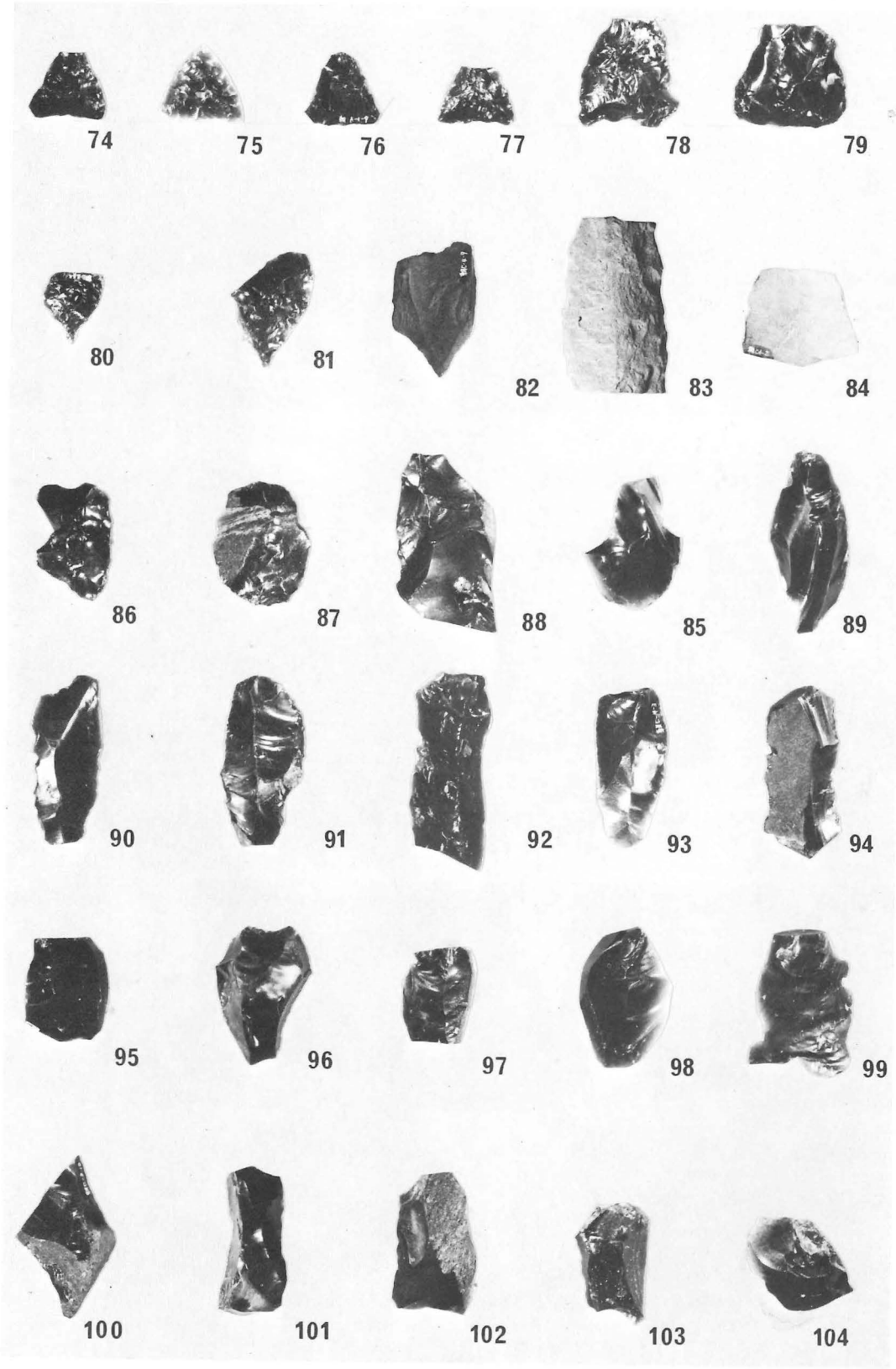
各種石器(2)



各種石器(3)



剥片石器(1)

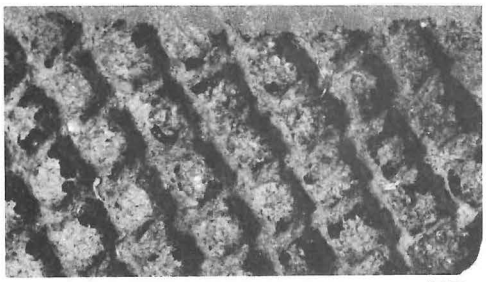

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
86
87
88
85
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104

剥片石器(2)

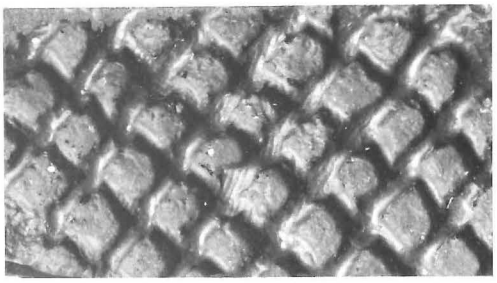
図版36

網目

モデリングによる陽像

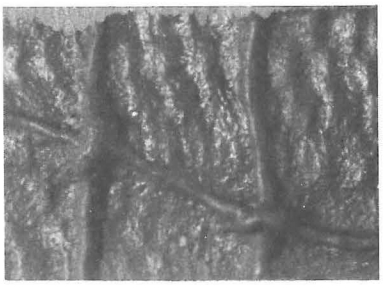


網目



モデリングによる陽像

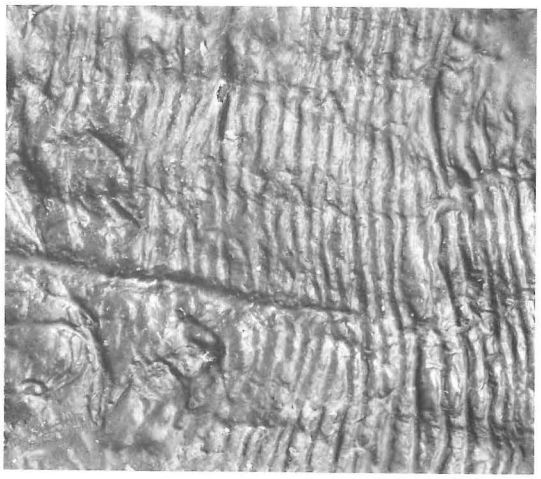
網目と籠目の組合せ



モデリングによる陽像

モデリングによる網目痕土器の比較

蓆目

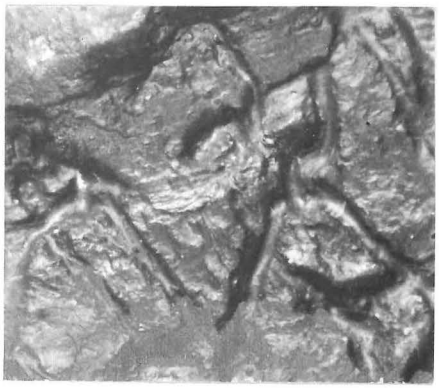


モデリングによる陽像

網目

モデリングによる陽像

蓆目



モデリングによる陽像

モデリングによる組織痕土器の比較

図版38

小浜高校生の現地見学会

調査終了後のＢ地点全景

B地点の調査に参加した人達

C地点の調査に参加した人達

小浜町文化財調査報告書 第１集

朝 日 山 遺 跡

昭和56年３月31日

発行所　小浜町教育委員会

印刷所　日 本 紙 工 印 刷
長崎市興善町２－６